



# ハワイアン・ハーモニック・ハネムーン

前橋梨乃

公開版

*for Smart Phone*

## Contents

第1楽章 楽園への招待状

第2楽章 魔法の呪文

第3楽章 虹のゲート

第4楽章 渚のマリオネット

第5楽章 プリンセスラインの神話

第6楽章 夢の波音

第7楽章 夕映えの航跡

第8楽章 星の指輪

★タップすれば各章へジャンプします

第1楽章  
楽園への招待状

Title: 当選のお知らせ

Date: Fri, 11 May 1999 15:52:40 +0900

From: Akemi Ogiwara <ogiwara@eiko-pub.co.jp>

To: LE97014@johoku-u.ac.jp

高岡和音様

前略

ご婚約、おめでとうございます。

結婚情報誌「グローリー・ウエディング」編集部の荻原と申します。

さて、さっそくですが、過日、

ご応募いただいた当誌主催のインターネット懸賞募集「創刊三周年記念プレゼント ふたりだけのハワイアン・ウエディング」において、審査選考の結果、高岡様のご当選が決まりました。重ねて、おめでとうございますを申し上げます。

応募総数1867組のご婚約カップルの中から、最終選考に残った10組の応募メールを厳正審査し、また、ご添付いただいた写真画像を拝見し、体験ツアーの雑誌グラビア記事掲載には、高岡様と井上秀明様のカップルが最適と判断いたしました。

メールに高岡様が書かれていら

した「お互い親に反対されている学生同士の結婚、祝福してくれる人もなく、満足な結婚式も挙げられません。一生に一度の思い出に、夢のような気分が味わえれば、これからの長い結婚生活にも勇気を持って臨めます」というくだりには、当誌編集部一同、感動し、ぜひとも高岡様たちお二人に行っていただきたいと考えた次第です。

また、今回の企画のメインスポンサーである米国ハワイ州観光協会様にも画像を送りましたところ、高岡様のチャーミングなお姿は、きっと青い海と純白のウエディングドレスに映えるにちがいないと、

強いご推挙がございました。

募集のホームページでもお知らせいたしましたように、今回の賞品は、ハワイでの結婚式とハネムーン一式です。

往復のファーストクラス航空運賃はパンユニバーズ航空様から、ワイキキ・ロワイヤル・ホテル エクセレント・スイート・ルーム 5泊のご宿泊代、および滞在中のお小遣い1万ドルはハワイ州観光協会様から、また、式場となるセント・カラワオ教会での挙式費用は、当誌よりのプレゼントです。

なお、応募の条件ともなっておりますとおりましたとおり、お二人の出発から現地での挙式、ハネムーンの様子を、当誌誌面およびホームページ上で読者のみなさんにご紹介させていただきたいと考えております。その取材のため、私、荻原およびカメラマン1名が同行させていただきます。

お二人の大切な思い出づくりや甘い時間をお邪魔しないようにいたしますので、どうぞご容赦ください。

さらに申しわけないお願いなのですが、出発は、こちらの予定と



しては、6月の1週目または2週目を考えております。今年のハワイ州観光キャンペーンの日程がくりあがり、当誌8月号での掲載が決まった結果、その締め切りの関係から、6月上旬に取材を完了したいのです。高岡様、井上様のご予定もうかがわず、勝手にもうしますが、よろしくご検討ください。

そんな事情で、早急に事務手続きを進めたいと存じます。とりあえず、メールでも電話でもけっこうですから、ご連絡をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

す。

それでは、高岡様のかわいらしいウエディングドレス姿を拝見するのを、心より楽しみにしております。

栄光出版株式会社

「グローリー・ウエディング」

編集部

荻原 朱美

E-mail [ogiwara@eiko-pub.co.jp](mailto:ogiwara@eiko-pub.co.jp)

電話(ダイヤルイン)03-XXXX-XXXX

「……なんだ、これ？」

国際関係学部の学生用コンピュータールームで、そのメールを読んだ三年生の高岡和音かずねは、ぽかんと口を開けたまま固まった。

やっと仕上げたアメリカ外交史のレポートを教授宛に送信しようと、ネットワークにパスワードを打ち込んだとたん、「ピッ、ピ」と電子音が鳴って、インタ

ーネット経由でそのメールが届いているのを知らせてきた。それで、とりあえず開いてみたのだが……。

和音は首をひねり、そのメールをもう一度頭からじっくり読み返した。

ID、つまり学籍番号がそのまま転用されたメールアドレスも、そして冒頭に書いてある宛名も、自分のものにちがいない。だから、アドレスの打ちまちがいとかいような誤信メールでないことだけはたしか

だ。

それなのに、書いてあることがちんぷんかんぷんだ。

「前略」の後の一行目からして、すでにわからない。

ご婚約、おめでとう……？

もちろん、自分は婚約なんてしていない。だいいち、これまでまともに女の子とつき合ったことすらないのだ。当然、結婚なんてこと、一度だって考えたことはない。

その上、あとに続く文面は、さらにわけのわからな  
いものだ。

どうやら自分は、なにかの懸賞に当選したらしい。  
で、その賞品は、ハワイでの結婚式と新婚旅行だとい  
うのだ。

もちろん、そんな懸賞に応募した覚えはない。

それにだいいち、このメールは、根本的などころで  
勘違いしている。どう読んでも、この文面は、女性に

宛てたものだろう。

つまり、書かれていることのほとんどすべてが、まちがった前提に立った、まったく身に覚えのないことばかりなのだった。

ただ：：。

文中の一カ所だけ、はっきりと、明確に、うんざりするくらい確実に、思い当たるふしがあった。そこに、いやというほどよく知っている人間の名前があったの

だ。

井上秀明：：また、あいつだ。

僕がとんでもないことに巻き込まれる原因は、いつだってあいつなんだ。

和音は大きなため息をひとつつきながらそう思い、  
メーカーの印刷のアイコンをクリックした。問いつめるには、まず証拠品がいる。

幸い、この部屋のLAN上には、印刷待ちのファイ



ルはなかつたようで、ずらりとパソコンが並ぶデスクの端に置かれたレーザープリンターは、すぐプリントした紙を排出しだした。

メールを閉じたあと、急いで席を立った和音は、プリンターのそばまで行ってその中身を確認すると、それをひつつかみ、部屋を出ていこうとした。

と、和音の隣のコンピューターに向かっていたクラスメートの藤原が、声をかけた。

「おい、高岡。レポート送らなくてもいいのかよ。締め切り、4時だって言ってたぞ」

「わりい。メーカー、僕のIDであけっぱなしだから、そのまま送信しといてくれよ。こっちは、それどころじゃないんだ」

その言葉に、藤原がさらになにか言いかけたときには、和音はすでに部屋を飛び出していた。

山麓の田園地帯にある城北大学のキャンパスは、やたらに広い。

受験の時にもらった入学案内のパンフレットには、「東京ドーム80個分の広さ」とか自慢げに書いてあって、和音も、広々とした開放的な大学を思い描きあげられたのだが、実際にここで学生生活を送ってみれば、この広さは、不便さ以外の何もものでもなかった。

講義と講義の間の移動時間だけで休み時間のすべて

を使ってしまおうほどのものだ。同じ学科内だけでもそうなのだから、他の学部に行こうと思ったら、なおさらだった。

ことに、和音のいる国際関係学部から工学部までだと、キャンパスの端から端までを横断することになり、普通に歩いたら、十五分以上かかってしまう。だから、国際関係学部三号棟の出口を出た和音は、そこに藤原の自転車があるのを見つけ、無断で借用することにし

た。

「……くそっ、秀明のやつ、今度はなにをたくらんでるんだ」

広々としたグリーンベルトの間を自転車で疾走しながら、和音はつぶやいた。

秀明と自分の関係は、まさに「くされ縁」と言っ  
てよかった。

いや、秀明にとってはそうでもないのかもしれない。

あいつは、僕とつき合うことで、ひとつも被害を受けていないのだから。被害者は、いつも、一方的に僕なんだ。

和音は、自分の二十年間の人生を振り返って、そう思った。

和音と秀明は、いわゆる幼なじみである。中部地方のある市の、三十メートルとは離れていない同じ町内

で生まれた。

その年に近所で生まれた赤ん坊は二人だけだったから、物心つく前から、和音の隣には、いつも秀明がいた。いっしょに幼稚園に通うことになる以前から、公園の砂場などで遊ぶ相手は秀明と決まっていたのだ。

小学校も中学校も地域の公立だったから、いっしょだった。しかも、どちらも生徒数の少ない学校で、そのぶん、学級数も少なかった。その結果、九年間（幼稚

園から含めれば十一年間)ずっとクラスも同じだったのだ。

まわりからはいちばん仲のいい友だちだと思われていたし、事実、けんかなどもほとんどしたことはないのだが、和音には、どうも、秀明との関係にいい思い出はない。

二人の性格は、正反対と言ってよかった。どちらかといえはおっとりしている和音と、やんちゃ坊主の秀



明。優等生タイプだが引っ込み思案の和音と、明るく活発で、調子のいい秀明。体格も、和音が小柄だったのに対し、秀明は、クラスでいちばん大きく、スポーツなども得意なタイプだった。

そんな二人がいっしょにいれば、わりを食うのはいっつでも和音の方だったのだ。

子供の頃、空き地でサッカーをやっていて、秀明の蹴ったボールが近所の家に飛び込み、ガラスを割った

ことがある。その時、怒って出てきた家の人につかまってひどくしかられたのは、なぜか和音だった。秀明は、さつさと逃げて、どこかに隠れてしまったからだ。

小学生がよくやる「ピンポン・ダツシユ」——例の、通学路の途中でよその家の呼び鈴を押して逃げるいたずらでも、逃げ遅れるのはいつも和音で、言い出しついで主犯の秀明は、一度もつかまったことなどなかった。

中学生になってもそれは同じで、クラスの誰かの椅子に画鋏を並べたり、教師の入ってくる入口に黒板拭きを仕掛けたりといったことは、たいてい秀明が中心になっていた。そうしたことで担任から怒られるときは、さすがの秀明も逃げ出すわけにはいかなかったが、それでも、明るく調子のよい秀明は、教師の機嫌を取るのもうまく、教師はあきれながらも笑ってしまい、そのあと、ぶちぶちと文句を言われるのは、ただ秀明

のそばでつき合っていただけの和音の方になるのだ。

さらにもうひとつ頭にくることには、秀明は、女の子たちからやたらもてた。たしかに顔立ちはきりつと  
して、しかも涼しげだし、性格も明るいから、女の子  
たちに人気があったのはわかる。でも、それを言うな  
ら、和音だって美少年の部類だったし、秀明のように  
女の子をからかったりしないのだから、もつともてて  
もよさそうなものなのだ。

にもかかわらず、いろんな女の子から好意を寄せられるのは、いつも秀明の方で、そのたびに、いちばんの友人と目されていた——そして、女の子にとっては扱いやすそうな——和音が、そのメッセージを伝える役目になるのだ。

中学二年のバレンタインデーに、自分が秘かに思いを寄せていた女の子から、「井上君に渡してくれる？」とチョコレートを託されたときには、正直言つて泣き

そうになった。

そんな関係なのに、なぜ秀明に腰ぎんちやくのようにくつついていたのかと言われれば、答えに困るが、秀明の方はなにかといえれば和音を誘ってくるし、特にそれを断る理由もなかったので——今思うと、いっばいあったような気もするが——なんとなくいっしよにいたとしか言いようがない。まさに「くされ縁」なのだ。

だから、高校に進学し、学校が別れたときには、正直ほっとしたものだ。

まあ、ときどきは近所で顔を合わせ、話すことはあったが、それぞれの学校で友達もでき、日頃は前のようにならないうにいっしょにいることもなくなつた。

ところがである。

高校三年の三学期のはじめ、久しぶりに近くの駅で顔を合わせたとき、立ち話になり、秀明の志望大学が

自分と同じところだと知ったときには、ちよつとめまいさえ覚えた。

お互い家を離れ、他の地方に進学しようとしているのに、なんで、偶然、それが同じ大学にならなければならぬのか。全国に、大学なんて、星の数ほどあるじゃないか。

もう、まさしく「くされ縁」という他なかつた。

そして——その時期にはもう志望変更もできず——



―、けつきよく、二人そろって城北大学を受け、――  
和音の秘かな期待に反して――二人そろって合格して  
しまったのである。

「いっしょなら安心よね」などと、双方の母親は喜  
んでいたが、和音は、内心、これからはじまる四年間  
を思い、憂鬱になった。

まあ、唯一、救われたのは、和音の方は文系で、秀  
明は理系だったということくらいだ。和音が入ったの

は国際関係学部北米学科で、秀明が受かったのは工学部化学工学科だったのだ。

一年の時から講義などいっしょになるものはなかったし、——小中学校の時のように——四六時中顔を合わせている必要もなかった。(その点だけは、キャンパスの広さはありがたかった。)

ただ、アパートは近かったし、夜、暇だったりすると——大学生なんて、たいてい暇なものだ——、秀明

はよく和音を誘ってきて、どちらかの下宿でテレビゲームをしたり、どこかで飲んだりということになった。で、そういうときは、たいてい、秀明が、つきあっている女の子と別れたがっているときなのである。

秀明は、大学になっても女の子たちからもてて、そして、ちよつとつき合つては、すぐに飽きてしまう。

その結果、和音は、デートの誘いを断る口実に使われたり、時には、二股かけて抜き差しならなくなった女

の子たちから秀明が問いつめられる席に、むりやり同席させられたりするのだ。

けつきよくは、今も昔も、和音は、秀明の「やんちゃ」の後始末役ということになるのである。

大学に入って二年とちよつと。もういい加減に、秀明に巻き込まれるのはよそうと思うのだが、実際に秀明と顔を合わせると、どうも、そのペースにはまってしまう。どうしてそうなのか、和音自身もよくわから

ないのだから、よけいに自分が情けなかつた。

どうやら、今回もまた、秀明のせいで、自分はなんだかわけのわからない事態に巻き込まれているらしい。

今度こそは、先手を打って、秀明の「やんちゃ」を阻止しなければならぬ。

そんな思いでキャンパスを疾走してきた和音は、工学部四号棟の壁に自転車をぶつけるようにして、停ま

った。

文系の学部の間人にとつて、工学部の研究棟など、まさに伏魔殿のようなものだ。蛍光灯が灯っているところが、かえつて寒々しい感じを与える暗いトーンの廊下の両側に、研究室のスクールドアが並ぶ。ときどき開くそのドアの向こうには、正体のわからない実験装置や基板むき出しの電子機器が所狭しと押し込まれ、

いつの季節も同じトレーナーにジーンズ姿の学生が、数字やグラフだけが表示されたディスプレイを黙々とにらんでいる。きつと、人類を破滅させるような、とんでもない研究をしているにちがいない。

特に、この化学工学科の研究棟は、よけいにその感じが強い。そんな不気味な雰囲気、さらに「臭い」が加わるからだ。強烈なわけではないが、各研究室からは、鼻を突く刺激臭や、ものが腐ったような臭いが

漂っている。こんな臭いの中で、それを気にするようすもなく、学生や院生がビーカーの薬品を混ぜ合わせている姿など見ると、和音には、マッド・サイエンティストの集団としか思えなかった。

今日もまた、そんな薄気味悪さを抱きながら、和音は、廊下のいちばん突き当たりの研究室に入った。

と、そこに、まさにマッド・サイエンティストそのものという男が背を向けて座っていた。



ぼさぼさの頭に薄汚れた白衣のその男は、ずり落ちそうになる黒縁メガネを持ち上げながら、実験机の上のなにかをのぞき込んでいる。近づいて見ると、机の上には、シャーレがひとつ置かれていた。そして、そのシャーレの上では、白っぽいゲル状の固まりがぷるぷると震えていた。男は、それに合わせて、かすかに首を揺すつてにやにや笑いを浮かべている。

この男のことを、去年の秋、秀明に紹介されて知っ

ているから平気でいられるようなものの、なにもしらない人間がその姿を見たら、きっと逃げ出すにちがいない。

矢代という名のその男は、秀明の二年先輩にあたる院生である。

「ふふふ、完璧だ」

シャーレをのぞき込んだままの矢代は、独り言をつぶやいた。和音がすぐ後ろまで来ていることに、なに

も気づいてないようだ。

その声音にちよつと寒気を感じながらも、和音は声をかけた。

「あの……」

「……ん？」

驚いて振り向いた矢代は、そのはずみでさらにずり落ちた眼鏡を、ゆつくりと上げると、和音の顔を見上げた。

「ああ、和音ちゃん……だったっけ？」

「はい。あの、秀明は？」

「うん。なんか、さつき、深刻そうな顔した女の子が来て、いっしょに出てったぞ」

「またか……。どこ行ったかわかりますか？」

「さあ……。そんなことより、和音ちゃん、これ見てくれよ。すごいだろ」

矢代は、和音の問いなど興味がないとばかり、実験

机の上のシャーレに目を戻した。

「塑性性のあるシリコーンゴムなのに、通気性があるんだ。しかも、表面は撥水性を持たせられる」

「はあ：：」

矢代の熱のこもった言葉につられて、和音は、そのシャーレの上の物体を見たが、気味の悪い感じしかせず、なにがすごいのか、見当もつかなかった。

「これが、どういふことかわかるか、和音ちゃん？」

「……さあ？」

「長時間の特殊メイクが可能だったことだ。これまで特殊メイクは、八時間が限度だって言われてた。特に厚く盛ったときはな。皮膚呼吸を阻害するし、皮膚そのものを痛めるからだ。でも、これなら、皮膚呼吸の阻害率は二十パーセント程度に抑えられる。つまり、丸一日以上連続して、メイクしたまままで撮影が可能だってわけだ」

和音は、その言葉で、秀明から矢代を紹介されたときに聞いたことを思い出した。

化学工学科の院生は、たいてい研究者や化学工業の開発関係を志望しているものらしい。だが、矢代だけはちよつと変わった動機でここにいるのだそうだ。そもそも、矢代が大学の化学工学科に入ったのは、ハリウッド映画の特殊メイクにあこがれてなのだという。将来はその道に進むことを強く希望していて、それで、

特殊メイクの素材研究をするために大学院にまで進んだというのだ。

現に、矢代は今も、学内の自主映画サークルかなにかに入っていて、その「研究成果」を役立てているらしい。それでいつも、工業的にはなんの意味も持たない物質を合成しては喜んでいるのだと、秀明は言っていた。そういう変わり者なのである。マッド・サイエントイストと言うより、要するにオタクなのだ。



「おまけに、これは、顔料のなじみもいいし、配合をちよつと変えてやれば、生体に害のない接着剤にもなる。あらゆる特殊メイクが、時間の心配なくできるってことだ。すごいだろ」

矢代は、さらに得意げに和音の方を見た。それで、和音は、とりあえず「ええ」とうなづいてから、つつけた。

「そのシリコンの話は、今度ゆつくり聞きますから、

秀明の行く先を……」

「困るなあ、和音ちゃん。素人はすぐまちがえる」

「は？」

「いいか、これは、シリコンじゃなくてシリコーン。

シリコンは、珪素。ガラスをつくったり、コンピューター

のチップになったりする金属元素だ。で、そのシ

リコンは、炭素と周期律がいつしよだから、人工的に、

有機物の炭酸基と入れ替えた化合物ができる。それが

有機シリコン。で、その有機シリコンの中で重合とじゆうごういう組成形態を持つものをシリコーンと呼ぶんだ。シリコンじゃなく、シリコーンと伸ばす。シリコンの化合物ではあるが、まったく別の物質だ。原理的には、あらゆる炭素有機物と似通った性質のものがつくれる。つまり、樹脂にも、ゴムにも、オイルにもなる。タンパク質に近いものもできる。しかも、炭素有機物とくらべて、毒性や腐食性はきわめて低い。だから、

整形外科なんかで、体内に入れるものは、シリコーンでつくるんだ。特殊メイクの主要な素材にもなる。もつとも世の中、シリコンとシリコーンを混同してるやつは多いからな。この前も、インターネットのウェブ見てたら、変な小説アップしてる馬鹿が、平気で『シリコンのパッド』とか書いてた。和音ちゃんがまちがえるのも、無理はないが……」

話しつつける矢代に、和音は、秀明の行方を聞くこ

とをあきらめ、もうひとつ、さつきから気になってい  
ることを口にした。

「あの、矢代さん。できたらその『和音ちゃん』って  
呼び方、やめてもらえませんか」

「……え？　だって、和音ちゃんは和音ちゃんだろ」  
「でも、なににも、ちゃんづけすることはないでしょ。

女の子みたいじゃないですか。『高岡』とか、せめて  
『和音』とか、呼び捨てしてくれる方が、いいんです

けど……」

「そうかあ……？」

矢代は、ちよつと不機嫌そうなようすで言った。和音のささやかな抗議にというより、話の腰を折られたことが、面白くなかったのだ。

「和音」と書いて「かずね」と読ませるこの名は、父と母が相談してつけたのだという。

父と母は、フオークソングブームの頃、大学で出会  
い、仲間とフオークバンドを組んでいて親しくなった  
：：というか、要するに、バンド仲間でできてしまっ  
たということらしい。そんなことで、卒業後に結婚し  
て初めての子供ができたとき、自然に音楽にまつわる  
名前をつけたいと思った。そして、二人で頭をひねり  
考え出したのが「和音」という名だった。

本人たちは、男の子でも女の子でもいい名前を考え

たのだと得意そうに言うが、和音自身は、この名前に抵抗があった。「かずね」と音だけ聞くと、まず女の子にまちがえられる。ましてや矢代のように「ちゃん」をつけて呼ばれれば、なおさら女の子にしか聞こえないのだ。

中学生頃になると、友だちにからかわれたりすることもあって、和音はよく母に文句を言ったものだ。そのたびに母は――



「そう？　きれいで、しかも広がりのある大きな名前じゃない。英語で言えばハーモニー。周りの人や世の中と調和して、響き合って生きていけって、パパとママの思いがこもってるのよ」

——と言った。

しかし、そのことも、和音には気に入らなかつたのだ。自分の、どこか人に対して迎合的な性格は、この名前のせいではないかと思えてくるからだ。

特に、いつも秀明のペースに巻き込まれてしまうのは、この名前が悪いのだという気がした。まあ、和音の側からしてみれば、秀明との仲は「不協和音」以外の何ものでもないのだが。

また、にやにや笑いを浮かべて、シリコン、いや、シリコンの試作品をつついたりしている矢代からちよつと離れた椅子に座り、和音がそんなことをあれこ

れ考えているとき、ドアが開き、秀明が戻ってきた。

「あー、まいったまいった。女って、どうして、すぐ、ああなっちやうのかな。一度エッチしたくらいで。ね、そう思いませんか、矢代先輩」

秀明は入ってくるなり、矢代にそう声をかけた。

しかし矢代は、切り取った例のシリコーンの断片を顕微鏡のプレパラートにセットするのに夢中で、なにも答えなかった。

「秀明、お前、また別の子とトラブってるわけ？　ほんと、懲りないやつ」

部屋の隅から声をかけると、それでやっと、秀明は和音の存在に気づいたようだ。

「あ、和音。珍しいじゃないか。呼びもしないのに、お前の方から来るなんて」

「ああ、ちよつと、話があつてさ」

「なんだよ、マジな顔して。お前も、俺に『あたしの

気持ちはどうなるのよ』とか、言うわけ？」

「ああ、きつと、それに近い話だよ」

「なんか、いつもの和音らしくないな。何が言いたいんだ？」

「これ、どういうことだよ」

和音はそう言うと、ジーンズのポケットから例のプリントを出して、秀明の目の前に突きつけた。

「……ん？」

秀明は、不可解そうに受け取ると、折り畳んだ紙を開いた。そして、その中身に目を走らせた。

最初、あつけにとられたような顔をした後、秀明は、突然、大きな声を出した。

「すげえ。やったあ！」

それを見て、和音はため息をつきながら言った。

「やっぱり、お前か」

「しかし、まさか、当たるとは思わなかったなあ。和

音、おめでとう」

「なにが、おめでとうだ。どういふことなんだよ」

「だって、お前、ただでハワイ旅行に行けるんだぜ」

すでに有頂天になっている秀明を見て、和音は、ここで自分が冷静に事を運ばなければ、そのペースに飲まれてしまおうと思った。

「ちよつと待てよ、秀明。聞きたいことは山ほどあるけど、順を追って行くぞ。まず、なんで、こんなメー

ルが僕のところへ届く？」

「そりゃ、お前が応募のメールを出したからだよ」

「僕には、そんな覚えはないけどな」

「ま、アドレスがお前のだったわけだな」

「お前が出したのか？」

「要するに、そういうことだ」

秀明は、悪びれた様子もなく言った。

「僕のアドレスでメール出すには、パスワードだって



要るだろう」

「幼なじみなんだから、誕生日くらい知ってるさ。誕生日とイニシャル組み合わせたパスワードなんて簡単に盗まれるから、変えた方がいいぜ」

「ああ、すぐに変えるよ」

和音は、腹が立っていたが、努めて冷静に言った。

「だけど、懸賞に応募するなら、なにも僕の名前を使わなくたって、自分で出せばいいだろ」

「あの懸賞、応募資格が、婚約中の女性限定だったんだ。まさか、秀明って名前じゃ、女には見えないだろ」

「それはそうだよな。まちがいない。でも、お前は、まだ二つまちがいを犯してるぞ。第一に、僕だって女じゃない。第二に、僕は婚約なんてしていない」

「お前の名前なら、女に見えるじゃないか。アドレスの学籍番号に男女別があるわけじゃないしな。それに、婚約なんてもんは、まあ、口約束みたいなものだ。い

くらでもごまかせる」

「ああ、婚約はたしかにそうだろう。でも、僕が男だつて事實はごまかせないぞ。それから、これはどういうことだ？ この『ご添付いただいた写真画像』つていうのは。まあ、だいたいの想像はつくけどな」

「そう。去年の学園祭の時のやつだ。一枚だけ、お前と俺で並んで撮ったやつがあっただろ。矢代先輩がシヤッターを押してくれた。あれをスキヤニングして送

「つたんだ」

「やっぱり、そういうことか……」

和音はため息をつきながら、去年の秋のことを思い出した。

よく考えてみると、あの時も、成り行きは、今回と同じだった。

城北大学の学園祭「城北祭」は、毎年、文化の日前

後に行われる。そして、最近はどここの大学でもやっている「女装美人コンテスト」というふざけた企画が、ご多分にもれずあるのだ。しかし、城北祭のは、それなりに伝統があつて、毎年、目玉企画になっている。そのため、大学近辺の商店街や、大学生協への出入り業者から大学祭実行委員がかき集めてきた、けっこう豪華な賞品が出るのである。で、秀明はそれに目をつけた。

学園祭当日の早朝、和音がまだ寝ている時に、突然アパートまでやって来た秀明は、まるで拉致でもするように、和音を大学まで連れていった。

聞けば、和音をその女装コンテストに出場させようということだった。

「冗談じゃないよ！」

「そんなわがまま言うなよ。もう、何日も前からエントリーしてあるんだから、今さらやめられないだろ」

いやがる和音にそう言って、秀明は無理矢理この研究室に連れ込んだのだ。

と、そこには、矢代と、矢代のついでやって来たらしい自主映画サークルの衣装担当の女の子が待っていた。

抵抗する和音を、体格では格段の差がある秀明が押さえつけ、服を脱がされ、その女の子が用意してきた女物のセーターとミニスカートに着替えさせられた。

その後、矢代にメイクされた。矢代は、しきりに、顔に傷やケロイドをつくりたがったが、秀明が「こいつは、普通に化粧すれば、きっと相当な美人になるから、今回はそういうおちやらけはいいですよ」ととめた。

たしかに、秀明の言葉どおり、メイクのあと鏡を見ると、そこには、和音自身も驚くほどの美人がいた。

それに呆然としている和音を、秀明はイベント会場ま



で引っ張っていき、ステージの上に押し出したのだ。

他の出場者は、たいてい、ふざけたパフォーマンスでウケを狙っていたのだが、なんだかわからないうちにそんなことになってしまった和音は、恥ずかしくて、舞台の上でただもじもじしていただけだ。

それでも、他の出場者には大笑いしたりヤジを飛ばしたりしていた観客たちが、一瞬静まり返り、そのあと、いっせいに「ほーっ」というため息をついた。

けつきよく「学園祭のクイーン」は、派手なパフォ  
ーマンスで大ウケしていたやつが獲ったが、和音は準  
クイーンということになった。そして、その賞品だっ  
たコンピューター用のスキヤナーは、「俺が段取った  
んだからな」と、秀明がしつかりせしめたというわけ  
だ。

その「コンクール」のあと、秀明が「記念に」とか  
言い出し、その格好のまま、並んで写真を撮った。矢

代がシャツターを切ったその写真の中で、和音は、横目で秀明のことをにらんでいるのだが、身長が二十七センチもちがい、しかも、女にしか見えない和音がそうしているようすは、すねて、甘えているようにも見えた。

たぶん秀明は、あの時の写真を、あの時のスキヤナードで取り込んで、その応募メールとやらに添付したにちがいない。

「あの写真なら、いけると思ったんだ。あの時は二等賞だったけど、今度は一等賞だぜ。それも本物の女と競争して。和音、お前、ほんとに美人なんだよ」

脳天気にも、そんなことを言っている秀明を前に、和音はしばし言葉を失っていた。しかし、気を取り直して、さらに追及した。

「で、これはどういうことだ。『お互い親に反対され

ている学生同士の結婚、祝福してくれる人もなく、満  
足な結婚式も挙げられません』……こんなこと、書い  
たわけ？」

「ああ、そういう感動秘話があった方が、審査員のウ  
ケもいいと思っただ。作戦的中だな。それに、お前  
と俺が結婚するって言い出せば、まちがいなく親は反  
対するだろうし」

「たしかに。で、『一生に一度の思い出に、夢のよう

な気分が味わえれば、これからの長い結婚生活にも勇気を持って臨めます』ってか。つまり、一生に一度の悪夢のせいで、僕はこれからの長い人生、大恥さらして生きてくってわけだ」

「……あれ？」

和音の強い語調に、秀明は、その顔を見て、ぽかんとした。

「お前、怒ってるわけ？」

「当たり前だろ。人の名前とアドレス使って、勝手にこんなことされて、怒らないやつが、どこにいるんだよ」

「まあ、たしかにそれは悪かったかもしれないけど、おかげで、こんな豪華な旅行ができるんだぜ」

「え？ お前、マジで行くつもりなの？」

まだ、この時点では、秀明のしたことは、単なる悪ふざけだと思っていた和音の方が、今度は驚いて聞き

返した。

「きまつてるだろ。ハワイに五泊。それも、最高級ホテルのスイートで。きつと、部屋にプールとかもついてんだぜ。行き帰りの飛行機だって、ファーストクラスだっていうし。こんなチャンス、それこそ一生に一度だろ」

「冗談じゃないよ。僕は『かわいらしいウエディングドレス姿』を期待されちゃってるんだぞ」



「似合うと思うけどな」

「そういう問題じゃない。お前ね、これはサギだよ。

もし、この話にのって、僕らがこのこ出かけてったとしたら、もう立派なサギ行為だ」

「そうかな。なんか、問題あるか？」

「だから、僕は男で、もちろん、お前と婚約なんてしてない。で、お前もさつき言ってたように、この懸賞の応募資格は、婚約中の女性だろ。応募しただけでも

問題なのに、当選賞品を受け取ったとなれば、確実に犯罪だよ」

「要するにさ、ばれなきやいいわけだろ」

秀明は、いともあっさりと言った。和音は、それにあきれながらも、言い返した。

「ばれないわけないだろ。何度も言うけど、僕は男なんだぞ。もしかしたら、僕に、旅行の間、一週間も女装して、女の子のふりしてろって言うのか」

「それ以外に、方法はないんじゃないか」

「どうやったたら、そういう発想ができるんだ？　しか

も、このメールによれば、四六時中、記者とカメラマンがくつついてるっていうんだぞ」

「だいじょうぶ。お前ならできる。そうやってむきになつてしゃべってたりすると、けっこう、声もかん高いし」

秀明は、確信ありげにそう言った。しごくまっとう

だと思える和音の抗議も、まったく意に介していないようだ。

「そんな……。お前むちやくちやだよ……。」

秀明のまなざしに、なぜか、和音の語尾が言いよどんだ感じになった。

この男は、こんなにいい加減なのに、なんで、いつもこんなに自信たっぷりな顔をしていられるんだろう。

和音は、ちよつとそう思ったあと、「いけない、このままでは、いつもどおり、こいつのペースにはまっ  
てしまう」と心の中でつぶやき、あわてて体勢を立て  
直した。

「秀明、そんなことを僕はする気はないし、絶対にう  
まくいくわけもない。それにだ。たとえばそれがうまく  
いくと仮定しても、その前に、パスポートって問題が  
あるだろ。税関のゲートでもチェックされるだろうし、

このメールにも、事務手続きを急いでるって書いてある。つまり、航空券とかをとるってことだ。それにも、パスポートがいるんだぞ。どうすんだよ」

和音が言うと、秀明は初めてちよつと考え込んだが、すぐにまた口を開いた。

「お前、たしか、パスポートは持ってるよな。一年の夏休みに、語学研修とかでアメリカ行ってたから」

「ああ、でも……」

「だったら、問題ない。お前はあの頃から、今みたいな長めの髪型してたから、写真は、お前の顔立ちだったら女で通らないこともない。証明写真って、だいたい無表情だから、けっこうわかんないと思うよ。あとは、性別の欄をM A L EからF E M A L Eにするだけだ。同じようなフォントとインクで、前にF E っつければすむわけだ」

「お前、それ、サギの上に公文書偽造だぞ。下手した

ら、懲役何年って罪だ」

「だいじよぶ。そういうことは矢代先輩に頼めば、ばれないようにうまくやってくれるから。ね、先輩」

秀明は、そう言っつて、矢代の方を振り向き、声をかけた。

顕微鏡を覗くのに熱中していた矢代は、それでも、自分の名前が出たことには気づいたらしく、「ん？

なんだ？」と顔を上げた。しかし、さつきからのこち



らの論争など、まるで耳に入ってはいなかったようだ。それで、秀明は、最小限の言葉で説明した。

「パスポートに手を入れて、性別の欄を変えたいんです」

「ああ、そんなことか。俺には無理でも、映画サークルの美術やってるやつで、そういうことにやたら器用なやつがいるから」

矢代はそれだけ言って、また顕微鏡に目を戻した。

「ほらな」

「おたくら、悪のシンジケートか」

和音は思わずそうつぶやいたあと、いよいよ秀明とその仲間たちのペースに巻き込まれていくような気がして、さらに強い調子で言った。

「とにかく僕は、そんな法律を犯すようなことに巻き込まれるのはごめんだからな」

「ちよつと待てよ、和音。誰が巻き込まれるって言う

んだ。お前は当事者なんだぞ。実際にハワイに行くのはお前なんだ。ワイキキビーチの超豪華なホテルに泊まって、新鮮なシーフードでもフレンチでも、うまいものを目いっぱい食って、いろんなシヨールとかも見て、エメラルドグリーンの海と白い珊瑚礁の景色を満喫して、南太平洋のきれいな空気を胸いっぱい吸って……。な、悪い話じゃないだろ」

「ああ、その上、去年の学園祭みたいにブラジャー着

けさせられて、まるで腹巻きをずらしたみたいなの短いスカートをはかされて、顔にいろいろ塗ったくって、しかも、人の目と偽造パスポートにびくびくしながら、一週間過ごすってわけだ」

「まあ、そう、物事を悪い方ばかりに考えるな」

「そうじゃないだろ」

「なんか、和音にしては、めずらしく感情的だな」

「そりゃ……」

「ま、考えてもみるよ。いいか、今言ったようなことが、金の心配なしにできるんだぞ。しかもだ。ここ読んでみるよ。『滞在中のお小遣い1万ドル』だぞ。今のレートで百四十万円ってところか。そんな金、お前、持ったことあるか。それを一週間で全部使っていいって言うんだぞ。のらない方が馬鹿ってもんだ」

「そりゃ、お前はいいよ。お前はそういうことが堂々とできるだろう。豪華ホテルも料理もショーも、きれ

いな景色や空気も、それに一万ドルも、お前の立場と脳天気さだったら、思いつきり楽しめるにちがいないよ。でも、僕は、懸賞の応募者で、サギの主犯ってことになるんだぞ。しかも、お前の花嫁になれって言うんだ。そんなこと、できるわけないだろ」

そこで、秀明は、急にわざとらしいシリアスな顔をつくった。

「そんなに俺と結婚するのがいやか？」

すでに、余裕の「からかいモード」に入っているのだ。そしてさらに、まるでトレンディドラマのクライマックスのように、芝居がかった調子でつづけた。

「そうか、気がつかなかったよ。君が、そんなに俺のことが嫌いだったなんて」

大っ嫌いだ！

和音はそう言いたかった……が、言えなかった。

なぜか、心のどこかで、「それを言っちゃいけない」

という気持ちがあった。

思えば、これまでだって、「お前なんか嫌いだ」と言いたくなることは数限りなくあったし、言う機会だって何度もあった。それなのに、そのたびに、どういうわけか、心の中でブレーキがかかるのだ。それで、いつもひどい目にあいながらも、秀明との関係を断ち切れずにきたのだ。

なんでいつも、僕はこうなんだ。



和音は、そんな自分を情けないと感じた。

今日は、それではいけない。今度ばかりは、そんなことを許したら、とんでもないはめになる。和音はそう思い、話の方向を元に戻して、きつぱりと言った。

「いいか、とにかく、僕はことわるからな。いや、お前にことわる必要もないな。僕が、ことの成り行きを全部正直に書いたメールを、この人に出せばいいんだ。応募したのはお前でも、当選者は僕なんだ。僕が辞退

すれば、それですべて終わりってわけだ」

「おい、ちよつと待てよ。せつかく当選したのに、そんなもつたいたいなこと……」

秀明は、和音の言葉に、やつと、ちよつとあせつたように言った。

「言つとくけど、お前に邪魔されないように、パスワードはすぐ変えるからな。お前が絶対わからないようなやつに」

和音はそう言い捨てる、研究室を飛び出した。

べつに自分の言っていることがまちがっている気は  
しないのに、なぜか、胸がちくりと痛んだ。

第2楽章 魔法の呪文

「なんで、俺が行かなきゃいけないんだよ」

東京駅で地下鉄に乗り換えたところで、秀明はまた、アパートを出たときから何度も繰り返している文句を

言った。

「だって、お前が、今度のことの張本人だろうが」

「呼ばれたのはお前だろ」

「二人で来いって言ってきたんだから」

和音が言うと、秀明は、ふてくされたように地下鉄のドアにもたれかかり、なにも見えない窓外を見た。

例の懸賞の当選を知らせてきた雑誌編集者に、和音

は、当選辞退のメールを送った。「辞退」というよりも、「自分には当選の資格がない」ということを正直に書いたのだ。

応募したのは自分ではなく、自分のIDを使った友人であること。しかも、自分は男で、だからもちろん、婚約の事実もないこと。添付した写真は、学園祭の時ふざけて撮ったものであること。それら、ことの経緯をていねいに書きつづり、友人の非礼と、パスワード

を盗用された自分のうかつさを詫びた。

翌日遅く、荻原というその編集者から、またメールが届いた。

そこには、「とにかく一度、二人で来てほしい」と書かれていた。メールは、いたって事務的と言っている文面だった。怒りのメールを予想していた和音は、ちよつと拍子抜けしたが、すぐに、いつでも出向く旨の返事を出した。怒られるにしても、こんなことをし

て迷惑をかけたのだから、きちんと会って詫びる必要があるだろうと思ったのだ。

と、翌朝、つまり、今日の朝、「午後にも来てくれ」と言ってきた。

それで、いやがる秀明を無理やり引っ張って、神奈川県のある大学から、東京まで出てきたというわけだ。

もちろん秀明は、こんな時いつもそうするように、



あれこれ言って逃げようとしたが、今度ばかりはそれを許してはいけないと思った和音は、ずっと秀明の腕をしっかりとつかみ、やつと、ここまで連れてきたのである。

地下鉄の出口を出ると、「栄光出版」と書かれたビルの入口が、すぐ目の前にあった。これなら、行き交う人波に紛れて秀明に逃げられるようなこともないだ

ろうと、和音はちよつとほつとした。

一階ロビーの受付で、「グローリー・ウエディング」の荻原さんを訪ねてきたというと、受付嬢は、社内電話を入れたあと、三階の編集部まで直接行ってくれと言った。

それで、ふてくされている秀明の腕を持って、和音はエレベーターにのった。

三階でエレベーターを降りると、廊下の十メートル

ほど先のドアの前に、一人の女性が立っていた。

この階にはいくつかの雑誌の編集部があるらしく、並んだドアからは何人もの人が出入りしていたのだが、すぐその女性に目があったのは、彼女がそうとうな美人だったからだ。

年の頃は二十代の後半か。廊下を行き交う社員たちが、いちいちあいさつして行くところを見ると、もう少し上のベテラン編集者なのかもしれないが、すつき

りしたその顔と、スタイルのよさで、若く見えた。

その女性が、ずっとこちらを見ているので、彼女が  
荻原朱美にちがいないと思い、和音は、秀明を引っ張  
って、そちらに近づいた。

と、案の定、彼女の方から声をかけてきた。

「高岡君と井上君ね」

「はい」

和音が返事をする、荻原朱美は小さくうなづき、

「ついてきて。あんまり人に見られたくないから、急いでね」と言い、大股で廊下の奥へと歩き始めた。

和音はあわてて、そのあとに従った。秀明も、さつきほど抵抗はしていない。たぶん、朱美が美人だったからにちがいない。

通されたのは、応接室のような部屋だった。部屋の隅に、傘型の反射板がついたストロボのブームがセットされているところを見ると、雑誌のインタビュー記

事や対談などにも使っているのだろう。

朱美にすすめられ、ソファに座ると、前の席に腰掛けた朱美がいきなり言った。

「あなたたち、もしかしたら、そういう関係？」

「え？　：：あ、いえ」

朱美が、秀明の腕のあたりを見ているのに気づき、和音は、あわててそこから手を離した。朱美は、和音と秀明が腕を組んできたと思ったにちがいない。

「そんなにあせって否定しなくてもいいわよ。私、べつに、それがいけないなんて思ってるわけじゃないんだから」

「いえ、ちがいます。絶対に」

和音がさらにあせって言うと、朱美は「ふふふ」と笑った。けっして誤解が解けたわけではなさそうだ。

「あの、今回は、ほんとに……」

それはともかく、まずなにより誠意を見せて謝らな

ければと、和音が言いかけると、朱美は手で制した。

「もうじき編集長が来るから、話はそれからにしましよ」

と、その時、ドアがノックされた。

「どうぞ」

朱美が言うと、ドアが開き、コーヒートのトレイを持った女性が入ってきた。

「あ、いいわ。私がやるから」



なぜか朱美は、あわてて席を立ち、その女性の目から和音たちを隠すようにして、トレイを受け取った。

そこに立ったまま、彼女が部屋を出ていくのを見送り、それから朱美は向き直って、四つのコーヒーカーツプをテーブルに並べた。

「あんまり、編集部の連中に目撃されたくないのよね。特に高岡君の姿は」

「え、あの……」

ふたたびソファに座った朱美に、和音が聞こうとしたとき、今度は、ノックもなしにいきなりドアが開き、男が一人飛び込んできた。

中年だが、ジーンズに「グローリー・ウエディング」のロゴが入ったTシャツ姿で、とても、こんなビルに勤めるサラリーマンには見えなかった。タイトスカート、トのスーツでびしっと決めている朱美とは大違いだ。ただ、逆に、そんな姿が、やり手の雑誌編集長という

感じもただよわせていた。

「そうか、君たちか。とんでもないことをしでかしてくれたのは」

その男は、ソファに腰を落としながら、すでに話を始めていた。

「編集長の持田よ」

朱美が言ったので、和音と秀明は、ぺこんと頭を下げた。持田が、けっして激怒しているようすでないこ

とに、秀明も安心したのだらう。

「君が、高岡和音君だな」

持田は、座ると、和音の方をしげしげと見て言った。

「なるほど。色白で小柄だし、化粧して女装すれば、

ああなるか」

持田の言葉と視線に、和音は、恥ずかしい思いで肩をすぼめた。

と、持田は、話を変えろというように、身を乗り出

して言った。

「ま、やってしまったことに、いまさらぶちぶち言ってもしょうがないから、さっそく、善後策を相談したい」

「はあ……」

「君たち、ハワイに行きたいか？」

持田はいきなりそう言い、和音は「えっ？」と聞き返し、秀明は「はい」と返事した。

それで持田は、秀明の方に向き直り、話し始めた。

「荻原もメールに書いたと思うが、今回の企画は、ハワイの観光協会とタイアップして、その日本向け販促キャンペーンの費用を使ってやってるんだ。当初の予定では、キャンペーンは、八月から九月までという話だった。それで、この懸賞も、結果発表は六月発売の七月号でやって、七月に体験ウエディングの取材をして、その記事を八月発売の九月号で掲載するつもりだ

った。ところが、キャンペーンの日程が先方の都合で一ヶ月繰り上がったんだ。それで、急きよ、来月始めに取材しなければいけなくなつた。じつは、当選者に君たちを選んだのも、学生なら仕事の都合をつけることもないし、そんな急な日程でも、なんとかなるんじゃないかと思つたからだ。もちろん、高岡君が美人だつたことはあるけどな。あの写真を見て、まさか、男だなんて思わなかつたから」

その言葉に、和音は、また恥ずかしそうにうつむいた。そして、うつむきながら、ちよつと首をかしげた。

持田は、なぜ、わざわざ、こんなことを説明するのか。秀明の悪ふざけを叱るだけなら、そんな事情などどうでもいいし、それに、さつき、「いまさらあれこれ言うつもりはない」と言ったばかりではないか。そう言えば、持田が口にした「善後策」という言葉も気になる……。



和音が頭をめぐらせていると、持田がつづけた。

「それでだ。当然、当選発表も一ヶ月繰り上がって、今月発売の六月号ということになった。で、その発売日が、じつは明日なんだ」

「え!？」

和音は、その言葉にまた顔を上げ、持田を見つめた。

「もう二日前に製本もすんで、今頃は、取次から書店に向かって発送されてるはずだ。つまり、明日の朝、

全国の本屋やキオスクの雑誌棚には、懸賞の当選者として君たち二人の名前と写真が載った『グローリー・ウエディング』が並ぶってわけだ。もちろん、裁判沙汰になるような記事が載ってるわけじゃないし、それくらいのことで、いまさら回収はできん。もしそんなことをしたら、大損害が出て、俺の首が飛ぶ」

「でも……」

持田のあけすけで、そのぶん有無を言わせぬもの言

いにたじろぎながらも、和音はあわてて口を挟んだ。

「ん？　なんだ？」

「ほら、雑誌にはよくあるじゃないですか。先月号のお詫びと訂正とか……」

「うむ。それはそうだ。なにも訂正記事を出さなくて、来月号で、当選者が都合により辞退ということにして、繰り上げ当選を発表するという手もある」

「それでしょ」

「うちだって、できるものならそうしたい。だが、問題はそれだけじゃないんだ。スポンサーが、えらく君のことを気に入ってしまったってな」

「……え？」

「メールで送ったあの写真を見て、絶対に君に来てほしい。できれば、君のウエディングドレス姿をキャンペーンのポスターに使いたいってほどのいれこみようなんだ。それも、そう言っているのは、観光協会の大

ボスでな。日系二世で、相当な実力者。その上、どうしようもないほどの頑固じいさんときている。『この女性こそ、いまどき珍しいヤマトナデシコ』だとさ。側近からの情報によれば、どうも、戦後、進駐軍として日本に来た時の恋人に似てるらしいんだな、君が。ちよつと、いまさら、当選はまちがいでした、他の女性にしますとも言えない雰囲気なんだ。うちの雑誌だけじゃなく、わが社の旅行情報誌なんかにも毎号カラ

「広告を出してくれてるし、いろいろタイアップにも応じてくれる大スポンサーだしな。彼を怒らせるわけには、絶対にいかん。もし、あそこの広告とめられたら、やっぱり、俺の首が飛ぶ」

持田は、そこで大きくため息をついて、ソファにもたれかかった。さっきまで精力的な感じだったその顔に、一瞬、疲れた表情がかいま見えた。

和音は、なんだか話がよくない方向に進んでいるよ

うな気がして、結論が出る前になにか言わなければと  
思ったが、もうすでにあれこれ考えた末のことである  
らしい、そんな持田のようすに、言うべき言葉が見つ  
からなかった。

「そこでだ」

持田は、そんな表情を振り払うように、また身を乗  
り出し、つぶけた。

「君たちには、このまま、この懸賞の当選者のまままで

いてもらいたい」

「ということとは、つまり……」

そこで、秀明が初めて口を開いた。無理に深刻そうな顔をつくってはいるが、口の端がひくひくと動いていた。笑いかみ殺しているにちがいない。

「つまり、高岡君には、当初の予定どおり、ミス・カズネ・タカオカとして、ハワイに行ってもらいたいってことだ」



「そんな……」

和音は、思わず言っていた。

「ああ、無理な注文だということとはよくわかっている。だが、言いたくはないが、もともと、この原因をつくったのは、君たちなんだからな」

持田は、初めて、厳しい視線を向けてそう言った。

原因をつくったのは「僕たち」ではない。秀明ひとりでやったことなんだ。

和音はあわててそう反論しようと思ったが、それより早く、秀明が口を開いていた。

「ええ、本当に申しわけありませんでした。これだけのご迷惑をおかけしたんですから、できるかぎりの責任をとらせていただこうと思っています」

首をうなだれ、肩を震わせて言う、その口振りの、なんとしおらしいことか。

こういう時の変わり身の速さ、調子の良さで、秀明

にかなうやつはいないだろう。

反論するのも忘れて、和音がそれに感心していると、持田が、さらに身を乗り出した。

「そうか、やってくれるか」

「ええ。僕たちにできることだったら、なんでも」

あ、まずい。また、秀明のペースにはまりこんでいる。

和音は、やっとそれに気がつき、あわてて言った。

「でも、なんでもするって言ったって、一週間も女装して、人前でばれないでいる自信なんて、僕にはないですよ」

「うむ、そうは思うが、そのへんは、いっしょに行くこの荻原が、うまくガードするから。な、荻原」

持田はそう言って、どこかすがるようなまなざしで朱美の同意を求めた。

「編集長、じつは私、きのう、編集長にそう言われて

からずっと迷ってて、この場で、おことわりしようと思つてたんです。そんなこと、どう考えても無理だつて気がしたから。だけど、さっきから彼を観察してて、なんだかできそうな気もしてきました。彼って、基本的にかわいらしい感じだし」

「な、そうだろ」

持田は、朱美の言葉にわざとらしいほど大きくうなづいてみせた。

それを見て、和音は、この持田も、秀明と同じ人種だと感じた。これはますます、強い意志で臨まなければ、この二人の好きなようにされてしまいそうだ。

それで、和音は、またあわてて反論した。

「だけど、パスポートとかのことだってあるでしょう。飛行機のチケットとか」

まさか持田は、秀明のように偽造などとは言い出さないだろう。

「ああ、それも問題だったんだが、手は打てた。じつは同じスポンサーでも、航空会社の方は、担当者がうちとツーカーなんだ。内密に、君のパスポートで、ミス・カズネ・タカオカとして処理してもらえることになった。一部の人間にしか知られないようにして、チケットもその名で発券してくれる。たとえばスチュワードスなんかからも、君は完全に女性として扱われるはずだ」

「でも、税関チェックは……」

「うん、旅程も撮影するわけだから、出発の時から女装してもらわなきゃならない。だから、出入国審査についてには心配だったんだが、それも、ほとんど問題ないみたいだ。昔は、パスポートにM A L Eと書いてあって女装なんかしてると、日本でもアメリカでも面倒くさいことになったらしい。だが、最近ではそうでもないようなんだ。ま、ニューハーフとかも、けっこう



海外旅行をする世の中だからな」

「だけど……」

パスポートって、そんな簡単なことなのか……？

和音はそう思ったが、どう切り返したらいいのかわからず、言葉を継げなかった。

「たしかにホノルル空港でごたごたを起こせば、ハワイ側のスポンサーに知られる危険はあるが、ま、なんとかなるだろう」

形勢は、ますます芳しくない方向に向かっている。

持田は本気のようにだし、秀明は完全にその気になっ  
ている。実際に同行することになる朱美はまだちよつ  
と不安そうだが、持田の意に添う方向で考えようとし  
ている。和音は孤立無援だった。

今日ここで、みんなから責められて窮地に立つのは、  
秀明だったはずなのに、どうしてこうなるんだ。

和音はそう思い、必死になって頭をめぐらせ、形勢

を逆転するネタを探した。

「……でも、女装って言ったって、僕、女物の服なんて持ってないし」

言っではみたが、たぶん、そんな反論は無駄だろう。おそらく秀明が、どうにかすると言い出すに決まっていた。例の、矢代のつての映画サークルの衣裳担当とかを使って……。

しかし、それに対して口を開いたのは、秀明ではな

く、やはり持田だった。

「あ、それは心配いらぬ。もう、この荻原が、いろんな衣料品メーカーに掛け合つて、山のようにタイヤツプ企業を集めてるよ。記事にクレジットさえ入れれば、服はいくらでも貸してもらえぬ。こういう取材つていうのは、そういうもんなんだ」

どつちしても、まったく意味のない反論だったわけだ。

ところが、そこで、朱美が口を挟んだ。

「だけど、編集長、それについては、ちよつと問題もあるんです」

「ん？」

持田がきくと、朱美は考え込むような仕草をした。

和音は、かすかな希望の光を見るように、朱美の顔を見た。

「私、何社かのタイアップ企業と交渉してて気がつい

たんですけど、問題は、行き先がハワイだってことなんです」

「どういう、ことだ？」

「タイアップ先が提案してくる服の中に、かならず水着が入ってるんですよね。よく考えてみれば、新婚旅行行って言ったって、ハワイへ行くなら、ふつうは水着を着るでしょ。記事としても、水着写真がまったくないってというのは不自然じゃないですか。たとえば『ビ

ーチで遊ぶアツアツのふたり』とか、いるでしょ。たしかに彼なら、似合いそうな服を探して女装させれば、それなりに女の子らしく見せることはできると思いますよ。でも、いくら小柄でスレンダーだっていっても、水着まではね。思いつきりクラシックな、全身を覆うようなのだったらごまかせるかもしれないけど、タイアップ先が出してくれる最近のビキニとかだと、ある程度、胸の線とかも見えちゃうし、パッドじゃごまか

しきれないと思うんです」

たしかに朱美の言うとおりであった。ハワイへ行けば、若い女性なら、まちがいなく水着になるだろう。たとえ水着でなくとも、肌を露出した服を着るはずだ。去年の学園祭の時は、十一月で、セーターだったからよかったが、そんな夏物では、男だということがすぐにばれるに決まっている。だいいち、ビキニを着て、人のいっぱいいる海岸で写真を撮られるなんて、いやだ。



絶対にいやだ。

和音には、朱美の言ったことは、決定的なことのように思えた。

持田も「うーん」とつぶやいて、腕を組んだまま考え込んでしまった。

どうやら最後の最後で、この滅茶苦茶な話は、破綻したようだ。

和音は、そう考え、胸をなで下ろした。

と、そこで、秀明が口を開いた。

「そういうことなら、こっちで、どうにかできると思  
います」

「いったい、こいつはなにを言いだすつもりなんだ？  
和音は、そう思い、持田に向かって自信ありげに言  
った秀明の横顔を見た。

「先輩に、特殊メイクの天才がいるんですよ」

えっ、ここで矢代を持ち出すか……！

和音は、さらにあつ気にとられて、秀明を見つめた。

「特殊メイク……？」

持田の言葉に、秀明は大きくうなづいた。

「彼なら、女の子の胸くらいどうにかなると思います。

ちよつと、電話お借りしてもいいですか？」

「ああ、そこのを使ってくれ。外線はゼロ発信だ」

まだわけがわからないという表情のまま答えた持田の言葉に、秀明はすかさず席を立ち、壁際の電話のと

ころまで行った。

おそらくは、矢代の携帯に電話するのだ。

電話で話す秀明の声を聞きながら、和音は呆然としていた。もう絶体絶命だと感じていたのだ。

ここに来たときこそふてくされていた秀明だったが、ついに、いつもの調子を取り戻し、あれだけ自信たっぷりの方で話しているのだ。もうこうなれば、自分分は、蜘蛛の巣にかかった昆虫も同じだ。

秀明のようすと反比例して、和音は反論する気さえ萎え、青ざめていった。

電話でしばらく話したあと、席に戻った秀明は、案の定、ゆっくりと全員の顔を見渡し、大きくうなづいてみせた。

「だいじょうぶ、絶対に見破られないようにできると、彼は言ってます」

「特殊メイクねえ……、なんだかにわかには信じられ

ん話だが……」

持田はそうつぶやいたあと、朱美の方を見た。

「荻原、ちよつと行って、その天才とやらを確認してきてくれ」

朱美が答える前に、また秀明が言った。

「あ、それなら、三日後に来てくださいます。三日あれば、フォームが作れるって言ってますから」

「本当に、信じていいんだね？」

「はい」

秀明は、持田にさらに大きくうなづいてみせた。

そして、和音に向かって言った。

「和音、矢代先輩が、帰りに研究室に寄ってくれってさ。さっそく、お前の体の型を取るらしい」

なにか大事なことを置き忘れたままのような気がしながらも、和音は、秀明の勢いに吞まれ、ついうなづいていた。

置き忘れられているのは、いつものとおり、和音自身の気持ちなのだった。

三日後、朱美が、和音のアパートを訪ねてきた時、それを出迎えたのは秀明だった。

「男の子の部屋にしては、わりときれいにしてるのね」  
入口のドアからキッチンに入ってきた朱美は、第一声でそう言った。



「ええ、和音はきちょうめんだから」

秀明が答え、そしてつづけた。

「すみません、もうすぐ六月だっていうのに、ふすま締め切ったりしてて、暑いでしょ。今、向こうで準備してるもんですから。ほんとは大学の研究室でやるうかと思っただけですけど、なにせ、和音の裸を見てもらうわけだから、やっぱり大学じゃまずいかなって」

「え、ええ、そりゃ、そうよね」

秀明の言葉に、ちよつとたじろいだようすで、朱美は答えた。

その二人の会話を、和音は、顔を引きつらせて、隣の六畳間で聞いていた。

そのそばでは、裸の和音の胸に顔をつけて、矢代が「作業」をしている。

大人の女性、それも朱美のような美人の前で、こん

な恥ずかしい姿をさらすなんて……。

和音は身も世もないという気持ちだった。このまま、  
気絶でもできるものなら、してしまいたい。そんな感  
じだ。

もちろんここまでに、和音は、秀明と矢代に対して、  
ずいぶん抵抗を試みたのだが、けっきよくは秀明に言  
いくるめられ、こういうはめになってしまった。

三日前、あの栄光出版の応接室で、秀明の提案にう

なづいてしまった以上、こうなるのは、いわば避けられないことだった。

「矢代先輩、もうそろそろ、いいですか？」

キッチンから、秀明が声をかけてきた。

「ああ、あとちよつとだ」

矢代はそう答え、秀明の「胸」のまわりに、ファンデーションのようなものを塗っている。

とても気持ちを冷静に保っていられない上に、胸に、

いつもはない重さを感じ、和音はバランスさえとれな  
いで、矢代の手の動きに合わせて、体を揺れさせていた。

「これでよし、と」

矢代はそう言うと、和音をふすまの前まで引っ張っ  
ていった。

「開けますよ」

キッチンに、そう声をかけて、矢代は、勢いよくふ  
すまを開けた。

和音の目の前がさっと明るくなると、二人分の視線が、そこに集中した。

一瞬後、朱美も、そして秀明も息を呑んだのがわかった。

見つめてくる二人の視線に、和音は真っ赤になってうつむいた。

そのまま、空間が凍りついたように、しばらくの間、四人とも動きが停まっていた。

「……うっそお」

朱美がやっと声を発するまでに、ほぼ一分近くが経過していた。

「あなた、ほんとに高岡君？」

朱美の言葉に、和音は、うっむいたまま、小さくうなづいた。

「そうよね、顔は高岡君だもん」

「どうです、本物に見えるでしょ？」

和音の横に立った矢代が、にやにや笑いながら言った。

「ええ。：：えつと、矢代さんておっしやいましたっけ？　あなた、ほんとに天才だわ」

「どうも」

矢代は、初対面のあいさつとも、朱美の賛辞に対する答えともつかない言い方で言った。

「でも、いったいどうなってるの。まるで、高岡君の



バストが、本当にふくらんじやったみたい。それも、  
すごくきれいなバスト」

「新しく開発したシリコーンのフォームを貼り付けて  
あるんです」

「へえ、シリコンねえ……」

「いえ、シリコーンです、シリコーン」

矢代は、朱美の言葉をきつちりと訂正した。

和音の耳には、それが、まるで呪文でも唱えている

ように聞こえた。

——シリコーン、シリコーン、女の子になあれ……

「でも、貼り付けるって言っても、どうやって？ 継

ぎ目だって、全然わからないし……」

「フォームと同系の素材でつくった接着剤があるんです。継ぎ目がわからないのは、和音ちゃんの本当の胸の型を取って、裏側をぴったり密着するようにつくつてあるからです。それから、和音ちゃんの肌の色を正

確に測定して、それに合わせて配合した顔料を使つて  
ますから。ま、つけたあと、継ぎ目の上に、少しだけ  
ファンデーションを塗つてはいますけど」

「ほんとに、全然わからないわ。：：でも、とれたり  
しないの？」

「接着剤はけっこう強力だから、無理やり引きちぎれ  
ば別だけど、ちよつとやさつとの力が加わったくらい  
では、剥がれないと思いますよ。塩水とかにも強いか

ら、海に入ってもだいじよぶです」

「それじゃ、はずすときは？」

「専用の剥離剤がつくってあります。縁のところによつとたらせば、そこが剥がれて、あとはそこから注入してやれば、痛みもなく取りはずせます」

「ちよつと、さわってもいい？」

「どうぞ」

朱美が聞いて、矢代がそう答えた。

和音は、聞く相手も、答える人間も違うのではないかと思った。たしかにこれは、矢代のつくったフォームだが、土台は和音なのだ。

キッチンテーブルを立った朱美は、和音に近づき、指先でその「乳房」をつついた。

実際の胸板に密着しているせいで、その弾力のある震えが肌に伝わり、和音は、本当の自分の胸をつつかれているような気がした。

「うわ、まるで本物。女の私が、こんなにそばで見ても、偽物だなんて見破れないわ」

胸に伝わるくすぐったいような感触と、朱美の言葉に、和音は、うつむいたままの頬を、さらに赤らめた。

「でも、こんなにぴったりくつついてて、肌荒れとかしないの？」

朱美は、やはり女性らしく、そういうことが気になつたらしい。顔を上げ、矢代の方を向いて聞いた。

「この素材、通気性があるんですよ。だから、通常のシリコーンフォームや生体用接着剤よりずっと、皮膚への影響も少ないと思います」

矢代は、さも得意げに言った。この前もしきりに強調していたことだ。

「まあ、と言っても、まったく無害というわけにはいきません。いくらかは皮膚の代謝が阻害されます。特別の事情でもない限り、寝るときは、とっておいた方

がいいでしょうね。でも、それ以外の時は、ずっと装着していて問題ないはずですよ」

「へえ」

朱美は感心したように、また、その「乳房」に視線を戻した。

「それにしても、見れば見るほどきれいなおっぱいね。

乳首も、まるで本物だし。けっこう大きいのに、高岡君のスレンダーな体型に、よくマッチしてるし」



朱美は、そう言いながら一歩退いて、和音の全身に目をはわせた。

そして、その下腹部に、視線をとめた。

「でも、この下も不思議よね。どう見ても女の子」

和音のその部分には、丸みを持った丘があり、あまり濃くはないが、逆三角形の茂みさえできていた。

つまり和音は今、下着もつけない真っ裸の状態で朱美の前に立っているのだ。

もつとも、じつは、男の大事な部分は、巧妙に隠されているのだが。

「そこにも、フォームが貼り付けてあります。やっぱり和音ちゃんの：：その：：なにの型を取って、それをうまくカモフラージュするようにフォームを整形してるんです。この型をとらせるのだけは、本人がいやがったんで、和音ちゃん自身にやってもらいましたけど」

和音は、三日前の夕方、工学部四号棟のトイレの中で、矢代から渡されたプラスチック粘土を、自分のその部分に押しあてている姿を思い出し、なんだか、ひどく屈辱的な気分になってきた。

そして今、——たしかにその部分は隠れているし、胸もじつは覆われているのだといえ——、まるで品定めでもされているように、その「裸体」をみんなの視線の前にさらしていることに、耐えられない思いがし

てきた。

そんな気分陥ったせいで、さつきまで紅潮していた和音の頬は、急に青ざめたものになった。

「でもね、ちよつと聞いてもいい？」

朱美が、また、矢代の方を向いた。

「なんですか？」

「その……つまり……、おしつことかは、だいじよぶなの？」

「ええ、じつは、和音ちゃんのかなには、下向きに折り曲げるような形で、フォームの中に納まってるんです。先の部分が、フォームの下の切れ目からのぞいてるか、立っては無理でも、座れば、問題なくできると思っています。ま、勃起してたりすると、ちよつと、苦しい感じはあるかもしれないけど」

矢代は、これまで同様、その質問にも感情を差し挟まず、理路整然と答えた。たとえそれが、研究者らし

い対処の仕方なのだとしても、その会話に、和音は、さらに傷ついていた。

なんで自分は、排泄や性的興奮のことまで、人に云々されなければならぬのか……。

和音は、情けないような感情を通り越し、悲しくさえなっていた。

ところが、そんな和音の気持ちにはまるで頓着しないで、矢代はつづけた。

「なんだったら、その部分も見てみます？」

「……い、いいえ、それは、いいわ」

さすがの朱美も、そこまでは遠慮したようだ。

そして、それをきっかけに、この場の状況を、客観的に見ることができるようになったらしい。興味津々という感じだった表情が、急速に興奮から醒めていった。

するとそこで、これまで黙っていた秀明が、ひとこ

と言った。

「でもさ、正体知っているのに、こんなリアルな姿を目の前で見せられたりしちゃうと、男としては、やっぱり興奮しちゃうよね」

その言葉に、朱美は、まるでにらむようにそちらを見た。

その視線に、秀明は、ちよつとたじろいで口をつぐんだ。



そのあと、朱美は、また矢代の顔を見た。

しかし、矢代は平然として、まだ、先刻からの得意げなにやにや笑いを口元に浮かべている。

「ほんとのこと言えば、僕としては、乳房の横にケロイドとかつくりたいんですけど、井上がだめだつて言うから……」

矢代の言葉に、朱美はさらにきつい表情でにらみ返した。しかし矢代は、にやにや笑いをつづけたままだ。

そういう点では、秀明の方が、矢代などより、まだ敏感なのだろう。

矢代をしばらくにらんでいたあと、朱美は、ふたたび、ゆっくりと和音に目を戻した。

和音は、先刻からの青白い顔で、肩をすぼめて立っていた。そして、その肩はかすかに震えていた。

「ごめんね、こんなかつこさせて」

そんな和音を見て、朱美はつぶやいた。

和音は、やっと自分の気持ちに察してくれる人が現れたことで、少しだけ救われた思いがした。

と突然、朱美は、和音の手をとり、キッチンから六畳へと入った。

「和音ちゃん、こっちいらっしやい」

そして、キッチンとの間のふすまを閉めたのだ。

和音は、そのことにも、そして、もうひとつのことにも、ちよつと驚いた。

朱美は、今、「和音ちゃん」と呼んだ。さつきまでは、「高岡君」と言っていたはずなのに。矢代の言葉が伝染したのかもしれないが、それだけではない気もした。

ふすまを閉めると、朱美は、和音を脇のベッドの上に腰掛けさせた。

そして、その前の畳に膝をつき、和音の裸の肩を支えるように両手をかけて、顔を寄せてきた。

「ごめんね、和音ちゃん。私もちよつと興奮してたから、男の子たちの前で、平気であんなことさせて」

朱美は、そう言った。

たしかに、その表情は、先刻までの驚きと好奇心からは醒めていたが、また、それとは別の勘違いが始まっているように、和音には思えた。

そしてさらに――

そんなふうに朱美のことを観察している一方で、和

音自身も、精神のバランスを欠いた状態になっていたようだ。

朱美の優しい言い方に感応し、その目から、自然に涙があふれてきたのだ。

それを見た朱美は、今度は和音を抱きしめた。

「ごめんね、ほんとにごめんね」

和音の胸のフォームが、朱美の胸と重なり合って、押しつぶされた。

さすがに和音はあ然とし、そのせいで、涙はとまつた。

しかし和音は、そのまま、朱美に抱かれていた。そんなふうには、朱美に「甘えて」いたかったのだ。そして、その「甘えたい」という気持ちは、けっして異性に対してのものではなかった。強いて言えば、姉に甘える妹：：そんな感じだった。

しばらくそうしていたあと、朱美は、不意に体を離

し「あ、そうだ」と言った。

「試してみようと思つて、いいもの持ってきてるのよ」と、朱美は立ち上がり、いったんキッチンの方に出た。

「ちよつと待つててよね。のぞいちやだめよ」

秀明と矢代にそう声をかけて、ふたたびふすまを閉めて戻ってきた朱美の手には、自分のものらしい大きなめのシヨルダーバッグが握られていた。



畳に腰を下ろすと、朱美は、そのバッグを開け、中からなにかをとりだした。

「ほら、これ。かわいいでしょ」

朱美が両手で広げたのは、細いストラップの黄色いブラジャーだった。どうやら、ビキニの水着の片割れらしい。

「つけてみて」

朱美がさしだしたそれを思わず受け取って、そのあ

とで、和音はその自分の行為に呆然とした。

自分も含めて、どんどんこのおかしな雰囲気にはまりこんでいく。そこに、なにかわけのわからない力が働いている。そんな気がした。

「どうしたの？」

その水着を見つめている和音を見て、朱美が聞いた。

「あ、そうか。つけかた、わからないわよね」

朱美はそう言うと、立ち上がって、和音の横に腰掛

けた。

「むこうを向いて」

和音が言われたままに体をひねると、朱美は、その水着を持った手を後ろからまわし、下のラインをアンダーバストに合わせた。

そのあと、片手でその水着を押さえたまま、和音の肩口からのぞき込むようにして、もう一方の手で細いストラップを持ち、右肩にかけ、背中側にまわした。

それを左腋の下で、カップの横についたリングに通す。さらに、もう一方のストラップを左肩からまわして、右腋の下のリングに通し、両方のストラップを背中の真ん中で結んだ。つまり、ひものようなストラップが背中でクロスするデザインの水着なのだ。

朱美は、和音の肩に手をかけ、今度は、自分の方を向かせた。

そして、水着の縁を引っ張りカップの位置を整えた。

カップ部分の布は、けっして大きくはなく、乳首の三センチ上くらいまでしかない。そのせいで、バストの上部分がかなり大胆に露出し、さらにストラップに引っ張り上げられているせいで、ポリュームを増したように見えた。和音が見下ろすと、ふたつの「乳房」の間に、みごとな「谷間」ができていた。

それが自分のものであるだけに、和音は異様な感覚を覚えた。

しかし一方で、和音は、その水着のつけ心地を、悪くないと感じていた。さっきまでは、体を動かすたびに「乳房」が大きく揺れ、その不安定さが、気持ちの動揺の一因にもなっていたのだが、それが固定されたことで、幾分、その落ち着かなさから救われたような気がしたのだ。

「これも、はいてみて」

次に、水着のボトムの方を手渡された。

受け取った和音はちよつと戸惑ったが、今度は、すぐに立ち上がり、自分からそれに足を通した。

前の部分はフォームで隠されているとはいえ、股下から尻までは裸のまま。それに、いくら作り物でも、前のヘアが人目にさらされているのは、恥ずかしい。それを履くことで、この落ち着かなさからも解放される気がしたからだ。

ところが、それを履いてみても、ブラジャーほどの

効果はなかった。たしかにヘアと股の下は隠れたが、それはお尻全体を覆うようなものではなかったからだ。サイドなど、ひものようなものが腰骨あたりにかろうじて引っかかっているという感じで、かえって「露出」を意識してしまう。

「ちよつとヒップのポリュームがたりない気はするけど、最近は、小さいお尻の方がはやりだから、それも魅力的よね。和音ちゃん、今度のことが終わったら、



紹介してあげるから、ファッション誌のモデルやらない？」

和音の水着姿を見た朱美は、まんざら冗談ではない口振りでそう言ったあと、つけくわえた。

「そんなに気にならないけど、出発までに除毛はしておいた方がいいよね」

朱美は、そう言うてにつこりと笑うと「お化粧もしてみよ」と言った。

「えっ？……」

和音がなにか言う前に、朱美は、ふたたび和音をベツドに腰掛けさせ、バッグから化粧用品らしいものを出して、並べた。これも、試すつもりで持ってきたのだろう。

首筋あたりまでである和音の長髪を、両耳にかけ、後ろにまわしたあと、朱美は、その顔にファンデーションを塗り始めた。

「和音ちゃん、にきびとかないから、ナチュラルメイクでだいじょうぶよね。眉なんかは、出発前に、ちゃんとしたヘアメイクの人に頼んでカットしてもらおうから、今日はがまんしてね」

そんなことを言いながら、朱美は、和音の顔に、シヤドーを入れ、アイブロウし、そして口紅を塗った。

そのあと、髪を元に戻し、和音の顔をもう一度じっくりと見た。

「前髪、切ってもいいでしょ。旅行の後、短くそろえちやえばいいんだから」

また和音が返事をする前に、朱美は、バッグからはさみを出した。床屋などが使うものではなく、普通の事務用のはさみだったから、編集者の道具として、いつも持っているのかも知れない。

櫛で、トップとサイドの髪を分けたあと、前髪を顔の前にたらし、朱美は、和音の目の高さにはさみを入

れた。

そのあと、ブラシで、髪全体の形を整え、朱美はふたたびにっこりと笑った。

「和音ちゃん、すごくキュート。これならティーンズ誌のモデルだってできるわ。でも、かわいらしすぎるから、ウエディングの時は、ウイグ使った方がいいかも知れないわね」

そうか、僕は、「新婚旅行」に行くために、こんな

こと、されてんだ……。

朱美の言葉に、和音はあらためてそう思い、自分はまだ同意した覚えもないのに、まるでなにかに操られるように、ものごとが、どんどんそちらに向かって進行していることに、さらに不安になった。

「ねえ、この部屋は鏡ないの？」

朱美が聞いた。

「あ、そのダンスの扉の裏に」

和音が指し示すと、朱美はその一人用の片扉の洋服ダンスに近づき、開けた。

「こつち、いらつしやい」

その言葉に、和音がベッドを立つと、朱美は、和音をその前に立たせた。

「ほら」

矢代にあれこれされている時点から、まだ一度もちやんと自分の姿を見ていなかった和音は、そこに現れ

た姿に、去年の学園祭で初めて女装されて鏡を見たとき以上に、驚いた。あの時はわざとらしいほど赤いセーターとミニスカートで、まだいかにも「作った女」という感じがあったのに、そこに立っているのは、文字通り「ナマの女の子」だったのだ。

下に引き出しのついた洋服ダンスの鏡だから、足先までは映っていなかったが、腿はすらりとして、ハイレグのビキニパンティがよく似合っていた。色白のウ



エストは細く、縦長のおへそも形がいい。

ローカットのブラジャーは、たわわな乳房に食い込みながら押し上げて、そのボリユームを際だたせ、薄い肩に掛かってピンと張った細いストラップが、さらにそれを強調していた。

ファンデーションのおかげですべすべになった顔の肌は、まつげをビューラーで上向きにカールした目がくつきりとした印象を与え、ピンクの唇が、可憐さつ

け加えている。

前髪をそろえたショートボブという感じになった髪の毛、片方のサイドは、いつの間にされたのか、水着と同じ黄色い花飾りがついたピンで耳の上あたりでとめられている。

それはまさしく「ワイキキ・モードの女の子」だった。

和音は、先刻からのいろいろな動揺をすべて忘れて、

しばらくその姿に見入った。

その別人のような姿に、まるでキツネにつままれたような感じがした。というより、なんだか魔法にでもかけられたような気持ちだった。

そうだ、さっきの矢代さんの呪文で、僕は魔法にか  
けられているにちがいない。

なんだかぼーっとしたまま、和音はそんなことを  
思った。

いつの間にかその場を離れた朱美が、キッチンとの間のふすまを開けた。

「もう、いいわよ」

それに気づき、和音が振り返ると、秀明と矢代が入ってきた。

「……あっ」

秀明が小さく声をあげた。

「ね、すごいでしょ」

朱美の言葉に、秀明は呆然としたままうなづいた。

「うん、すごい」

矢代も言った。

「すごいけど、どうせなら、その水着の端の肌が破れて、そっから肋骨が顔を出してるとか、もっと手の込んだことをした方が……」

べつに示し合わせたわけではないが、他の三人は、その矢代の言葉を無視した。

「これなら絶対にだいじょうぶだと思うでしょ。井上君」

朱美の言葉に、秀明がまたゆっくりとうなづいた。

「ええ」

和音がその顔を見つめると、一瞬目が合ったあと、なぜか秀明は視線をはずし、うろたえたように目を泳がせた。

和音は、それにちよつと驚いた。

二十年におよぶつきあいの中で、こんな秀明を見るのは初めてだったのだ。

自分だけでなく、ここにいる全員が——まあ、矢代は除くとしても——魔法にかかっているのかも知れなかった。

第3楽章 虹のゲート

「秀明には、朱美さんが連絡してくれたんですよ？」

成田へ向かうタクシーの後部座席で、白いシルクのTシャツにピンクのブレザーとスカートという姿の和



音が聞いた。

「ええ。正面のタクシーポートにいるように言っておいたけど」

和音の隣に座った朱美が答えた。

「ちやんと来る……かしら？」

運転手を気にしての女言葉——昨日から何度も、朱美に、「人前では、女の子っぽくしやべらなきやだめよ」と、釘をさされているからだ。

「出発は、何時でしたっけ？」

「夜八時の便よ」

「じゃ、まだ、時間はだいじよぶよね」

「心配なの、彼のこと？」

「ううん、そんなんじゃないですけど」

和音は、あわてて否定した。べつに、秀明のことなんか心配したわけじゃない。女装で人前に入るのが心細くて、一人でも多く知っている人間がそばにいてく

れた方がいいと思っただけだ。

ハワイへの出発の日。和音と秀明は、別々の場所から空港に向かい、そこで落ち合うことになった。秀明は自分のアパートからだが、和音は、都内のホテルからである。

「いろいろな準備が必要だから」と朱美に言われ、和音は昨日から東京に出てきていた。

旅行用の私物は何も持ってこなくていいということだったので、矢代から渡された例のフォームと接着剤、剥離剤のセットを入れたバッグだけを持って、ほとんど着の身着のまま、昼過ぎに指定されたホテルに着いた。

すると、朱美は、すでに部屋で待っていた。

そこで、まず、脱毛クリームを渡され、風呂に入らされた。

服を脱ぐと、和音は、朱美に説明されたとおりにそのクリームを体中に塗った。クリームが乾くのを待っている間は、全身が我慢できないほどむずがゆかったが、シャワーで流し、そのかゆみから解放されると、下からは、すべすべの腕や脚が現れた。

脱毛剤で肌が荒れるといけないからと、やはり朱美から渡されたモイスチャー・クリームを塗り、ドライパウダーをはたいた後、持ってきたフォームを装着し

た。接着方法や剥がし方など、この間、矢代から何度も練習させられていたから、上下左右など間違えることなく、一人でちゃんどつけることができた。

朱美が用意してくれていたパンティとブラジャーも、なんとか一人でつけた。

僕はなんて馬鹿なことをしているんだと思わないではなかったが、脱衣場の鏡に映った姿が、この前と同じように、女の子としては完璧だと思えたのと、ここ

まで来てじたばたするのは、朱美に迷惑をかけるだけだと考え、その格好のまま、バスルームを出た。

すると朱美は、まだタックがついたままの女物の服を、何十着もベッドの上に並べて待っていた。

和音は、それらの服を次から次へと着せられた。

Tシャツとミニスカートというようなカジュアルな組み合わせが中心だったが、シャツドレスやワンピース、キュロットスカートやショートパンツ、それに、

キャミソールやスリッパドレスのようなものもあった。朱美がこの前言っていたように、水着も何着か含まれていた。

さらにそれ以外に、何種類ものサンダルや靴、ショルダーバッグも用意されていて、和音はその高いヒールのサンダルを履き、バッグを肩に掛けてふらつきながら行ったり来たりさせられた。

指図しながら、朱美がなんだか楽しそうにしている



ので、等身大のリカちゃん人形遊びでもしているつもりかと、和音は皮肉のひとつも言いたくなかったが、朱美はそれぞれのコーディネートを見て、なにかを判断しているようだった。和音に着せてみた後、服を二つの山に分けて積み重ねているのだ。たぶん、持っているくものと、タイアップ企業に返すものに分けているのだろう。作業を進めるうちに、ベッドの上に、大きい山と小さい山ができていった。

すべての服を着終わると、朱美は、「さあ、じゃあ、荷造りしましょ」と言っつて、小さい山の方を、ベッドの脇に置いてあつた段ボール箱にかたづけけた。和音が想像していたのとは逆で、ハワイに持っていくのは、大きい方の山だつたようだ。

「こんなに持つて行くんですか？」

和音が聞くと、朱美はうなづいて言つた。

「だって、和音ちゃん、どれ着ても似合うから。それ

にね、今度の特集、巻頭カラーで十二ページもとつちやつたの。写真だけでも、何十枚にもなるはずよ。ハワイに行っても、一日何回も着替えてもらうことになると思うわ。ムームーとかは、まだむこうにも、タイアップ先が頼んであるし」

それを聞いて和音は、どうやら自分は、ハワイを楽しめそうもないと覚悟した。まあ、そもそも、最初から楽しめるようなシチュエーションではないのだが。

その他に、下着類やアクセサリー、あれこれの小物もあつたから、けつきよく和音用の荷物は、大きなス―ツケース三個分になつてしまつた。

二人がかりで一時間以上かかつて、それらの荷造りが終わった頃には、もう時刻は夕方をまわっていた。

そのあと、外に出るのは時間がもつたいないからと、ルームサービスでとつた幕の内弁当を食べ、夜は、十二時近くまで、朱美のレクチャーを受けた。

旅行の間、女としてうまくやっけていくためのあれこれを教えられたのだ。

また高いヒールで歩かされたり、椅子やソファで立ったり座ったり、車の乗り降りを想定して練習させられたり、さらに、基本的な化粧の方法を講義されたりして、その間に、言葉遣いも矯正された。

といっても、そんなに厳しく訓練されたというわけではない。朱美にしても、もちろん、そんなことを人

に教えるのは初めてのことで、二人して、「やっぱり、その方が自然よね」などと話しながら、ことをすすめたのだ。だから時に、ふたりそろってふと我にかえり、夜のホテルの部屋で自分たちがしていることの奇妙さに、思わず吹いてしまったりもした。

しかし、かえってその方が、和音にとってにはよかつたのかも知れない。その結果、女装していることの緊張や照れが次第になくなり、不思議とリラックスして

いけた。ミニのワンピースで朱美といることが、なにか自然なことのように思えてきたのだ。

それは、この前感じた、朱美のことを姉のように慕う心情とも通じていた。和音は、朱美に対して妹のように振る舞うというパターンを身につけることで、女としてのペルソナをつくっていった。

ひととおりのことを終え、朱美が隣室に去ったあと、和音は、胸と下腹部のフォームをはがし、この日二回

目の風呂に入って、眠りについた。

そして今朝、朱美の電話で起こされた和音は、シャワーを浴び、またフォームをつけた。

そのあと、昨夜、朱美が出発の日のためにと選んでくれた、シルクのTシャツとピンクのスカートを身につけ部屋で待っていると、朱美はなんと、一人の男を連れて入ってきた。



驚いている和音に、朱美は「うちの雑誌と契約しているヘア・メイクさんよ」と紹介した。

女装姿を、初めて見ず知らずの男に見られ、和音はどぎまぎしたが、すぐに鏡の前に座らされ、その男に、髪をカットされた。

男は、この前、朱美が適当に切った前髪に手を入れ、サイドとバックの毛先も切りそろえた。そんなにかくさんカットしたわけではないのに、和音の髪型は、ず

つと女らしいものになった。

その作業を終えると、男は、先の曲がった小さなはさみを持ち出し、和音の眉をカットした。眉の太さが半分くらいになり、しかも、きれいな弓形ができあがると、和音の顔は、いよいよ優しい感じになった。

次に、本格的なメイクをしてみようと言われた。

「海外取材って言っても、モデル撮影ってわけじゃないから、スタイリストとメイクさんの予算はとれない

の。だから、メイクとかは、和音ちゃんが自分でしなきゃならないのよ。もちろん私も手伝うつもりだけど、しつかり教えてもらって覚えるのよ」

朱美は和音にそう言ってから、その男に、「説明しながらゆっくりやってね」と頼んだ。

昨日の朱美のレクチャーで、化粧については、アイテムの名前など基本的なことしかしなかったのは、こういうつもりがあったからなのかと思いつつながら、和音

は鏡に見入り、男の手元を観察した。

「ほら、こんなふうにはシャドウを入れれば、ちよつと大人っぽいセクシーな感じになるでしょ。じゃ、君、やってごらん」などと、男は、優しい口振りであいねいに教えてくれた。

「でも、君、あんまり、メイクとか、したことないでしょ」

「ええ、これまで、ぼ……あたし、そんなこと、ちや

んと考えたことなかったから」

「君の顔はこれだけ化粧映えするんだから、しなきやもつたいないよ」

「そうね」

——と、そんなふうには、和音は、自然に女っぽいしやべり方と仕草で受け答えするようになっていった。

昨夜練習したこともあるが、メイクするうち、鏡の中の自分の顔が見る見る女らしくなっていくというシ

チュエーションが、無理なくそうさせたようだ。

男が帰っていくと、朱美が弾んだ声で言った。

「すごい。あの人、全然疑ってなかったみたいね。身内だから、正体がばれたら、それはそれでいいと思つてたんだけど、プロをあれだけだませれば、もうだいじよぶよ」

どうやらこれは、テストも兼ねていたようだ。

そのあと二人は、ホテルをチェックアウトし、荷物

だけはそこに預けて、街へ出た。レストランで朝食兼昼食を食べたのだ。

女装姿で大勢の人の中を歩くのは緊張したが、和音は、昨夜同様、朱美に対して妹のように接すること、なんとか乗り切った。その結果、街角でもレストランでも、美人の二人づれということで注目されはしたようだが、その中に、疑いの視線は感じられなかった。和音は、この「最終テスト」にも合格したようだ。

そして、ふたたびホテルに戻った朱美と和音は、預けておいた荷物をタクシーに積み、成田へと向かったわけである。

タクシーが空港に着くと、すでに秀明は、約束の場所  
所で待っていた。

「ちゃんと来てたわね」

「そりゃ、来ますよ。よろしくお願いします」



タクシーを先に降りた朱美と言葉を交わす秀明の声を聞きながら、和音は、朱美から教えられたとおり、パンプスの足先をそろえて地面につき、ミニスカートがまくれ上がらないように気を配りながら車外に出た。

「やあ」

秀明はそう声をかけてきたが、顔を上げた和音と目が合うと、一瞬、ちよつと驚いた顔をした。眉やヘア

スタイルのせいで、和音の顔が、さらに女っぽく変わったからだろう。

しかし、秀明はすぐに、この前と同じ、どこか照れたような、ばつの悪そうな表情になった。

「ねえ、井上君。荷物があるの。運んでくれる？」

朱美の言葉に、まるで救われたとでもいわんばかりに、秀明は和音から視線を逸らして、タクシーの運転手がトランクから降ろした荷物を見た。

と、そこには、例の和音用のスーツケース三個と、朱美用のがひとつ並べられていた。

それを見て、自分の着替えなどは大きめのシヨルダ  
ーバッグ一個にまとめてきたらしい秀明は、「えーっ  
!？」と声をあげた。

けつきよく秀明は、空港備え付けのカートを借りて  
きて、それに積み込んだのだが、スーツケースのサイ  
ズが大きいぶん、一台では足りず、二台に分けて載せ

ざるを得なかった。

朱美は、それを確認すると、さっさと先に行ってしまつた。

はぐれてはまずいと思つた和音は、そのあとを追いかけようとしたが、二台のカートを片手ずつで持ち、押しにくそうにしている秀明のことが気になって、入口のあたりで立ち止まつた。

一台は自分が受けもとうかと思つたのだ。

と、やっと和音のところまで来た秀明は、「おい、  
なんで、こんなに多いんだよお」と文句を言った。

その口調がいつものものに戻っていたので、どこか  
安心したところもあるのだが、やはりちよつと腹も立  
ち、和音は、急にからかってやりたくなつた。

「だって、ハネムーンなのよ。女の子なら、おしやれ  
したいでしょ」

高いトーンの声でそう言ってみた。

すると、腰をまげてカートを押していた秀明は、ぽかんと口を開け和音の顔を見上げた。

その表情がおかしかったので、和音はさらにつづけた。

「ちゃんと運んでね。じゃないと、結婚してあげないから」

和音は、やはり手伝うのはやめることにし、くるりと振り向いて朱美のあとを追った。

生まれて初めて秀明より優位な立場に立った気がして、和音は、なんだかこの旅行が楽しいものなりそうに思えてきた。

和音が追いついて並ぶと、朱美がウインクして言った。

「ね、女って、トクでしょ」

「関口さん、待たせちゃいました？」

チエックインカウンターの近くまで来たところで、朱美は、そこに立っていた一人の男に気づき、話しかけた。

「いや、俺も今着いたところ」

和音にも、一目見て、その男が同行するカメラマンだということがわかった。

男の足もとに、ジュラルミンのカメラケースや黒い布製の三脚バッグが置かれていたからだ、それにも



増して、すぐにピンときたのは、男が、テレビドラマなどに出てくる典型的なカメラマンのタイプだったからだ。大柄な体にダウンベストをはおり、スタジアムキヤップをかぶった浅黒い顔は、あご全体を覆うひげで縁取られていた。

二言三言、その男と会話を交わしていた朱美は、秀明がやっとのこと追いついたのを見はからって、それぞれを紹介した。

「こちら、カメラマンの関口さん。それから、こっちは今度の特集の主役のお二人、新郎の井上秀明君と、新婦の高岡和音さん」

そんな紹介のされ方に、和音がちよつとどぎまぎしている、関口が「よろしく」と言つて、手をさしだしてきた。

「よろしくお願いします」

握手すると、ぷーんと酒臭いにおいがした。こんな

時間まで残るほどひどい二日酔いなのか、それとも、昼間からアルコールが入っているのか、いずれにしても、表面上の人当たりのよさとは別に、どこか世をすねたような感じのする男だった。

秀明が関口とあいさつしているときには、すでに朱美はその場を離れ、チェックインカウンターの方に向かっていった。

見ていると、朱美は、カウンターの中にいるグラマン

ドホステスにはなく、近くに立っていた男に合図を送り、そこに近づいた。それが、持田の言っていた航空会社の担当者なのだろう。

その男が、すでに搭乗券の手配をすませてくれたよう、朱美は、男と話しながら、チケットと、事前に預けていたらしい四人分のパスポートを受け取った。

そのあと、荷物のチェックインもその男がやってく

れ、身軽になった四人は——まあ、和音と朱美は、着いたときからすでに身軽だったが——出国ロビーへ降りるエスカレーターに向かった。

と、その途中、朱美が、「男性陣はちよつとここで待っててね」と言った。

「なに？」

関口が聞くと、朱美は「女には、いろいろ、しなきやいけないことがあるのよ」と答え、和音の手をとつ

た。

朱美が和音を引っ張っていったのは、女性用のトイ  
レだった。

「僕、べつに、今はしたくないから」

和音が、その入口でちよつとためらったようすをみ  
せると、朱美は――

「なにたじろいでのよ。これからだって、何度も使

わなきやならないのよ。だいじよぶだからいらっしやい」と言った。

中に入ると、朱美は、個室ではなく、シンクの鏡の前に和音を導いた。

「女子トイレは、なにも、用を足すためだけに使うんじゃないのよ。口紅がとれかかってるわよ、お嬢さん」

朱美の言葉に、ちよつと照れながらも、昨日、「お化粧には気をつかって、ときどき直すのよ」と言われ

たのを思い出し、和音は鏡に顔を寄せた。

「自分で、できるわね」

それにうなづき、和音は、バッグの中からリップステイクを取りだした。

和音が鏡を見ながら慎重に塗り直していると、朱美は、自らも口紅を直しながら言った。

「じつはね、関口さんには、和音ちゃんのこと、話してないの」



「えっ？」

和音は、手をとめて、朱美の横顔を見た。

つまり、正体は男だということを知らせてはいない  
ということだろう。

「だから、彼の前では、ちゃんと女の子演ってほしいのよね」

「……でも、どうして……？」

関口は、一週間、行動を共にするスタッフである。

事情を説明すれば、人にばらす心配などないだろうし、知っておいてもらった方が、なにかと好都合に決まっている。

それに、旅行の間ずっと、和音は関口にファインダ―を通して見られつづけるのだ。カメラマンである以上、観察眼も鋭いだろうし、いつ気づかれないとも限らない。それならいっそのこと、最初から話しておいた方がいいと思うのだが……。

「あのね、彼、ゲイなの。それも、ガキ専ていうの？  
美少年趣味。彼の毒牙にかかったアイドルの男の子  
が何人もいるっていうわ。カメラマンとしてはすごく  
実力のある人なのに、こんな情報誌なんかの仕事しな  
きゃならないのは、それで、ほされちゃったせいらし  
いのね。ふだんは穏やかな人なんだけど、その気にな  
ると、人が変わっちゃうっていう話。だからね、和音  
ちゃんが女の子であるうちは安全だけど、女の子みた

いな男の子だって知られたとたん、どんなことになるかわかったもんじやないって、彼とは長いつきあいの編集長が言うのよ。和音ちゃんの身の安全のためにも、彼には隠しておこうって」

ただでさえ、外国で、一週間も他人の目を欺かなければならないというのに、「仲間うち」でさえ安心はできないというのだ。その上、もしばれたら、身に危険がおよぶことになるかも……。

「どんなことになるかわかったもんじやない」って、  
いったいどんなことになるんだらう？

そう想像をめぐらせたたん、和音のブラジャーの  
中で「胸」が揺れた。思わず、武者ぶるいしていたよ  
うだ。

「だけど、なんでわざわざ、そんな人を……？」

「当選者を決める前に頼んであったから、変えられな  
かったのよ。それに、腕がよくって、一週間も予定開

けられるカメラマンなんて、そうざらにはいないしね。前から言っとけばよかったけど、そのことで、和音ちゃんやんがナーバスになって、『行かない』って言い出すと困ると思って、黙ってたの。ごめんね。でも、彼ならまちがいなく、和音ちゃんのこと、きれいに撮ってくれるはずよ」

もちろん、そんなことは、なんの救いにもならない。和音は、そのことを今まで黙っていた朱美に対して

もちよつと腹が立ち、なにか言おうと思った。が、その時、団体ツアーらしい十人ほどの女の子たちが、浮かれた声でしゃべりながらいつせいに入ってきたので、口をつぐまざるをえなかった。

入ってきた女の子たちのうち数人は個室に消えたが、残りには、和音たちと並んで、鏡を見ながら化粧直しを始めた。その女の子たちが、鏡越しに和音の顔をちらちらと見ている。

その視線が、なんだか怖い。

男の時には感じたことのない、値踏みするような、もつと言えば、悪意のようなまなざしが混じっているのだ。

和音は、今しがた聞かされた話も含め、これから始まる一週間が、またとんでもなく気の重いものに思えてきた。さつき、秀明との会話で感じた、ちよつと心弾むような感じなど、あつという間にどこかに吹き飛



んでしまった。

そんなことを感じながらも、とりあえず口紅を塗り  
終わり、ステイツクをバッグにしまった和音に、また、  
朱美が耳打ちした。

「今の話、いちおう、井上君にも伝えといて。彼の口  
からばれるといけないから。それから、いくらかつこ  
いって言うても、井上君は関口さんの趣味じゃない  
と思うから安心していいわよ。せつかくのハネムーン

で、カレ盗られちやたまらないものね」

和音は、朱美のわりとマジな口調にも、シヨックを受けた。

どうやら朱美は、まだ、和音と秀明の関係を、そんなふうに誤解したままなのだ。

秀明たちを待たせておいた場所に戻ると、そこに、先刻チエツクインをやってくれた航空会社の男と、グ

ランドホステスが一人、いっしよに待っていた。どうも、チェックイン・カウンターから追いかけてきたらしい。

そのことに、朱美が不思議そうな顔をすると、関口が言った。

「ファーストクラスだから、専用のラウンジがあるんだってさ」

「あ、そうなの？　いつも、エコノミーしか使ってたな

いってことがばれちゃったわね」

朱美がそう言って笑いかけると、航空会社の男も笑いながら、「急にいなくなっちゃったから、びっくりしましたよ。彼女がご案内しますから」と言った。

そのグランドホステスについて行き、フロアの隅に何気ない感じで取り付けられたドアを入ると、中は、大きなホテルのティーラウンジのようになつていた。

ペルシヤ織りのカーペットの床に、余裕を持った間隔でソファアが置かれ、コーナーには、ドリンクカウンターがつくられている。クラシックふうのインストルメンタルが流れ、部屋の外の、空港の喧噪とは大違いだ。

そんなゆったりした部屋の広さに反して、先客は二組しかいなかった。上等なビジネススーツを着た企業幹部らしい四人組と、ゴルフウェアふうのカジュアル

な装いの上品な老夫婦だ。

同じカジユアルでも、履き古したジーンズで来てしまった秀明は、なんだか居心地が悪そうにしている。こんな場所では、さすがの秀明も気後れするにちがいない。

しかし、落ち着かないという点では、和音だって同じことだった。ゆったりした低いソファに、ミニスカートの座るのは、けっして楽なことではない。和音は、

裾に手を添えながら浅く腰掛け、膝をぎゅつとそろえて、脚を傾けるようにした。きのう、朱美から、いろいろ教えてもらっておいでよかつたと思つた。そうでなかつたら、とても、こんな芸当はできない。

「お飲物は、なにがよろしいですか？」

席に着くとグラントホステスが聞き、それぞれが注文した。

和音たちはソフトドリンクを頼んだが、関口は水割

りをオーダーした。

朱美が、それを見とがめるように言った。

「関口さん、今度の特集は、行き帰りも押さえなきやいけないんだから、あんまり、酔っぱらったりしないてくださいね」

「うん、わかってるって。それじゃ、さっそく、『旅立ち前の二人』ってのを撮りましようか」

関口は、そう言って、肩に掛けていた三十五ミリの



一眼レフのキャップをはずした。他の撮影機材は託送貨物として預けたが、一台だけは、手荷物として機内に持ち込むらしい。

「うーん、そうだな。あそこの世界地図の前にでも立つてもらおうかな」

いきなり撮影の体勢に入った関口に戸惑いながらも、和音と秀明は席を立ち、壁に飾られた航空会社の路線図の前に立った。

「なに固まってるの？　これから、ハネムーンに行くんだろ。もっとリラックスしようよ。そうだ、和音ちやんって言ったっけ、彼氏と腕組んでよ」

関口の言葉に、和音が秀明の腕をとろうとすると、反射的に秀明が体を反らすようにして逃げた。

「……ん？」

それを見て、関口は構えていたカメラを降ろし、不審そうな顔をした。

それに気づいたのだらう。

「ねえ、関口さん」

すかさず朱美が声をかけた。

「こんなところで撮るより、ロビーとか免税店とかをバツクにした方が、らしいでしょ。もう一度、外へ出て撮りませんか？」

「そうかな……？　でも、もう飲み物が……」

「飲む前にやっつけちゃいましょうよ。ピントの甘さ、

お酒のせいにするなんて、なしですよ」

そう言って、朱美は、関口の腕をつかみ、無理やり、さつき入ってきたドアに向かった。

そして、その時、和音の方をちらつと振り向き、なにか目配せした。

和音も、朱美の意図しているところがわかり、ついでいこうとした秀明をちよつとの間押しとどめ、遅れて外に出た。

会話が聞こえない程度の距離をとって、ゆつくりとあとを追いながら、和音は、先刻、朱美から聞かされた話を秀明に伝えた。

「だから、関口さんがそばにいるときは、新婚カップルやってなきやいけないんだってさ」

和音が言うと、秀明は頭を掻きながら言った。

「まじかよお。：：：そうか、それで、さつき二人つきりになったとき、どっか会話がかみ合わなかったんだ

な」

「あれ？　もう、なんか、まずいことしやべっちゃつたのか？」

「いや、すぐに航空会社の人 came たら、ばれてないとは思うけど。しかし、：：まいったなあ」

秀明は、口ごもりながらぶつぶつ言った。

あんなに強引に、このむちやくちやな旅を実現させておきながら、和音が実際に女装して目の前に現れた

とたん、秀明はどうも、いつもの「調子よさ」の歯車  
が狂ってしまおうようだ。こうして男言葉で話している  
ときはまだいいが、さっきのように、和音が女っぽい  
仕草を見せると、とたんに落ち着かなくなるのである。

そのあと、ロビーでフライトタイムの掲示板を見て  
いるところと、免税店で買い物をしているという設定  
で撮影をしたのだが、その時も、やはりそうだった。  
手をつないだり、腕を組んだり、和音が関口の注文に

ちやんと応えているのに、秀明は、「表情が硬いなあ」とか「彼女の方を見て、もつと笑いかけてよ」とか、さんざん言われていた。

和音は、そんなふうには秀明が緊張しているのが面白くて、わざと甘えたまなざしを送ったり、秀明の体にもたれかかったりした。

もちろん、いつもの仕返しをしてやっているのだが、一方で和音は、女装していることで、秀明を相手に、



そんな「意地悪」ができるようになる自分自身にも驚いた。

「ほら、言ったとおりでしょ」

免税店で撮影しているとき、そんな声が耳に入ってきた。

ちらり見ると、買い物する人混みの中に、さつき、トイレで出会った女の子たちが立って、こちらを見ていた。

「やっぱり、あの子、モデルなのよ。どっかちがうと  
思ったもん。いっしょにいたあっちの人、マネージャ  
ーよ、きつと」

先刻の彼女たちの視線はそういうことだったのかと  
思い、和音の心の中で、優越感にも似た気持ち、は  
じけた。

とはいえ、空港の人混みの中で写真を撮られ、しか

もそれが慣れない女装姿だというのは、気疲れするシチュエーションであることはたしかだった。それに、和音は簡単なスナツプのつもりでいたのに、撮影は思ったより時間がかかったのだ。プロのカメラマンが、一枚のカットに、あんなに何回もシャッターを押すとは知らなかった。

そんな撮影を終え、ぐったりした和音は、ファーストクラス専用ラウンジに戻ったあと、フライトまでの

時間、まわりの視線に気をつかいながらも、なんだかぼーっと過ごした。

やがて時間になり、さっきの航空会社の担当者が現れた。

「そろそろ、ご搭乗の時刻ですから、ご用意なさってください」

男は全員にそう言った後、「高岡様、ちよつと」と和音を呼んだ。

席を立てて和音が近づくと、男は、さもなにかの確認のようにバインダーに挟んだ書類を見て、ささやいた。

「出国の係官には、女装趣味の男性だということを通しておきました。ここは問題なく通れると思います。ただ、栄光出版さんからも、ハワイの方には内密にということだったので、ホノルル空港にはなにも言っていないです。うまくやってください。でもまあ、

たぶん女装のことはだいたいじようぶでしょう。むしろ、薬物を隠しているとか、そっちを疑われる方が面倒なことになりますから、なにをきかれても、できるだけ堂々として、へたに動揺したりしないでください」

その話に、和音は不安を感じたが、とりあえずうなづくしかなかった。

そのあと男は、先に立って、搭乗するまで和音たちを案内してくれた。

出国審査のゲートで、男の指し示した係官のカウンターに行くのと、係官は、ちらりと顔を見ただけで、何も言わずパスポートにスタンプを押し、EDカードをホチキスどめした。

手荷物検査のコンベアにショルダーバッグをのせ、自らも金属探知機のゲートをくぐると、次はボディチェックだ。和音はちよつと迷ったが、女性の係官が手招きしたので、その前に立ってチェックを受けた。

さすがにファーストクラスだ。

機内に入ったとたん、和音は、一昨年の夏、語学研修でアメリカ本土へ行った時に乗ったエコノミークラスとのちがいに、感心してしまった。

それは、客室と言うより、まさに「ラウンジ」というのがぴったりだった。

なにより、座席の間隔が思い切り広い。倒せばフル



フラットになるらしい背もたれの分を考えても、まだ十分な余裕があつた。

カーペットやインテリアも、飛行機の中だとは思えないほど高級で、しかも落ち着いた感じだ。

シートの座り心地も、エコノミーとでは雲泥の差があつた。

「うわ、映画が四チャンネルと、他にゲームのチャンネルまであるぞ」

秀明は、席に着くやいなや、シートに取り付けられたテレビユニットなどをあれこれいじって感心している。

本格的シーズン前のウィークデイということもあるのだろう。四十席ほどあるファーストクラスの客室には、和音たちを含め、三組十人ほどの客しか乗っていない。なかつた。

和音と秀明の席は、客室の右、前から二列目の窓際

で、朱美と関口は、そのすぐ後ろの席に並んだ。

あとは、後方の席に、お金持ちらしいファミリーが  
一組、そして、和音たちのちようど反対の左側二列目  
に、先刻、空港のラウンジにいた上品な老夫婦が座つ  
ていた。

和音がそんなふうに見まわしていると、その老夫婦  
の妻の方と目が合った。和音が会釈すると、老婦人は、  
にっこりと笑い返してきた。

機が滑走路にまで動き、エンジンの点火音が低く伝わって、次第に加速する感覚があり、やがて、それまでの細かい揺れが消え、体が浮く感じがした。

離陸の瞬間、秀明は「やったあ！」と声をあげた。

小学生でもあるまいし、と、和音は思ったが、秀明にしてみれば、これで確実に「リッチなハワイ旅行」ができるのだという、勝利の声だったのかも知れない。

機長の歓迎の放送やら、ライフベストのつけかたの

説明やら、離陸のあとのおきまりのあれこれがあったあと、すぐに食事の時間になった。

機内食のメニューも、ファーストクラスらしく幾種類もあって、同じ洋食でも、秀明は肉料理とライスを頼み、和音は魚料理とパンの組み合わせを注文した。

なんだか、あまりボリュームのあるものを食べたくなかったのだ。秀明と和音ではもともと体格がちがうから、食欲にも差があるのだが、昨日からずっと「女

の子」をやっている和音は、自分の嗜好まで変わってしまったような気がした。

食事の間も、そのあとも、秀明はほとんど話しかけてこなかった。食べ終わると、さっさとヘッドホンをつけ、手元のテレビで、映画を見始めたのだ。

それで和音も、しばらく秀明と同じようにしていたのだが、SFXにお金はかかっているにしてもストーリーが陳腐なその映画に飽きてしまい、途中でやめた。

テレビを切って、秀明の方を見ると、秀明は、それに気づいていないように映画に集中し、顔を上げなかった。

和音は、なんだか、秀明がわざとそうしているような気がした。

先刻から、食事のオーダーなどスチュワーデスとの会話でも、和音は、できるだけ女として不自然でなく見えるように、仕草や言葉遣いに気をつかっていた。

秀明は、そんな和音の様子に——昼間からずっとそうだったように——とまどっているのだろう。慣れないで、どう話しかけたらいいのか、わからないのかも知れない。

そうは思ったが、和音は、なんだか退屈してしまつて、だんだん秀明に対して腹が立ってきた。

自分が、こんなふうは無理をして女装し、女の子を演じているのは、もとはといえ、秀明の自分勝手な



思いつきから始まったことだ。いわば、秀明のためにやっているのだ。それなのに、この態度はないだろう。

和音が浮かかない顔でそんなことを考えているとき、後ろにいた朱美がやって来て、和音と秀明の席の横に立った。

と、それまで画面を見つめていた秀明は、すぐにそれに気づいたらしく、あわててヘッドホンをとった。

「なんですか？ 朱美さん」

和音は、その秀明の豹変ぶりに、さらに腹立たしい  
思いがした。

「うん、ちよつと撮影させて。飛行機の中の二人つて  
いうのも押さえておきたいから」

朱美はそう答えたあと、和音に向かって言った。

「和音ちゃん、その前に着替えない？」

「ええ」

和音は、その言葉に、シヨルダーバッグを持って立

ち上がった。

今朝から履いているスカートは、ブレザージャケットとそろいの、カジュアルだがタイトなもので、ゆつくりと休めない気がしたのだ。

朱美が指さして示してくれたので、和音は客室の後ろのトイレに入った。

ファーストクラスのトイレは、トイレというより、文字通りレストルームというつくりだった。飛行機の

中だから、けっして広くはないのだが、便座のあるスペース以外に、個室の中にも洗面台が取り付けてあり、その鏡の前でじゅうぶんに着替えができた。

和音は、そのシンクの横にシヨルダーバッグを置き、中から、キャミソールとスカートを取りだした。手荷物に入れてもかさばらず、機内でゆったりでき、しかも、ハワイでの到着時に着てもおかしくないものということ、朱美が選んで、他の服とは別にしてお

いてくれたものだ。

キヤミソールといっても、純然たるアウター用で、ベロアふうの薄くて光沢のある白い生地に、共布のひものようなストラップがついている。スカートは、やはり薄手の黒で、裾の近くにぐるりとアラベスクふうの花柄の刺繍が入っていた。膝上丈だが、裾の広がったゆったりしたつくりで、キヤミソールと合わせると、開放的だが上品なかわいらしさのあるものになる。

それらを着ようと、今着ているシャツを脱ぎかけ、そこで和音は、重大なことに気がついた。

それで、いったん客室に戻り、朱美を呼んだ。

「あのキャミソール、着られませんか」

トイレのドアの前で和音が言うと、朱美は「どうして？」と首をかしげたあと、すぐに気づき、つぶやいた。

「そうか、しまった。ブラね」

今、シャツの下に着けているブラジャーでは、ストラップが丸出しになってしまふのだ。ストラップレスのブラも用意してあったのだが、それは、例のスーツケースの中に入れてしまった。

和音が困った顔をしていると、ちよつと考えていた朱美が、うなづいて言った。

「いいわ。かまわないから、ノーブラで着ちやいなさい」

「えっ、でも……」

「だいじよぶよ。ブラなんてしなくても、もともとバストの形はきれいなんだから」

朱美は、そう言うのと、さっさとトイレのドアを開け、まだ戸惑っている和音を押し込んだ。

「先っぽが目立っちゃうかも知れないから、あれ、貼つときなさい。持ってるでしょ？」

困惑の表情のまま、うなづいた和音の目の前で、ド



アが閉まった。

洗面台の鏡の方を振り返った和音は、しばらく考えていたが、意を決して、シャツを脱ぎ、ブラをはずした。

とたん、形のよいふたつの乳房が大きく揺れた。

その乳房は作り物だとわかっていても、そんな姿を目の当たりにすると、いまだにはつとする。

それで和音は、すぐ鏡から目をそらし、シヨルダー

バッグからポーチを取りだした。さらに、その中から、肌色で円形のシールのようなものを探し出した。昨日、いろいろな服を試しているとき、「薄い水着の時はこれをつけるのよ」と、朱美から渡されたものだ。ニツプル・パッチというのだということも、その時、朱美から聞いた。

その一枚を持った和音は、裏紙を剥がし、ふたたび鏡を見ながら、左の乳首に貼り付けた。矢代の作った

このフォームの乳首は、いつも出っ張った状態で、もちろん、実際の女性の乳首のように大きさを硬さを変えざるわけではない。そのせいで、パッチは貼りにくかったし、貼ったあとも、先端がとがった感じだけは残ってしまった。

右にも同じようにパッチを貼ったあと、キヤミソールをかぶってみた。

やはり思ったとおり、キヤミソールの下で乳房が揺

れるのがよくわかる。しかも、キャミソールの光沢のある生地が、よけいにその動きを目立たせた。

スカートも履き替えたあと、脱いだものをたたみながらもう一度鏡を見た和音は、ちよつと体を動かすだけで、キャミソールの表面が大きく揺れることに、いよいよ不安が募っていく気がした。そして、ブラジャーというものは、けっしてバストの形を整えるだけのものではないのだと確信した。これでは、裸の自分自

身をさらしている——もちろん、和音の場合は、本当の「自分自身」ではないのだが——のと、ほとんどかわらないではないか。

それで、せめてもとという思いから、バッグから、やはり朱美に渡されていたパフュームの小瓶を取りだし、耳たぶのあたりに軽くスプレーした。香水だけでも身にまどっていれば、幾分かはそれをカバーできるような気がしたのだ。

食事だとれてしまった口紅を塗り直したあと、トイレを出て席に戻ると、さっそく、機内での撮影が始まった。

仲むつまじそうに話しているところや、ガイドブックを見ながらハワイでの計画を練っている図といった写真を撮ったのだが、和音の方が――ノーブラであることに恥ずかしい思いをしながらも――、なんとか関口の注文に応えて笑顔をつくっていたのに反し、秀明

は、相変わらずぎこちない表情しかつくれなかつた。

特に、和音が、肩を出したキャミソール姿でいることに落ち着かないらしく、「顔を見合わせて」などと  
言われても、必死に視線がそれより下にいかないよう  
にしていた。にもかかわらず、和音が体をまわしたり  
するたび、かすかに視線が揺れるのだった。

窓の外を秀明が指さし、和音が身を寄せてそれをのぞき込む——実際は、夜の太平洋上など、なにも見え

ないのだけれど——という設定で撮ったときだった。和音が秀明の肩にもたれかかるようにしたせいで、和音の「乳房」が秀明の左腕に押しつけられた。そのとたん、「井上君、また顔がフリーズしてるぞ！」と、関口の声が飛んだ。

ひととおりの撮影を終え、関口が席に戻っていくと、秀明は大きくため息をついた。

「なんか、今日のお前、らしくないよね」



人に聞こえないように、小さな声で和音が言うのと、秀明は「ああ、どうもな……」とつぶやき、また視線を逸らして、テレビユニットをいじり始めた。

やっと退屈を紛らすための会話のきっかけを見つけたと思ったのに、それを拒否するような秀明の態度に、和音はまたむっとした。

と、秀明もその雰囲気に気づいたのか、ヘッドホンをつけ掛かった手をとめ、ちらりと和音を見た。

「お前、なんか、いい匂いするね」

その秀明の言葉に驚いて、和音は、とっさに「え？  
そう？」と、とぼけた。

しかし、秀明がそれに気づいたことが、なんだか妙  
にうれしいような気がした。頬が、ぽつと赤くなつた  
のが、自分でもわかった。

でも、それは、それだけのことだった。

そのあと秀明は、テレビユニットでゲームをやり始め、むきになったようにコントロールドボタンを連打しつづけた。

和音は、また手持ちぶさたで、さつき撮影の小道具に使ったガイドブックを読んだりして、時間を過ごした。

やがて、スチュワードスが羽毛布団——ファーストクラスでは、毛布でなくて、絹の羽毛布団なのだ——

を配ってくれて、照明が落とされた。客室の中の灯りは、起きている人のシートのスポットライトだけになった。

しばらくすると、また朱美が立ってきて、「三時間くらいですぐ朝になるから、寝ておいた方がいいわよ」と言った。

それで、和音はライトを消し、シートを倒した。秀明も、ゲームをやめて寝ることにしたようだ。

しかし、和音はなかなか寝つかれなかった。

すでに昨日から、いろいろなことが矢継ぎ早に起こって、興奮しているのだらう。それに、なにより、これまでの人生とまったく立場を変えた行動を要求されていることが、精神に緊張を強いているにちがいない。

その上、これから六日間、ハワイで女の子として過ごさなければならぬというのだ。そのことを考える

と、さらに目は冴えた。

でも、今までのところ、どうやら僕は、思った以上にうまくやれているようだ。撮影の時などでも、そんなに抵抗なく、女の子らしく振る舞えている。もしかしたら、僕には、もともとそういう要素があるのかも知れない……。

和音の思いは、そんなことにも発展し、よけいに、眠気は遠のいていった。

寝つかれないまま、一時間くらい、シートでもぞも

ぞしていたときだった。

和音は、ふと、なにかの気配を感じて、身を起こした。

見ると、薄明かりの中で、反対側の座席の老婦人がこちらを見て、微笑んでいた。

和音がちよつと首をかしげるようにすると、老婦人は、手招きするような仕草をした。

「なんなんだろう？」と思ったが、老人のこと、身

体に異常でも起きたのかも知れないと心配になって、和音は立ち上がり、座席の間を通ってそばまで行った。

「寝られないんでしょ？」

背もたれを半分ほどしか倒していない老婦人は、和音の顔を見上げて言った。そして、和音がうなづくのを見て、つづけた。

「私もなの。ご迷惑じゃなかったら、ちよつと、お話でもしない？」



老婦人が、通路を挟んだ横の席を指し示したので、和音はまたうなづいて、そこに腰掛けた。彼女の声の響きが優しく、さつきからの気持ちの高ぶりが静ま  
つていくような気がしたからだ。

「ご結婚を控えてらっしゃるんだものね、神経質になるのも無理はないわ」

腰掛けた和音が、背もたれを調節して老婦人と同じくらいの目の高さになると、彼女はそう言った。

どうしてそんなことを知っているのかと、和音が不思議そうな顔を見ると、老婦人は、ちらりと朱美の席の方に目をやった。

「さつき、あの方にお聞きしたの。あちらで、お式を挙げるんですってね」

そういえば、撮影している最中、朱美はストロボの光のことを他の客に詫びてまわっていた。その時に説明を受けたのだらう。和音はそう思い、またうなづい

た。

「ええ」

「お式が間近に迫ると、女は、どうしてもあれこれ考  
えちやうものね」

そう言われても、和音は曖昧な顔をするしかなかつ  
た。それで、話を変える意味もあつて、聞いてみた。

「ハワイには、よくいらつしやるんですか？」

「ええ、この人がリタイアしてからは、年一回くらい

は。でもね、いつもは一週間くらいで帰るのよ。今度は、一ヶ月以上いられるんですって」

「へえ」

「じつは、今年で、結婚して五十年目なの」

「金婚式……ですか？」

「ええ。それでね、この人が、記念にしばらくハワイで過ごそうって言うてくれて」

「どうやら、和音のことを心配してというより、それ

を、誰かに話したくてしかたがなかったのかも知れない、と、和音は思った。

「子供とか、孫とか、この人の仕事のこととか、そんなことなにも考えずに、ずっとふたりつきりでいられるなんて、ほんとに新婚の時以来」

薄明かりでよくはわからなかったが、うれしそうに言った老婦人の頬がちよっと赤らんだように見えた。

和音は、そんな彼女のことをかわいいと思った。

「まあ、この人にしてみれば、毎日ゴルフ三昧っていうのが、いちばんの目的でしょうけどね」

自分のことが話題になっているのを、夢の中で察したのかも知れない。その時、老婦人の向こうで寝ている夫が、寝返りを打った。そのせいで、膝にかけていた羽毛布団が床に落ちた。

「あ、ご主人のお布団……」

和音が言うと、老婦人は、そちらを見て起きあがり、

布団を拾って、夫にかけ直した。

「ありがとう。こんなに気のつく方といっしょになれるなんて、ご主人、幸せね」

ふたたびこちらを見て言った老婦人の言葉に、和音は、また曖昧な顔をした。

と、老婦人は、それを別の意味にとったようだ。

「さつきからずっと、浮かない顔してらしたけど、けんかでもしたの？」

やはり、和音と秀明のようすを見て、心配してくれていたのも、また、たしかなようだった。

それで和音は、先刻からの秀明に対する感情を、こ  
う表現してみた。

「けんかしたわけじゃないんですけど、なんだか、ず  
つと、機嫌が悪くって……」

すると、老婦人は、なぜか「ふふ」と笑った。

「……？」



「それはね、うれしいのよ」

「え？」

「こんなにきれいなお嫁さんをもらえるのに、うれしくないわけがないじゃない。男の人って、いつまでたっても、子供みたいなところがあって、本当にうれしいと、照れちゃって、逆にすねたみたいにするのよ。」

この人もそう。ちつとも素直じゃないんだから」

秀明のとっている態度は、それとはちよつと意味が

ちがうと和音は思ったが、一方で、どこか当たっているような気もした。

「時々ね、私も、この人のこと、なんていやな人なんだろうって思うわ。この世の中に、これほどいやな人は他にいないなんて。でもね、これだけ長くいっしょにいと、お互いの人格の中に入り込んでやってるみたいなどころがあってね。私の考え方や感じ方の中に、この人がどっかかりと腰を下ろしちやっってるって気がす

るの。この人にしてもそうだと思うわ。これから先、どっちが先に逝くのかわからないけれど、残った方は、きつと、心の中にぽかっと穴があいたような気持ちになるんでしょね」

独り言のように言った老婦人のその言葉を、和音は、また、自分と秀明のことに照らして考えていた。もちろん、和音と秀明は夫婦ではないが、生まれたときから、ほとんどずっといっしょにいることはたしかだ。

僕の考え方や感じ方に、秀明の存在が影響を与えているのだろうか？ 秀明がいなくなったら、僕も、心の中に穴があいたような気持ちになるのだろうか？

一瞬、そんなふうに思ってから、和音は、あわてて、それを否定した。

いや、僕はいつだって、秀明が目の前から消えてくれることを願っていたじゃないか。

と、老婦人が、話題を変えて聞いてきた。

「あなた、お名前、なんておっしゃるの？」

「高岡です」

「ううん、そうじゃなくて、下のお名前。名字は、もうすぐ変わってしまうんでしょ」

「え、ええ、まあ……。『かずね』といいます」

「どんな字を書かれるのかしら？」

「音楽の『和音』と書いて、『かずね』と読みます」

和音は、いつも名前を聞かれたとき答える言い方で、そう言った。

「そう、和音さん。きれいなお名前ね。やさしいお嬢さんになるようになっていう、お父様とお母様のお気持ち、伝わってくるわ」

もともと気に入らない名前だ。そんな言われ方をすれば、これまでなら当然、腹が立っていただろう。でも、和音はその時、不思議といやな気持ちはしなかつ

た。むしろ、なんだか勇気づけられているような気さ  
えした。

「これから先、まだ、いろんなことがあると思うけど、  
和音さんなら、まわりの人の気持ちも察して、自分に  
も正直に生きていかれると思いますよ」

年寄りらしく、脈絡も論旨もない会話だと思ったが、  
すべてが、どこか深いところをつながっているような  
気もした。

「お幸せにね」

老婦人は、最後にそう言った。

けつきよく、和音は、一時間も寝ないうちに起きてしまった。

和音と秀明の席の窓は、スライド式の日除けが閉まっていたのだが、後ろの席の家族連れや、老夫婦の夫の方が日除けを上げたらしく、客室の中が急に明るく



なつたからだ。

「うわー、きれい！」

家族連れのもの、子供たちが、窓の外を見てはしやいでいた。

それで、和音も外が見たくなくなり、寝ている秀明の上に身を伸ばすようにして、窓のスライドを上げてみた。

一面の海。

どこまでも広がるその表面には、朝日を受けた細か

な波が、まるで金のレースを広げたように輝いていた。空も青く、水平線近くに、白い雲のかたまりが、絵に描いたようにはつきりした輪郭で、二つ三つ浮かんでいた。

和音が、その雄大な景色にため息をつくとき、その下で、秀明が「うーん」と声をあげ、目を覚ました。

秀明は、ひどくまぶしそうに、目をしばたかせた。もちろん、窓の光がまぶしかったのだらうが、もし

かすると、白いキャミソール姿の和音がまぶしかったのかも知れない。

それからしばらくして出された朝食を食べ、そのあと和音は、洗面所で化粧をした。

まだ、教えてもらったばかりだというのに、自分でも感心するほどうまくできた気がした。

洗面所から戻る途中、座席の朱美が、その顔を見てオーケーサインを送ってきたところを見ても、それは

勝手な思いこみではないようだった。

和音は、自分が、化粧したりすることがけっして嫌いではないことに気がついた。

飛行機を降りて、案内されるまま進むと、そこに、三両連結のバスが待っていた。たしか「W I K I W I K I バス」というのだと、和音は、機内で読んだガイドブックの記載を思い出しながら、乗り込んだ。

まだ、こちらの時間で朝の八時だというのに、ターミナルビルへ向かって走るそのバスの窓から射し込んでくる光は、驚くほど強かった。

さつき、機内で化粧する前に、「肩や首によく塗っておくのよ」と朱美から日焼け止めクリームを渡された理由が、よくわかった。

ターミナルビルへ着き、コンベア・テーブルの前で荷物を待っているときも、入国審査のゲートでも、そ

の人の多さに驚いた。

幸い、ファーストクラスということで、荷物の運搬は航空会社の係の人がやってくれたからよかったが、入国審査の列に並ぶ間は、荷物を自分で動かさなければいけない。

数量制限の関係だろう、太い布バンドでひとつに束ねられていた三個のスーツケースがほどかれ、列に並ぼうとしていた和音の前に置かれた。

と、なにも言わないのに、秀明が、和音の後ろについて、それを押ししてくれた。

和音はそれに驚きながら、一方で、関口の動きにも気を使っていた。関口に係官とのやりとりを聞かれるとまずいと思い、別の列に並びたかったのだ。

順番が来て、和音が前に立つと、係官はまず、その荷物の多さに驚いたようだ。

「ワット・ドウ・ユー・ハブ・イン・ザ・バケツジ

ズ？」

係官の質問に、和音が「クローシズ」と答えると、係官は、和音の全身を上から下まで見て、納得したようにうなづき、あえてスーツケースを開けるとは言わなかった。

そのあと、型どおり渡航目的を聞かれ、和音が「サイトシーイング」と答えると、係官は、パスポートにスタンプを押した。



そして、そこで初めて、パスポートの記載に気づいたらしく、また、不思議そうに、和音の全身を見た。

「アー・ユー・メール？」

和音は、「堂々としている」という航空会社の男の言葉を思い出し、内心はびくびくしながらも、にっこりと笑い、「イエース」と答えた。

と、係官はあつけにとられたように「アンビリーバボー」とつぶやき、そのあと、和音の顔を見つめて――

「ユー・アー・キュート！ エキサイティング！ ベ  
リー・アトラクティブ！」

——と笑い返し、パスポートを返してくれた。

そして、「ジヤスト・ユー・シュツド・ハブ・ザ・  
ファンタスティック・ホリデイズ」と言つて、ウイン  
クした。

けつきよく、入国ゲートをいちばん遅れて出てきたのは、関口だった。

「くそ、仕事だって感づかれちゃって、荷物を開けられて『ワーキング・ビザは？』って、しつこく聞かれた」

「で、どうしたの？」

「フォトグラフ・イズ・マイ・ホビー！　なんとか、

つっぱねた」

心配そうな朱美の質問に、関口はそう答えた。

ターミナルビルを出ると、目の前に、明るい景色が広がった。

「気持ちいい」

和音は、思わずつぶやいていた。

日差しはきつかったが、乾いた爽やかな風が、キヤミソールを揺らし、裸の肩をなでて、通り過ぎていったのだ。

「朝方、スコールでもあつたみたいね」

朱美の言葉に見上げると、真っ青な空に、和音たちを歓迎するゲートのように、虹が架かっていた。

第4楽章 渚のマリオネット

「和音ちゃんに着替え用にも、やっぱり、これ借りといてよかったわね」

窓のカーテンを閉めた八人乗りバンの後部座席で、

スーツケースの中を物色しながら、朱美が言った。

「実際の話、いろんな観光スポットで、いちいち着替えるところ探すの大変だろうし。この車があれば、どこでも停めて、着替えられるもんね」

「ええ、だけど、それならさつき、空港で関口さんがレンタカー借りようって言ったとき、どうして反対したんですか？」

キャミソールとスカートを脱ぎ、新しいブラジャー

をつけながら和音がきいた。

「うん、記事の内容は、ふつうのカップルのハワイアン・ウエディングに即したものにしたいから、ふだんの移動は、なるべくバスでって考えてたの。ハワイ観光は、それが一般的だもんね」

「でも、僕たちの荷物はホテルに置いとけるとしても、関口さん、撮影機材持ってバスで動くの大変じゃないですか」



「そうなんだけどね。……本当のことというと、私が気になったのはお酒のこと」

「……お酒？」

「和音ちゃんも気がついたと思うけど、関口さんて、アル中みたいなところ、あるじゃない。飛行機の中でも、撮影の時以外、ずっと飲んでたし。あの状態で運転して、事故なんか起こされちゃたまらないなと思って」

「そうか、それを心配したんですね」

和音はそう言ってから、ブラとパンティだけの姿で、体をひねって、朱美に背中を見せた。

「ホック、ちゃんとはまっています？」

この間の成り行きがあるとは言え、朱美の前でなら、平気でこんなことができる自分が、和音自身にも不思議だった。

「うん、だいじよぶよ。服は、これでいいかな？」

朱美は、スーツケースから取り出した組み合わせを

シートの上に広げてみせた。

「シヨツピングなんだし、あんまりリキ入れるのもヘンでしょ。ちよつと、ふつうすぎる気もするけど」

「それくらいが、ちようどいいと思います」

こんな服の方が、秀明も、へんに緊張しないうすむのではないかと、和音は思ったのだ。

紺と白のボーダーTシャツに白いデニムのキュロット

トスカートといういでたちでバンを降りてきた和音を  
見て、やはり、秀明はちよつと安心したようだ。

高いヒールのサンダルを履いた形のよい脚を見たとき  
きは、ちよつとまぶしそうな目をしたものの、アラモ  
アナ・シヨツピングセンターの広大な駐車場を二人並  
んで歩いていても、キャミソールの時のように、目の  
やり場に困るといふふうではなかった。

ホテルのチェックインは午後からで、午前中は特に

なんの予定も入っていないなかつたので、まずは、このアラモアナに寄ることになったのだ。

ハワイでのタイヤアップ先のシヨップが数軒、このシヨッピングセンターに入っているので、挨拶とアイテム選びをしたいと朱美が言ったからだ。もちろん、ハワイ観光の定番のひとつになっている「アラモアナでシヨッピングする二人」というカットも、この際撮っておこうということでもあった。

間口の大きなショッピングセンターの建物に入ると、中央に幅の広い通路があり、その両側に、遙か彼方まで、ブティックなどのショップが連なっていた。いったいどこまでつづいているのか、入口からではかすんで見えないほど、奥行きがある。二階建ての建物に、デパートが五つと、二百軒近い店が入っていると、ガイドブックには書いてあったはずだ。

時間は午前九時半。まだオープンしていないショッ

プもあつて、客はそんなに多くはないが、それでも、日本からのツアー客らしい人々が、ところどころですでにシヨッピングをはじめていた。日本からの便は、早朝から午前中の早い時間にハワイに到着するので、着いたばかりの日本人が——和音たちと同じように——、まずここに来るのかも知れない。

朱美は、メモを片手に、エントランスにあつたセンター全体の見取り図を見て、タイアップ先のシヨップ

を探した。

他の三人は、自然に、その朱美に従って、ビーチウエアの専門店とムームーの専門店をまわることになった。

ビーチウエアの専門店では、水着を——すでに何着か持ってきているのに、さらに——二着と、ビーチジヤケットを二着借りた。

じつは、水着は、二着とも和音自身が選んだものだ



った。

朱美が店の人に挨拶し、交渉している間に、和音は自分から——関口が、そのつもりでカメラを構えていたこともあったが——店の中を見てまわっていたのだ。

店内に所狭しと吊された水着を見ているうちに、知らず知らず、「これを自分が着たら、どんな感じになるんだらう？」という見方をするようになっていた。

この前、一度ビキニを着ているし、東京のホテルでの試着から始まってこの二日間、女物の服をたくさん着たことで、そんな視点ができてしまったようだ。

そして、そんなふうの色とりどりの水着を見ていると、どこかわくわくしてくるものがあつた。そのうち、「これ、似合うかもしれない」とか「これ、かわいい」とか感じるものを、思わず手に取っていた。

店の人との交渉を終え、朱美が和音に近づいたとき

には、すでに和音はビキニが掛かったハンガーを二つぶらさげていた。

「これ、どう思います？」

「……えっ？」

朱美は、和音の言葉にちよつと驚いた顔をしたあと、二着の水着を見て、「うん、これなら、和音ちゃんにぴったりだわ」と言った。

そのあと、「でも、サイズとかもあるから、試着し

てみた方がいい」と朱美に言われ、和音は試着室で、そのビキニに着替えた。

試着室の全身が映る鏡の前で、着ているものをすべて脱いで水着を着けたのだが、自分自身の「全裸」姿を見ても、もうどぎまぎするようなことはなかった。

それよりも、早くこれを着けて、本当に似合うかどうか確かめたいという気持ちの方が勝ったのだ。

試着室のカーテンを開けると、突然、目の前に閃光

が走った。カメラのストロボだった。

「すごくいいよ」

カメラを目から離れた関口は、親指を立てて和音に  
そう言ったあと——

「おーい、井上君、おいでよ」

——と、店の入口あたりでずっと手持ちぶさたそう  
にしていた秀明を呼んだ。

「新婚旅行で、妻の水着を選んでやる男。そういうの

が、最近の理想像でしょ」

関口は、朱美にそう言って同意を求めてから、秀明を試着室に向かって立たせ、その後ろからカメラを構えた。

「和音ちゃん、井上君に向かってポーズをとったりしてみて。『こんなの、どう?』って感じで」

その言葉には和音も照れたが、それでも、両手の甲を腰にあて、片足を軽く後ろにひいてポーズをとり、

ちよつと首をかしげて、秀明に笑いかけてみた。

「グーツド！　そうそう、いい感じ」

関口はそう口にしながら、つづけざまにシャツターを切った。

関口には見えなかっただろうが、その時、秀明の顔は、完全にこわばっていた。

その店を出たあと、ムームーの専門店でも、二着の

ムームーを借りた。

一着は、真っ赤な地いっばいに小さな白い花があしらってある柄の、オープントップのよくあるタイプ。そして、もう一着の方は、袖や襟も付いて、ウエストも多少絞ってあるゴージャスな感じのムームーだった。なんでも、フォーマルな席で着るクラシック・ムームーというのだそうだ。黒の地に大きなハイビスカスの花が配されたそのムームーを着る機会などあるん



だろうか」と和音が思っていると、朱美が店の人に「プリーズ・ラップ・イット・シンプリー。ビコーズ・シル・ウイル・ウエア・イット・スーン」と言った。

それから一時間あまり、いくつかの店をウインドウ・ショッピングしながら、撮影もした。

「今度は『やらせ』でなく、スナップふうに撮るから、二人で自由に見て歩いてよ」

関口にそう言われ、和音は秀明と並んでモールを歩  
きなながら、その方が自然かと思い、手をつないでみた。  
手が触れた瞬間、秀明はびくりとしたが、成田の時の  
ように逃げることはなく、軽く握り返してきた。

こんな状況に、いくぶん慣れたのかもしれない。き  
つと、キャミソールやさっきの水着姿よりは、まだい  
いと思ったのだろう。

一軒のロコ・アクセサリー・ショップへ入り、和音

が「さっきの水着には、こんなのが合うのかな」と思  
つて、壁に掛かったアイボリーのブレスレットを見て  
いると、そばでカメラを構えていた関口が、「肩ぐら  
いは、組んでみようか」と言った。

その時も、秀明は、それに抵抗することなく、和音  
の肩に腕をまわしてきた。

和音は、なんだかほっとした気がして——と同時に、  
Tシャツを通して伝わってきた秀明の体温に、どこか

どぎまぎするような感じもあり――、秀明の顔を見上げた。

と、秀明も、自分のしていることに照れたのだろう。「まいったな」という表情で笑い返してきた。

その顔を見て、和音は、「これなら、もう少し、いじめてやってもだいじょうぶかな」と思った。それで、口をとがらせ、にらむような甘えるような視線を返してやった。

すると、そこで、関口のカメラから連続シャッターの音が響いた。

その店で、朱美は、いくつかのファッショニングを、和音にはめさせた。

この店とはタイアップもしてないようだし、べつに買うつもりもないようなのに、おかしいなと思ったが、和音は、その時、ちょうど隣に来て、やはりリングをはめてみていた日本人観光客らしい女の子に注意が向

き、その疑問をすぐに忘れてしまった。

その女の子が、指輪をはめてかざした手の、指先が気になったのだ。その爪には、青みがかったラメの入ったマニキュアが塗られていた。爪の長さも、たぶん、つけ爪だろう。

じつは和音自身も、例のヘア・メイクの男に短めのつけ爪をつけてもらっていたが、マニキュアの色は、出発の時の服に合わせて、薄いピンクのエナメルだっ

た。

和音は、水着を着るなら——特に、さつき選んだ水着には——その女の子のようなマニキュアが似合うと思った。

それで——そばに関口もいたし、女言葉で——朱美に言った。

「あたし、マニキュアが買いたいわ」

その言葉に、朱美も秀明も、また驚いた顔をした。

「ここでの撮影は、もういいんじゃない」

モールを歩きながら言った朱美にうなづき、関口はカメラにキャップをかぶせた。

「そろそろ昼飯の時間だしね」

すると、和音と並んで先を歩いていた秀明が、なんだかほっとしたように朱美を振り向き、きいた。

「どこで食べます？」



そのせいで、つないでいた手が放れた。

「あのね、今日のお昼は、スポンサーの観光協会が歓迎昼食会を開いてくれることになってるの。十二時半にダウンタウンのレストランまで行く約束よ」

和音は、立ち止まった秀明を気にしながらも、さっきのクラシック・ムーム―はそのためのものなんだ、と思った。

「ダウンタウンっていうと、カメハメハ大王の像とか

があるところですよね」

さらに秀明は、朱美の横に並んできいた。

「うん。っていうか、ほんとはハワイの中心なのね。

観光客にとっては、ホノルルって言えばワイキキだったり、このアラモワナだったりするわけだけど、それはじつは、外に向けた顔でね。実際にハワイで暮らす人にとっては、ダウンタウンこそがホノルルなのよ」

「だから、観光協会の事務所とかも、そっちにあるわ

けですね」

「ええ。州政府の施設とか、企業や銀行とかも、全部、ダウンタウンに集中してるわ」

「へえ。でも、そりやそうですよね。ハワイだって、アメリカの州のひとつなんだし、観光だけで成り立ってるわけじゃないんだろうから」

そんなふうには話を つづける秀明と朱美が自然に先を行く形になり、和音は、関口とともにその後ろを歩

くことになってしまった。

シヨツピングセンターを出て、車を停めた場所まで行く途中、弾んだ声で話している秀明の後ろ姿を見ながら、和音は、またなんだか腹立たしいような気分になつてきた。

たしかにあのアクセサリー屋さんでは、ちよつとい感じだったけれど、僕と手をつないで歩いていたときは、こつちが話しかけても、ろくな返事もしなかつ

たくせに……。。

そう思ったのだ。

と、それまで黙っていた関口がぽつりと言った。

「飛行機の中でも思ったけど、彼って、カメラ向けてるとき以外は、なんか妙に冷たいよね」

その言葉に、和音が沈んだ顔をしたのだろう。関口が、またあわてて言った。

「あ、ごめん。いや、そんなつもりで言ったんじゃないな

いんだ」

そう言われてはじめて、和音は、自分が感じていることの奇妙さに気がついた。

いったい僕は、秀明になにを期待しているというんだ……？

またバンの中で、先刻のムームーに着替え、その古くて格調高いレストランに入っていくと、七・八脚の

テーブルに着いていた人々がいつせいに立ち上がり、拍手で迎えてくれた。どうやら、この会のために、貸し切りになっているようだ。

それに驚いて和音たちが、入口近くに立ち止まると、やはりムーム―姿の二人の女性が近寄り、和音と秀明にレイをかけてくれた。

そこで、拍手はさらに大きくなり、秀明は――レイをかけてくれた女性に頬にキスされたこともあり――

―、照れて赤くなった。

笑顔を向けて拍手する人たちの大半は日系か白人系だった。中には、日本以外のアジア系やポリネシア系らしい人もいた。男も女も、ほとんどがビジネススーツ姿で、この会が、そんなにフォーマルなものではない、昼休みを利用したランチタイムパーティーであることがうかがい知れた。

拍手がやんだところで、和音と秀明は、ボーイに、



正面の主賓席らしいテーブルへと誘導された。朱美と関口は、別のテーブルに案内された。

「ソー・ビューティフル！ ミス・カズネ、あなた、私たちのイメージング以上に美しい。ムームーが、よく似合います」

和音たちが案内されたテーブルにいた日系の白髪の太った老人が立ち上がり、和音に向かって両手を広げるようにして言った。英語が混じりはするが、基本的

に日本語はわかるようだ。

「私、ロバート・コバヤシ。このアソシエーションの  
チエアマンです」

ミスター・コバヤシはそう言って、和音に、そして  
秀明に握手してきた。

「アイム・カズネ・タカオカ。サンキュー・フォー・  
ザ・グレート・インビテーション」

和音たちを席に着かせたあと、コバヤシは、そのま

ま椅子には座らず、他のテーブルの参加者の方を向いて、スピーチを始めた。

この場すべてを取り仕切っているようなその様子に、和音は、彼こそが、持田の言っていた「観光協会の大ボス」にちがいないと確信した。年齢は七十代だろうか。オーバーな身振りで話す、その手の甲などに刻まれた深いしわには、彼の波瀾万丈の人生を忍ばせるものがあるが、白髪とは対照的に浅黒く焼けたその

顔からは、いまだ精力的に人生を楽しんでいる様子があるかがわれた。

日常会話に不自由しないという程度の和音の英語力では、理解できない単語もあったが、コバヤシはおおよそ、次のようなことをしゃべったようだ。

「日本の景気が悪くなって以来、日本人観光客の数は減ったが、いまだに、ハワイに来る観光客のうちで最も多くを占めていることはまちがいない。日本のあら

ゆる層の人々にとって、ハワイがさらに魅力的な土地になるためには、最高のリゾートでありつづけることはもちろん、この若い二人にとってそうであるように、人生の節々での忘れられない思い出の地となりうるような、付加価値を持った場所になっていかなければならない。ハワイがそんな場所であることを証明するためにも、この二人には、ぜひ幸せなカップルになってもらいたいと、心より願っている」

ミスター・コバヤシのスピーチが終わると同時に、食事が運ばれてきた。これも、ランチタイム・パーティーらしく、クラブ・サンドとかが中心の、けっして大仰なものではなかった。

ミスター・コバヤシは、食事の間、ずっと上機嫌で、英語と日本語をチャンポンにして、和音と秀明に話しかけてきた。

二人とも学生だそうだが、なにを専攻しているのか

ときかれ、和音が、合衆国の外交史を中心に学んでい  
ると答えると、コバヤシは「移民の歴史もぜひ勉強し  
てほしい」と言った。

次に秀明が答えた「化学工学科」というのが、コバ  
ヤシにはすぐにわからなかつたようで、和音が「ケミ  
ストリー」とつけ足すと、コバヤシはまた、「二十世  
紀のケミストリーは、海を汚しつづけてきたが、これ  
からは、美しい海を取り戻すようなケミストリーであ

ってほしいものだ」というようなことを言った。

なんについても、一言あるじいさんであることはたしかだった。

「カズネとヒデアキは、どこで知り合って、愛し合うようになりましたか？」

コバヤシに突然そうきかれて、和音は答えに窮してしまった。もちろん、秀明と愛し合ってなんかいない。

と、秀明がそれに答えた。



「僕たち、すぐ近くの家で生まれて、子供の頃からいっしょに育ったんです」

すると、コバヤシは、オーバーに「オー、幼なじみネ」と答え、つづけた。

「私と死んだ奥さんも、幼なじみ。大きなシュガーケーン・プランテーションで、いっしょに育ちました」

コバヤシの家は、戦前、サトウキビ農園の小作をしていた移民だったのだらうと、和音は思った。すると、

秀明がきいた。

「子供の頃からずっと、奥さんのことが好きだったんですか？」

「イエース。テイーネージャーの頃にもう、一生愛しつづけると、約束してました」

と、そう答えてから、コバヤシは、「でも、一度だけ……」とつぶやき、遠い目をした。

「戦争の時、ネイビーに入って、私、ずっとヨーロツ

パで戦いました。戦争終わって、すぐハワイに帰れるかと思ったら、そのまま、日本に行けと言われた。それで、日本で、一年と少し、任務に就きました。その時、一度だけ、彼女を裏切りました」

コバヤシは、そう言つて、和音の顔を見た。なにか、思いのこもつたまなざしが、そこにはあつた。

和音は、前に持田が言っていたことを思い出した。

コバヤシは、日本に進駐している時、日本人の女性と

恋仲になつたらしい。コバヤシが、当選者として和音を強く押したのは、和音の写真が、その女性に似ていたからだということだった。今、コバヤシは、和音に重ねて、その女性のことを思いだしているにちがいはなかった。

「その結果、私、二人の女の人、傷つけることになつてしまいました。いろいろ悩んだけど、けっきょく私は、一人でハワイに帰った。ハワイで待っている彼

女との約束、どうしても破ることできなかつた」

コバヤシはそこまで言つて、突然英語で、「デイデ  
ユー・プロミス・イン・ヤンガー・デイズ・トウ  
ー？」ときいた。

和音がまた答えに困っていると、すかさず秀明が、  
「イエス、ウイ・デイド」と答えた。

えっ？　僕たちがいったい、いつなにを約束したと  
いうんだ？　こいつ、ここまで来ても、調子いいのは

変わらないな。

和音があきれた顔で秀明を見ると、コバヤシは、「イエース、ソー・ハッピー」と満足そうな声をあげ、また、立ち上がった。

「レディス・ン・ジェントルメン」

参加者に向かって、ふたたびスピーチをはじめたミスター・コバヤシは、今度は次のようなことを言った。

「神に祝福された約束で結ばれたこの若い二人に、私

は、ハワイ州の観光産業を代表して、ささやかなプレゼントを贈りたい」

そして、胸ポケットから、一枚の紙切れを取り出すと、それをかざして、参加者たちに見せた。どうやら、一万ドルの額面が記載された小切手のようだった。

そのあと、コバヤシは、和音と秀明に立つように促し、「コングラッチュレーション！」と言って、秀明にそれを渡した。

いつの間にか和音たちのテーブルの前に来て構えていた関口のカメラのストロボが光り、参加者たち全員が、また立ち上がって拍手した。

その拍手の音の中、ミスター・コバヤシは、笑顔のままでも秀明をにらみつけるようなまなざしをも込めて、ささやいた。

「イフ・ユー・メイク・ハー・アンハッピー……アイ  
・キル・ユー」



コバヤシは、かつて自分の果たせなかつた「もうひとつの約束」を、秀明に果たさせようとしているのかもしれない。

「ワア—オ、ジス・イズ・ワイキキ！　ジス・イズ・ザ・パラダイス！」

バンがホテルの敷地に入る寸前、ビーチが見えた。たんに、秀明が叫んだ。

すっかりいつもの調子を取り戻している上に、さっきのパーティー以来、英語づいてしまっている。おまけに、ジーンズの尻ポケットにつつこんだ財布には、一万ドルの小切手が入っているのだ。たしかに、秀明にとっては「パラダイス」だろう。

バンがポーチに着くと、数人のボーイが寄ってきて、そばに並んだ。

荷物と車をボーイたちに任せ、和音たちは、そのまま

ま中に入った。

ワイキキでも、最も伝統あるホテルらしく、旧館につくられたロビーは、リゾートホテルというより、ヨーロッパの宮殿のようなつくりだった。ただ、ところどころに置かれた、ヤシ科の植物や明るい原色の花が、「南洋の楽園」を演出し、十九世紀の植民地時代のよ  
うな不思議な雰囲気を醸し出している。

チェックインをすませると、一行は、すぐ部屋に向

かった。荷物が多かったこともあるし、部屋が三つに別れることもあるのだらう。三人のボーイがつき、そのうちの一人は、和音と秀明の荷物を載せた台車を押していた。

「ちよっと休憩して、四時にロビーに集合ね。二人は下に水着を着て来て。ビーチで撮影するから」

旧館とはちがい、近代的な高層ビルである新館のエレベーターの中で、朱美がそう言った。そして、和音

に向かつてこうつけ加えた。

「和音ちゃん、飛行機の中でもあんまり眠ってないでしよ。少しでも寝といた方がいいわよ。じゃ、また、あとでね」

朱美と関口、それに、それぞれについたボーイは二十一階で降りて行った。和音と秀明の部屋は、それよりさらに十階ほど上の最上階ということだった。

ドアを開けてくれたボーイに促され、部屋の中に入ると、案の定、そこは、とんでもなく広い空間だった。

ドアの位置から六・七メートルはあるかと思われる正面側は、全面がガラス張りの窓になっていて、そこから、さらに向こうにつづくバルコニーに出られる。そして、その向こうには、ゆるやかにカーブを描くワイキキビーチとダイヤモンドヘッドが見えた。広いバルコニーには、前に秀明が言っていたとおり、楕円形の

プライベート・プールがついている。

部屋に目を戻し、室内を見ると、その横幅も十メートル以上はあるようだった。

今、和音が立っている部屋の右側の部分には、十人以上もかけられそうなソファセットが置かれていて、右手の壁には、ステレオや各種プレイヤーも組み込まれた大型のテレビセットが据えられている。

反対側、左手奥の壁までのスペースには、高級そう

なテーブルが置かれ、窓と反対側のコーナーには、スタンダードバーがつくられている。ここで朝食くらいはつくれそうだし、テーブルの上の天井には、シャンデリアが吊されているから、テーブルをかたづければ、ちよつとしたパーティスペースにもなるのだらう。

これだけでも、二人で使うにはあまりにも広すぎる感じがしたが、しかし、部屋はこれだけではないようだ。この部屋は、つくりから見てリビングルームだ。



だいいち、ベッドも見あたらない。当然、ベッドルームが別にあるはずだった。

スタンダーのすぐ横の壁にドアがあり、最初、和音は、そこがベッドルームかと思った。しかし、壁の窓際の側にも、もうひとつ、もっと大きな木製のドアがついていた。見ていると、ボーイはそちらのドアの向こうに、スーツケースなどを運び込んだ。どうやら、ベッドルームはこちらにちがいない。とすると、あの

ドアは、バスルームだろうか。

荷物を運び終え、秀明からチップを受け取ると、ボーイが出ていった。

と、秀明は、すぐにバルコニーへ出て、手すりのところまで行き、景色を眺めはじめた。

「おい、来てみるよ」

秀明に呼ばれ、和音も外に出ると、着ているムームーがはためいた。日差しは強いが、思ったより風があ

るようだ。

和音は額に手をかざすようにして、秀明と並んだ。

コバルトブルーの空、エメラルドグリーン  
の海、白い砂浜、そしてダイヤモンドヘッド。写真やテレビで何度も見たことのある景色だが、それが、実際に目の前にあると思うと不思議な気がした。しかも今、自分たちは、その景色を楽しむには最高の位置から見ているのである。ビーチで遊ぶ人たちが豆粒のように見え

ることからも、この部屋のいろいろな意味での「高さ」がわかる。

「すげえよな。ついに来ちゃったよ」

秀明は感嘆の声をあげ、しばらく景色を見ていた。

バルコニーに目をやると、プールの脇にはデツキチエアが二つ並び、小さなテーブルがついたパラソルも置かれていた。スタンドバーでカクテルをつくり、ここで楽しむようなこともできるわけだ。

そう思っていると、秀明が、「それにしても」とつぶやき、部屋の方を振り返った。

「この部屋も、信じられないよな。きつといつもは、ビル・ゲーツとか、どっかの国の王様とかが使ってるんだぜ」

秀明は、そう言いながら、ふたたび部屋の中に戻る  
と、今度は、スタンドバーに近づき、そのカウンター  
の中に入りこんだ。

「なんか、飲むか？」

カウンターの向こうに立った秀明は、あとを追って入ってきた和音に、そうきいた。

「うん、コーラかなんか」

和音が答えると、秀明は不服そうな顔をし、「せつかくなんだから、そんなこと言うなよ」と言って、シェーカーを手に取った。

「カクテルなんて、できるのか？」

「いや、できないけど」

「コーラでいいよ」

けつきよく、秀明は、カウンターのの中の冷蔵庫からアップルタイザーを二瓶取り出してきて、一瓶を和音に渡した。二人でそれをラツパ飲みしながら、とりあえずテーブルに腰掛け、同時にため息をついた。いろいろなことがあって、すでになんだか疲れてしまった感じもあったし、この部屋のすごさに対するあらため

ての感嘆でもあった。

「荷物、整理しなきゃ」

アップルタイザーをもう一口飲んだところで、和音は言った。

スーツケースの中に押し込んである衣類を、出して  
おいた方がいいと思ったのだ。

「ああ、そうだな」

秀明には、べつに整理しなければならぬほどの荷



物もないはずだが、自分も、ベッドルームを見たいと思ったのだろう。瓶を持ったまま、和音といっしよに立ち上がった。

そして、二人そろって、ベッドルームのドアを開けた。

「……あ」

そこで、二人とも、短く声をあげ、固まった。

ベッドルームも、やはり広く、また装飾など、リビ

ングルームに負けなほどりツチなものだった。

しかし、そこには、中央に、大きなダブルベッドがひとつ置いてあるだけなのだ。

ここは、このホテルいちばんのスイートルーム。通常は、ツインでの利用が多いはずだ。だが、和音たちの場合、「ハネムーン」であることが事前にホテルに知らされていた。それで、ホテルの側が気をつかって、こうしたにちがいがいなかった。それにしても……。

きれいにベッドメイクされた絹のベッドカバーと、そして、寄り添うように置かれた二つの枕をながめ、和音と秀明は、しばらく言葉を失っていた。

しかしやがて、そんなふう押し黙って見つめている方が、かえってどんどん不自然な雰囲気陥って行くことに気づいた和音は、あわてて言葉を探した。

「でも……、まあ、これくらい大きけりや、二人で寝ても落ちたりしないよ、きつと」

「……あ、ああ」

秀明はそう返事したが、まだ、困惑気味に突っ立っている。

それで和音は、できるだけ自然に振る舞おうと、荷物の整理をすることにし、スーツケースが置かれたクローゼットの前まで行った。

ブラインド状に組み込まれた木製の戸が、アコーディオン式に開くクローゼットは、一面の壁のほぼ全面を使

い、じゅうぶんな広さがあつた。お金持ちが長期滞在するような場合にも、対応できるようなつくられてい  
るのだらう。

三つのスーツケースを順番に開けて、和音は、衣類  
をそこに吊していった。

秀明は、しばらく、突っ立ったままそれを見ていた  
が、「ま、俺のはいいや」と言つて、自分のシヨルダ  
ーバッグを、クローゼットのすみに投げ入れ、リビン

グへ出て行ってしまった。

クローゼットの中には、シューズボックスやチェストも造りつけられていた。それで和音は、サンダルや下着類も、きちんとそこに整理して仕舞った。

チェストの引き出しに、まだ真新しい下着を並べている時、和音は、不意に、シャワーを浴びたいと思つた。考えてみれば、東京のホテルで昨日の朝——日付としては今日だが——、シャワーを使って以来、体を

流していなかった。時差の分を差し引いても、丸一日以上たっている。

そう考えて、部屋の中を眺めると、クローゼットの横に通路のような場所があり、その奥にドアがついていた。

開けてみると、そこがバスルームだった。

目の前に、洗面台と便座のスペースがあり、右奥に磨りガラスが入ったついたてのような仕切があった。

どうやら、その向こうにバスタブがあるようだ。ちよ  
うどクローゼットの裏側全体が広いバスルームになっ  
ているわけだ。

見ると、今入ってきたドアとは九十度の位置の壁に、  
もうひとつドアがついていた。おそらくこれが、さつ  
きリビングルームで見たドアだろう。つまり、ベッド  
ルームからも、リビングからも、トイレに行けるよう  
にしているのだ。



いったん、ベッドルームにとって返した和音は、替えの下着を持って、ふたたびバスルームに入った。

バスタブのある方に入っていくと、そこは、よくあるホテルの洋式バスというより、日本の旅館の浴場に近い感じの造りだった。大理石張りの床が、高くなつた部分があり、そこに大きな楕円形のバスタブが埋め込まれている。もちろん、バスタブの外に洗い場があるわけではないが、どうやらジャグジーの設備がつい

ているために、こういう構造になっているらしい。

そこで着ていたムームーを脱ぎ、下着を取った和音は、ちよつと考え込んだ。胸と下腹部につけている例のフォームをどうしようか迷ったのだ。

もちろん、フォームをとってシャワーを浴びた方が気持ちがいいにはちがない。しかし、四時から撮影をするというのだから、二時間もたたないうちにまたつけなければならぬ。

それが面倒だと思った和音は、そのままシャワーを浴びることにした。矢代は、水にも強いと言っていたし、丸一日や二日の連続装用は問題ないとも言っていた。今夜寝る前には、また風呂に入ることになるのだ。その時とればいい。今は、とりあえず、さつと体を流せればいいのだ。

その大きなバスタブの中に立った和音は、壁のシャワーのコックをひねった。すこし冷ためのお湯が、頭

の上から降り注いだ。首筋をつたったお湯は、肩から前にまわり、胸の谷間を通って流れ落ちていた。矢代の言っていたとおり、乳房に当たったお湯は、その表面にはじかれ、踊るようにこぼれ落ちていく。

和音は、シャンプーをとって髪を洗い、それから、ボデイソープで体も軽く洗った。石鹸の泡をつけた手で、乳房を洗っているときは、さすがに自分の肌を洗っている気はしなかったが、脇の下やウエストなど実

際の肌からなめらかに連なり、しかもすへすべと柔らかかなその手触りは心地よく、思ったより違和感を感じなかつた。

髪と体を流し、リンスをしたあと、ホテルそなえつけの毛足の長いバスタオルで体を拭くと、なんだか生き返った気がした。

持ってきた新しいパンティとブラをつけた和音は、バスルームを出ようとし、そこでちよつと立ち止まっ

た。洗面台の鏡の前で、ブラの位置をなおしたのだ。

と、その時だった。

リビング側のドアが突然開いて、秀明が入ってきたのだ。

「あっ！」

秀明は、一瞬驚いた顔をし、そして――

「ご、ごめん」

――と、あわてて出ていった。

気がつくのと、和音自身も両腕を胸の前で交差させ、ブラを隠すような仕草をしていた。

「和音ちゃん、けつきよく寝てないでしょ」

和音と秀明がロビーまで降りてくると、先に待っていた朱美が言った。

「えっ、どうしてわかるんですか？」

「だって、マニキュア、かわってるもの。それに、メ

イクも、しつかりやってるし」

「ばれちやいました？」

たしかに、シャワーを浴びたあと、和音は、今朝アラモアナで買ったマニキュアに塗りかえ、そのあと、時間をかけてメイクしたのだ。

「でも、撮影するなら、ちゃんといた方がいいと思っ  
て」

「そりゃ、そう考えてくれるのは、私としてはありが



たいけど、和音ちゃん、こういうこと、じつはけっこう好きなんだなって、ちよつと驚いてるの。私たちの前でも、目に見えて女の子っぽくなっていくな

「そ、そうですか？」

先刻のバスルームでのことといい、自分自身でも多少それを感じているので、和音は、とぼけるほかなかった。

そんな会話をしているところへ、撮影機材を持った

関口が遅れてやってきた。

関口が近づくと、また、酒の臭いがした。きつと、部屋で飲んでいたにちがいない。

「私、井上君とちよつと打ち合わせがあるから、二人で先に行つててくれる？」

「打ち合わせ？」

和音が聞き返すと、朱美は、「ええ、式の日のこととか、先に決めておかなきゃいけないことがあるから」

と言った。

そんな話をなんで二人でするのかと思ったが、関口が「じゃ、先に、彼女のカットだけでも撮っておくから」と歩き出したので、和音も、そのあとを追った。

もうそろそろ夕刻にさしかかる時刻だが、ワイキキビーチには、まだたくさんの人がいた。見るところ、そのうちの六・七割は、日本人のようだ。

「この時間だと、ダイヤモンドヘッドをバックにするのが、いちばん光の加減がいいな」

関口は、そう言っつて、ホテルからさほど遠くない波打ち際にポジションを定めた。

三脚を立て、折り畳み式のレフ板を広げ、それをスタンドにセットして……と、これまででいちばん大がかりな準備をしている。カメラも、これまでの三十五ミリではなく、もう少し大きいものを使うようだ。

関口がそれらをセットし、そのあと、露出計を持つてあちこち測定している間、和音は、朱美と秀明がこの場所を見つけられるかどうか、心配していた。

ガイドブックによれば、たしか、ビーチの全長は二キロくらいあるはずだし、人だつて多いのだ。いくらホテルの近くだと言っても、一度見逃して通り過ぎてしまつたら、探すのは並大抵のことではないだろう。そんなことを考えていると、レフ板の位置をなおし

ていた関口が言った。

「荻原女史、井上君のこと、気に入ってるみたいだね」  
「えっ？」

「結婚情報誌の編集やってるくせに、ずっと独身を通してるバリバリのキャリアウーマンだけど、どうやら、その原因は、面食いだってことかな？」

「はあ：：でも、それと、秀明と、どう関係するんですか？」

「だって、井上君、かつこいいじゃない。和音ちゃん  
と並んで絵になるような男なんて、そんなにはいない  
よ。まあ、ちよつと表情硬いのが難点だけど」

そんな関口の言葉もあつて、なかなかやってこない  
朱美と秀明に、「あの二人は、いったいなにをしてい  
るんだろう？」と考えていると、関口が「じゃ、始め  
ようか」と言った。

「それ、脱いで」

「……え、……ええ」

水着の上に着たヨットパーカーふうのジャケットに手をかけたところで、和音は、ちよつと逡巡した。

こんなに明るくて人の多い場所で水着姿になるのは、やはり恥ずかしかつたのだ。しかも、先刻から、まわりにいる人たちが、撮影の準備を「何事だろう？」と見ている。

「どうしたの？」



「ちよつと……恥ずかしい」

「なに言ってるの。だいじょうぶだつて。ここはワイ  
キキなんだよ。まわりを見てごらんよ。みんな水着ば  
つかりなんだし。それに、さつきも言ったように、和  
音ちゃんは、顔もスタイルも抜群なんだからさ」

これがプロカメラマンの「口説き」というやつだろ  
う。そうは思ったが、悪い気はしない。

「ええ」

いずれにしても、「本当の事情」を知らない関口に  
対して、これ以上あれこれ言うのもへんだと考えた和  
音は、思い切ってジャケットを脱いだ。

「オーケー。じゃ、そこへ立って。まず、ボラ切って  
みるからね」

「ボラ？」

「ポラロイド」

関口はそう言って、カメラの後部をはずし、カメラ

バッグから同じような形をしたパーツを取り出して装着した。こちらには、横から紙製のベロが出ている。

これがポラロイドのフィルムなのだろう。

「とりあえず、カメラ目線で。：：：そうそう。ちよつと片足を後ろに引いてみようか。：：：いいね。もう少しあごを引いて、首をかしげる感じかな。：：：そう、その感じ。いいよ。すごくかわいい」

関口は、そんなことを言いながら、シャツターを押

して、片手でフィルムを引き出した。

和音が見ていると、そのフィルムを持って軽く振りたりしていた関口は、やがて表面の紙を剥がした。

「ほら、見てごらん。すごくいいだろ」

関口から手渡されたそのポラロイド写真を見て、和音はちよつと驚いた。

この間、鏡の中では、何度も自分の女装姿を見ている。そして、それが、そんなにおかしくはなかつたか

ら——もつと正確に言えば、それなりに魅力的だと思えたから——、こんなことをする気にもなった。でも、どこかで、それは自分の思いこみなのではないのかという気がかりが、いつもあったのだ。いわば「生身の部分」で感じている動揺や興奮のせい、自分のことが客観的に見られなくなっているだけなのではないかという気がしていた。

でも、こうして、自分の「生身」とは直接に連動し

ていない「切り取られた絵の中の女の子」を客観的に見て、和音は、自分の感じていたことが、けっしてひとりよがりではないという気がした。

写真の中の女の子は、ベールピンクの花柄のビキニで、魅力的に立っていた。それは、女性としておかしくないというばかりか、今、このワイキキ・ビーチで、色とりどりの水着で自分をアピールしているどの女の子よりも、キュートでチャーミングな存在に見えた。

関口の撮影技術のおかげもあるのかも。だが、それにしても、関口の目からは、今の自分がこう見えているのだ、と、和音は感じた。

「よし、じゃあ、本番いってみようか」

その関口の言葉に、和音は、さらに魅力的な笑顔を つくった。

「……うーん、いいよ、和音ちゃん。……きれいだ。

……お、今の表情、すごくかわいいな。……そう、そ

んなふうにして膝を曲げて前屈みになって。すっごいキュート……」

関口は、そんなふう言いながらシャツターを切り、和音は、その言葉にあおられるようにして、さまざまや表情やポーズをつくった。

いつの間にか、「ゲイでアル中」というような関口に対する悪いイメージは和音の認識の中から消えてしまい、その浅黒いひげ面が、頼りがいある人に思えて



きた。

何本目かのフィルムを撮り終え、関口がフィルムチ  
エンジしている間、和音が一息入れていると、四人の  
水着の女の子が、こちらに走ってくるのに気がついた。  
その女の子たちは、和音から、三十メートルくらい離  
れた位置で立ち止まり、こちらを見てかん高い声で話  
していた。本人たちは、それだけ離れていれば聞こえ  
ないつもりだったのかもしれないが、その声は、風に

乗って和音の耳にしっかり届いていた。

「ほら、ね、やっぱりあの子でしょ」

「ほんとだあ。顔かawaiiだけじゃなくて、スタイルもいいんだ」

「細いのに、胸大つきいしね」

成田で会った女の子たちだった。

「そうか、あの子たちもハワイ便だったんだ」と思  
いながら、和音はそれが聞こえなかったようなふりを

して、髪をかき上げた。

フィルムを入れ替えると、関口はカメラを三脚からはずし、「ちよつと、その砂浜に寝そべってみようか」と言った。

和音が、言われるまま、砂浜の上に身を横たえようと、関口は、手持ちカメラで寄り、シャツターを押し始めた。

「……肘をついて、体を起こして。うん、胸のところ

がちよつと見えるくらいに。……そう。いい感じ。体を少しひねってみようか。……カメラを見つめて。たとえば、彼氏に甘えるみたいに……そうそう。かわいいよ」

和音は、まるで、カメラという道具で、関口に操られているようだった。

と——

「関口さん、そこまでやらなくてもいいですよ」

突然の朱美の声に、和音は我にかえった。

「……えっ？」

関口も、カメラを持ったまま、ぽかんとした顔で声の方を振り返った。

「べつに水着モデルのグラビアってわけじゃないんですから」

いつの間に近づいたのか、朱美は、関口と和音のようすを見て苦笑していた。

「……あ、そうだよね。被写体がいいから、ついのことちやつて」

関口も、そこではじめて自分のやっていたことに気づいたように頭をかいた。

「とりあえず、うまくは、いつてるみたいですね」

「うん、かわいいカット、いっぱい撮れたよ」

「じゃ、二人のカット、いつてもいいですよね」

朱美はそう言って、後ろに立っている秀明の方を振

り返った。

秀明は、まぶしそうな顔で和音を見ていたが、目が合うと、また、視線をそらせた。

そのあと、二人で、ワイキキの浜に座っているカットを撮った。

秀明が砂の上に寝ころんで、その横に座った和音と顔を見合わせているという設定では、水着姿の和音の体をすぐ近くから見上げることになった秀明が、さら

にまぶしそうな顔をした。秀明は、水平線に近づいた太陽のせいにして、ごまかそうとされていたが。

「海の中で遊んでるところも撮っておきましたよ」という朱美の提案で、和音と秀明は、今度は海に入った。

秀明は、頭を冷やすとでもいうようにすぐさま水に潜り、いったん少し沖まで泳いで行って、戻ってきた。

和音も泳ぎかけたのだが、いきなりやってきた大きな波に「胸」を持ち上げられ、それに驚いて、すぐ立



ってしまった。「胸」の分だけ浮力を余分に受け、バランスがとれなかったこともあるし、水着がずれたのではないかと、心配になったこともあった。

三十五ミリに持ち替えた関口は、自分も膝のあたりまで海水に浸かり、そんな和音と秀明を狙った。

「そうだな、水でも掛け合ってみてよ」

関口に言われ、和音は、両手で水をすくい、秀明に向かって思い切り飛ばしてみた。

もろに水をかぶった秀明は、ちよつとむつとした表情をして、すぐに仕返ししてきた。

和音もそれにやり返し、いつしか、撮影のことも忘れて、お互い、子供のようになつて水を掛け合っていた。

そんなことをしながら、和音は、「昔も、二人でこんなふうにして遊んだことがあるよな」と思った。

たぶん、小学校のプールの時間かなにかだろう。あ

の頃は、どちらかといえ、和音の方が一方的にやられていた感じだったが、今日はそうでもない。もしかすると、「女の子」である和音に対して、秀明は、どこか遠慮が出るのかも知れない。

水の掛け合いは、だんだん接近戦になっていって、和音は、沖の側にまわり込むようにして秀明に近づいた。

と、その時だった。

ふたたび、大きな波がやってきて、和音の背後から襲いかかった。

そのせいで、和音は前につんのめるような形になった。

一瞬、目の前が水で覆われ、あわてた和音は、体勢を立て直そうとして逆に脚を滑らせて、水中に身を投げ出した。

べつに深いわけではないのだが、水をしたたか飲んで

でしまったこともあり、あせればあせるほど、足が海底をとらえられない。

と、水中でもがく和音の目の前に腕が差し出され、和音の二の腕をつかんだ。

強い力で持ち上げてくるその腕にすがりつくようにして体を起こし、和音はやっと、底に足をつけることができた。

脇の下に掛かった手に、さらに抱き起こされるよう

にして水面に出た和音が、せき込みながら見上げると、そこに秀明の顔があつた。

気づくと、和音は、秀明に抱かれるような形で立っていた。秀明の腕は、和音の両脇にまわり、和音の手は、秀明の二の腕あたりにかかつていた。

ビキニのふくらみの先が、秀明の肋骨にあたり、すこし押しつぶされていた。

「もう、馬鹿だなあ」

秀明は、和音の顔を見返して言ったが、その言葉に、和音は馬鹿にされたような感じはしなかった。

裸の肌から、秀明の体温が伝わってきたからだ。

「グーツド！」

カメラをこちらに向けた関口が叫んだ。

そのあと、ビーチを離れ、「インターナショナル・マーケット・プレイスでショットピングする二人」とか

「夕暮れのカラカウワ通りを歩く二人」とかいった写真を撮った。

それから、ホテルの部屋に帰って着替え、夜は、ホテルのダイナーショーを見ることになった。

ふたたびメイクし直し、真っ赤なミニのシャツドレスを着て旧館のロビーで落ち合おうと、朱美は、「ちようどよかったわ、さつき、ホテルのジュエリーショップで買ったの」と言っ、赤いジェムストーンのイヤ



リングをつけてくれた。

ショーが始まる前、食事している時に、「やっと細かい日程が決まったから」と、朱美から、今後のスケジュールが発表された。

「明日は、ポリネシア文化センターへ行って、三日目は、ハワイ・カイから東海岸をまわるつもり。四日目は、かんじんのウエディングの日で、五日目は、一応予備日ってことで、撮り残した写真を撮る予定」

今日、朱美と秀明が打ち合わせたというのは、この日程のことなのだろうか、などと思いながら和音が聞いていると、関口が口を挟んだ。

「でも、式が四日目ってのは、なんだか変なもんだよね。式より先に新婚旅行やっちゃうみたいで」

「ええ、海外での挙式は、どうしてもそうなるのよね。衣裳のこととか、段取りの打ち合わせとか、現地で、式の前に準備がいるでしょ。じつは、明日も、朝から

和音ちゃんとのウエディングドレスの衣裳合わせがあるの。だから、ポリネシア文化センターへ行くのは、午後からってことになると思うわ」

朱美は、そう答えてから、和音の方を見てにっこりと笑った。

ダイナーのコースが終わり、デザートが出ると、ショーが始まった。

ショーは、ひとことで言えば、「有名エンターテイ

ナーのそっくりさんショー」というようなものだった。といつても、そんな安っぽいものではなくて、ラスベガスふうの豪華なレビューの構成で、出てくるそっくりさんたちも、ただ似ているというだけではなく、歌もダンスもトークもうまかった。中には古すぎて「本物」を知らず、似ているのかどうかよくわからないものもあったし、英語の発音の細かいニュアンスを真似ているような部分は、どうしてもわかりきれなかった

が、それでも、エルビスやモンロー、マイケル・ジャクソンやマドンナといったわかりやすいネタがほとんどで、本物より本物らしいその見かけとテクニックを、じゅうぶんに堪能できた。

見ているうち、和音は、その出演者たちと自分は、「ふりをする」という意味では同じだな、と感じた。たとえば物まねだとしても、中途半端なものではなく、ここまでやれば、それはひとつの立派な芸だ。自分も、

ここまで来てしまった以上、どうせなら、中途半端ではなく、「本物より本物らしい女の子」になりきってやろうと思った。

部屋に戻り、服を脱ぎ、ほぼ一日半ぶりにフォームもとって風呂に入った。シャワーを浴びたり、海にも入ったというのに、矢代が言っていたように、フォームそのものも、そして下の肌も、痛んでいる様子はな

かった。むしろ、フォームをつけている以外の部分が——日焼けどめを塗っていたにもかかわらず——、赤くなっていた。肩や背中には、ぼんやりとだが、水着のストラップのあとに残っていた。やはり、南太平洋の紫外線は、馬鹿にできないのだろう。

ホテルのバスローブを着てベッドルームの化粧台の前に座った和音は、朱美に教えられたとおり、アロエの化粧水とクリームを、顔や首筋、それに肩や腕にも

塗った。

するとそこへ、自分も入浴を終えたらしい秀明が入ってきた。肩にクリームを塗っているところだった和音は、あわてて、——「胸」をとっているのだから、もう、その必要もないのに——バスローブの前を合わせていた。

「なあ、和音、俺、やっぱり向こうのソファで寝るよ」  
秀明は、所在なげに突っ立ったまま、そう言った。



その言葉に、和音は、どう答えたものか迷ったが、「いいから、いっしょに寝ようよ」などと言うのも、なにか変な気がして、「うん」とうなづいた。

部屋には冷房が効いていたので、和音は、そのバスローブのまままでベッドに入った。そんな撮影をする予定はなかったのので、パジャマとか——あるいはネグリジェとか——は、荷物の中に入っていないのだ。

大きなベッドの真ん中にぽつんと寝て、和音は、な

んだか胸のあたりに妙なさみしさを感じた。ずっとあのフォームをつけていたことで、そこに「重さ」がある感覚が、ふつうになってしまったのかも知れなかった。

明日、起きたらすぐに、またあれをつけよう。だって、明日は、ウエディングドレスを……。

睡眠不足のせいだろう。目をつむるやいなや睡魔に襲われた和音は、眠りに落ちる寸前、そんなことを考

*Hawaiian Harmonic Honeymoon*

え  
て  
い  
た。  
。

第5楽章 プリンセスラインの神話

「あら、和音さん、あなたもこのホテルでらしたのね」  
朱美といっしょに、ホテルのレストランで朝食をと  
り、ロビーに出てきたところで、呼び止められた。

「あつ、あの時の……えつと……」

「あら、ごめんなさい。私の方は、まだ名前もお教えしてなかったわね。小野田といいます」

飛行機の中で知り合った老婦人だった。

「その節は、どうもお騒がせして、申しわけありませんでした」

朱美がすぐにそう応じた。機内での撮影のことを言っているのだ。

「いいえ、ちつとも」

「ゴルフへお出かけになるんですか？」

ちよつと離れた位置で、二人分のゴルフバッグを持つて立っている夫に気づき、朱美がきいた。

「ええ、来て次の日から、いきなり。もう年なんだから、少しはゆつくりすればいいのにね」

夫の方をちらりと見て、小野田夫人はあきれた顔をしてみせた。でも、本人も、けっしていやがっている

ふうではない。

「そういえば、和音さん、お式はいつなの？」

そうきかれて、和音は照れたように答えた。

「あさってです」

もちろん、和音が照れた理由は、小野田夫人が想像しているのとはちがうのだが、小野田夫人の目には、それが、若妻の初々しさに映ったようだ。

「そう。きつとすてきでしょうね、和音さんの花嫁姿。

ドレスは、もうお決めになったの？」

「いえ、これから衣裳合わせなんです」

「そうなの。楽しみね。思い切りエレガントなのを選んでくださいね。和音さんなら、きつと似合うから。」

私の時なんて、戦後のどさくさで、ろくなお式も……」

するとそこで、聞いていないような顔をしていた夫が、いきなり咳払いした。

間髪入れず、小野田夫人は、話を変え――



「あ、車待たせてあるから、もう行かなくちや。それじゃ、また、お会いしましょう」

——と、夫に寄り添い、出口へと向かった。

切り上げ時だと思った夫が、それとなく妻に悟らせ、妻も、言葉を交わすことなくその意図を汲む。その絶妙のタイミングに、和音も朱美も、ちよつと呆氣にとられたように二人を見送った。長年連れ添った夫婦の「あうんの呼吸」というやつだろう。

そのブライダルブティックは、ホテルのモールの中にあつた。

ショーウィンドウに飾られた二着のウエディングドレスを横目で見ながら、朱美について店内に入ると、「いらつしやいませ、お待ちしてました」と日本語で迎えられた。

出てきたのは、三十代後半らしいこざっぱりしたス

ーツを着た女性だ。この店は、ハワイで挙式する日本人のために、日本人マネージャーを雇っているのだから。

「ご無沙汰してます」

朱美が、その女性に言った。どうやら旧知の間柄らしい。

「こちらこそ。三年ぶり……かしらね？」

「ええ、前に取材させていただいたのは、創刊号の時

だから、そうなりますね」

「あの時は、ありがとうございます。あんなにいてねいに紹介してくださって。あの記事が出てから、お客様が倍増したのよ」

「いえ、服部さんがいてねいに対応してくださったおかげです。それで、今回も、甘えさせていただきまし  
た」

と、そこまで言ったところで、朱美は、和音を紹介

した。

「こちらが、高岡和音ちゃん。かわいいでしょ」

「よろしくおねがいます」

ちよつと緊張しながら和音が頭を下げると、服部と呼ばれたその女性は、胸の前で手のひらを合わせるよ  
うな仕草をしながら言った。

「ほんとにかわいらしい方。こんな方のお相手ができるなんて、私もやりがいがあるわ。じゃ、さっそく、

サイズを測りましょうね」

と服部は、ポケットからメジャーを出し、「こちらへ」と和音たちを導いた。

表から見た店舗は、ブライダルアクセサリーが飾つてあるショーケースがあるくらいで、そんなに広くはないが、カーテンの引かれた通用口から店の奥へ入ると、そこは、表の五・六倍はある空間だった。店の裏と言つても、バックヤードという感じではなく、壁や

床などの内装は、表の店と同じようにきれいに整えられている。

部屋の奥側には、半分以上のスペースを占めて、何百着というウエディングドレスが掛かったハンガースタンドが並び、その手前のテーブルで、二人の若いアメリカ人女性がなにかの書類に目を通したりしていた。さらにその手前に、大きな鏡の置いてある着つけ用らしいスペースがあり、あとは、店側の壁際にパー

テイションで仕切られたブースがあつた。

服部は、和音を着つけ用のスペースに立たせると、体にメジャーをまわしてサイズを測つた。そして、その数字を、手に持ったバインダーの書類に手際よく書き込んでいく。

採寸は、スリーサイズだけでなく、肩幅や、腕の長さなど、何カ所にもおよんだ。今朝、部屋への電話で、「なるべく体にぴったりしたものを着てきて」と朱美



が言ったのは、このためだったのかと和音は思った。それで今、和音は、体に張りつくような小さなTシャツとタイトなミニスカートを着ているのだ。

「スタイルもいいわね。でも、ちよつとヒップが足りない気がするから、パリエは重ねの多いものにしましょうね」

服部は和音にそう言ってから、アメリカ人の女の子の一人を呼び、そのバインダーを渡した。

「今、サイズに合ったものをそろえさせるから、ちよつと休んでいてね」

服部にそう言われ、朱美と和音は、その休憩用らしいブースに入り、ソファに腰掛けた。パーティションの間からのぞくと、二人のアメリカー人の女の子たちが、キヤスターのついたハンガースタンドを移動したり、ドレスを掛け替えたりしているのが見えた。

と、脇のマガジンラックから厚手のクリアファイル

を取り出して見ていた朱美が、それを、テーブルの上  
に開いて和音の方に向けた。

「ちよつと、これを見て」

見ると、ウエディングドレス姿のモデルの写真が一  
ページに一枚ずつ入っている。

「ウエディングドレスには、大きく分けて、四つのシ  
ルエットがあるのね」

ページを繰りながら、朱美が言った。

「まずこれが、いちばんよく見かけるプリンセスライ  
ン。正統派のウエディングね。生地はサテンの他に、  
レースやオーガンジーをたくさん使ったものが多い  
わ。スカートの下には厚めのパリエを履いて、腰のあ  
たりからふつくらしめた感じになるの」

「あの、パリエって、なんですか？」

先刻、服部の言葉の中にも出てきたその単語の意味  
を、和音は聞いた。

「あ、ペチコート。薄い生地を何枚も重ねてポリウレムを持たせたもの。ことを特にそう言うのよ。で、プリンセスラインの場合、スカート丈は床に届くくらい長くて、たいていの場合、後ろにトレーンがついてるの。トレーンっていうのは、この、床に引きずってる裾のことね。こっちのみたいに、肩のところから、マントのようにトレーンを引きずるタイプもあるわね。トレーンの長さや幅は、教会の通路の広さとか考えて

決めないと、引っかかっちゃうから気をつけてね。今度お願いしてある教会は、小さいけど、通路は広かったと思うから、ある程度はだいじよぶよ。でも、三メートルも四メートルもあるのは無理よね」

そこまで聞いて、和音はやっと、朱美がウエディングドレスを選ぶための基礎知識を教えようとしていることに気がついた。

「あの、僕が選ぶんですか？」

「そりゃ、決まってるじゃない。だって、和音ちゃん  
のウエディングなんだもん。服を選ぶセンスは、昨日  
で実証済みでしょ」

朱美は、そう言って、いたずらっぽく笑い返してき  
た。

逆に和音は、ちよつと真剣な顔になって身を乗り出  
した。早くきいておかないと、むこうの準備ができて  
しまっただろう。

それを見て、朱美は、さらにおかしそうな笑顔でつづけた。

「ネックや袖のデザインは、同じプリンセスラインでも、まあ、いろいろね。首のところまで詰まっているのもあれば、こんなふうに襟がついて、しかも長袖ななんていうのもある。オフショルダーで肩をほとんど出して二の腕のところに半袖がついてるとか、スリッパタイプのストラップでつるデザインとか、それから、



これみたいに、完全なオープントップで、ストラップもなしでバストでとめるっていうタイプもあるわ。じや次ね」

朱美はそう言って、クリアファイルの中仕切りの紙を繰った。

「これは、スレンダーラインっていうの。サテン地とかの透けない素材でできていて、スカートのおくらんでないタイプね。たぶん二十世紀になってから出てき

たデザインよね。アール・デコって感じ。こんなふう  
に、体にぴったりした裾までのドレスで、体の線を強  
調するから、よほどグラマラスじゃないと似合わない  
わ。だから、日本人には向かないって言われてる。和  
音ちゃんは、スリムだけど、ヒップラインを考えると、  
ちよつと冒険かな」

これについては、あまりおすすすめではないらしく、  
朱美は、その程度でとばした。

「次にこれがAライン。シルエットとしてはさっきのプリンセスラインと似てるけど、もうすこしモダンなデザインよね。パリエはあまり厚いものをつけずに、スカートが腰から裾へストレートに広がってる感じ。だからAラインなのね。プリンセスラインみたいに釣り鐘型のスカートじゃなくて、アルファベットのAみたいでしょ。色を別にすれば、ふつうのパーティードレスなんかと同じタイプだから、まあ、着やすいし無難

よね。トレーンは、まずついてないわ。こっちのみたいに、身長より長いベールを使って、トレーン代わりにすることはできるけどね。ネックとか袖は、プリンセスラインといっしょで、いろいろあるの。でも、あんまりデコラティブだったりクラシックだったりすると、これみたいに、ちよつとちぐはぐな感じになっちゃうわね」

と、そこで、コーヒーを持って、服部が入ってきた。

コーヒーをそれぞれの前に置いて、朱美の横に腰掛けた服部に、朱美はちよつと照れたような顔をした。

そんな様子に、服部は笑い返し「いいわよ、つづけ」と言った。

「そんな、服部さんの前で恥ずかしいじゃないですか」  
「そんなことないわよ。荻原さんだって、結婚情報誌のベテラン編集者なんだもの。私より知識があるくらいでしょ」

朱美は、ちよつと肩をすくめると、最後のひとつの説明を始めた。

「これは、ショートラインね。スカートが、ミニ丈やミモレ丈だからそう言うの。まあ、プリンセスラインやAラインを短くしたものだって考えればいいわけね。広がっているスカートから脚を出すぶん、やっぱり第一印象でかわいいって感じでしょ。だから、和音ちゃんには合うと思うわ。でも、ガーデンパーティ形

式の式だったりするとぴったりだけど、教会には、いまいち似合わない感じもするわね」

「教会によつては、宗教上の理由でだめなところもあるのよ。肩を出すのも、脚を出すのもだめって」

服部が、そうつけ加えたあと、朱美にきいた。

「今度は、どこでやるの？」

「えっと、セント・カラワオ」

「あつ、あそこなら、だいじょうぶね。小さいけどす

てきな教会よ。でも、あそこ、たしかブライドメイド  
をつけなきやいけないはずよ」

「ブライドメイドって……ああ、花嫁の介添え？」

「そう、花嫁のいちばんの女友達が、ピンクの衣裳を  
着て付き添うの」

「そっか……、どうしよう、困ったな。誰かに頼まな  
きや」

朱美は、そう言って考え込んだ。



そこで、和音は、思いついて言った。

「朱美さん、やっってください」

「えっ、私が？」

「だって、今、あたしのいちばんの女友達っていったら、朱美さんでしょ」

服部がいるので、和音は女言葉でそうつけ加えた。

「でも……、ブライドメイドの衣裳って、あれでしょ。

上から下までピンクの、かわいい感じのやつ。たしか、

頭にも、小さなレースの飾りつけたりして」

「そう。メイド用の髪飾りね」

珍しく動揺した顔をしている朱美を面白そうに見て、服部が答え、そして、こうつけ加えた。

「花嫁さんもこう言っていることだし、衣裳ならいくらでも貸してあげるから、おやりなさいよ。荻原さん、美人なんだから、そういうかわいいのも似合うわよ」

「ブライドメイドなんて……」と、いまだぶつぶつ言っている朱美を置いて、服部は、和音をハンガースタンドのところまで連れていった。

三台のハンガースタンドが前に引き出され、そこに、四十着ほどのウエディングドレスが吊されていた。和音のサイズに合わせて、選び出したのだろう。

「まず、気に入ったのを、二着か三着選んでみて。ほんとはもつとたくさん着てみてもらいたいんだけど、

着つけるのに、一着三十分くらいかかっちゃうから」  
服部の言葉にうなづいて、和音は、ウエディングド  
レスのハンガーを一着ずつ取り上げては、ていねいに  
見ていった。

さっき、朱美の解説を聞いておいてよかったと、和  
音は思った。ドレスを見る基準がそれなりにできたか  
らだ。

最初に目にとまったのは、バストからスカートまで

がシンプルなサテン地で、丸首のネックラインから肩、そして長袖の部分までがレース地でできているものだった。膝丈のスカートの下からも、まるでペチコートがのぞいているように、何枚も重ねた半透明の生地が見えているかわいいうデザインだ。先刻の説明に従えば、膝丈だからショートラインということになる。これまで、スカートといえればミニばかりで、昨日着たムームー以外は長いのを履いたことがなかったので、ついこ

れに目がいったのかも知れない。

和音が、そのドレスを体にあててみると、服部が「鏡、ここにありませんからね」と言った。見ると移動式の鏡が、ハンガースタンドのそばまで運ばれていた。

その前に立って、もう一度、体にあててみる。

鏡の中のその姿を見た瞬間、不思議なことに、それだけで胸の鼓動が高まった気がした。

この三日間、いろんな女物の服を着たが、このドレスは、それらとはあきらかにちがっていた。

どこがどうちがうのか、和音にはうまく説明できなかったが、このドレスは、白くて……、そして……、とにかく、白いのだ。

その純白をこれから身にまとうのだと思うと、くすぐったいような、わくわくするような、さらに言えば、怖いような感じさえする。見たことのない自分がそこ

に誕生する……なんだか、そんな感じだった。

「最初は、これを」

そう言って手渡すと、服部はにっこりと笑って、そのドレスを受け取った。

その時、「入ってきて」という朱美の声が聞こえた。部屋の入口あたりを見ると、朱美に手招きされて、カメラバッグを持った関口が入ってきた。

「ドレスを選んでるところを、撮ろうと思って」



その朱美の言葉にこっくりとうなづくくと、和音はもう、次のドレスを選ぶ作業に入っていた。そちらの方が気になり、撮影のことなど、どうでもいいように思えたのだ。

実際、そのあとドレスを見ている間、ストロボが何度も光ったのに、和音は、ドレスを選ぶことに夢中で、カメラのことなどまるで意識していなかった。

次々にドレスを手に取り、見ては、それを戻し、気

がつくとすでに残り十着ほどのところまできていた。

どれも、いいと思うところはあるのだが、さつき選んだものにくらべると、もうひとつピンとこない。

最後まで見てしまったら、もう一度頭から見直してみようと思っていた時、手に取ったドレスは、全体がサテン地のAラインのタイプだった。

ネックラインは、オフショルダーぎりぎりまで大きく開き、そこに、ランチョンスリーブ（ちょうちん袖）

ふうの半袖が着いているのがかわいい。バストからウエストへのラインはきゅっとしまり、そこから裾に向けて、スカートの広がりはストレッチなのだが、柔らかくて、ほどよい腰もある生地のおかげで、ゆったりとしたドレープがかかったように見える。裾近くの全周に、やはり白い糸で、手の込んだ刺繍が施され、それが全体のシンプルなシルエットにアクセントを与えていた。

エレガントだが、若々しさも感じられるこのデザインなら、いいかも知れない。

そう思って、和音は、鏡の前でそのドレスをあててみた。

その長いスカートを実際にはいた感じがもうひとつつかめなかったが、何より、袖のデザインが気に入って、これも着てみようと思った。

最後から二つ目のドレスも、どこか和音を引きつけ

るものがあつた。これは、袖もストラップもない、オー  
ープリントップのものだった。バストの膨らみでとめる  
わけだから、やはりサテン地でできた胴の部分は、当  
然体の線に沿っている。しかし、その部分全体を覆う  
ように、半透明なオーガンジーがふんわりと取り巻い  
ていて、白い霞の奥に、バストからウエストのライン  
が見えるような感じのデザインになっていた。ウエス  
トから下は、ポリユームのあるプリンセスラインで、

スカートには何枚かの細かなレースが重ねられ、それがそのまま、後ろに伸びてトレーンになっていた。トレーンの長さは、二メートル弱だろうか。

トレーンのついたものも着てみたいと考えた和音は、鏡の前で確かめることなく、最後の一着をこれに決めた。

「和音さん、センスがいいわね。どれもみんな、あなたに合いそうなものばかり」

最後のドレスを受け取った服部は、そう言うと、そのドレスを、ハンガーがひとつだけかかるスタンドにかけた。見ると、その隣には、いつの間にか、先に選んだ二着も同じように並べられていた。

並んだ三着を見比べ、やはり最初のショートラインのものがいちばんいいと、和音は思った。

と、服部が、「和音さん、あなた今、ブラはどんなのつけてるの？」ときいた。

「どんなのって……ふつうの、ですけど」

ブラジャーの種類などそんなに知っているわけではない和音は、不安そうに朱美の顔を見て、彼女がうなづくのを確認しながら言った。

「そう、じゃあ、カップつきのショートコルセットを用意した方がいいわね。三着とも、そのまま着たら、ストラップが見えてしまうデザインだから」

そのあと、服部は、女の子の一人に英語で何か指示



した。いくついくつのサイズのコルセットを探してきてくれということらしかったが、早口だったのと、サイズの単位がインチだったようで、和音にはよくわからなかった。

「さて、と」

そこで服部は、部屋の中にいる全員の顔を見渡した。そして、関口に目をとめ、言った。

「申し訳ないけれど、ここから先は、男の方も、写真

も、オフリミットよ」

苦笑してうなづいた関口は、あとの指示を仰ぐように、朱美の顔を見た。

「そうね、井上君には、いちおう、食事をすませて十二時半くらいにはロビーで待ってるように言っているから、関口さんもそれに合わせて来てください」

関口が「了解」というような仕草で出て行くと、服部は、壁の近くにまとめられていたカーテンを引いた。

見ると、天井に、着つけスペース全体を取り囲むように、大きなU字型のカーテンレールがつけられている。カーテンをすべて引くと、さつき女の子たちがいたテーブルまでを取り込む形で、隔離された空間ができた。三方はそのカーテンで、もう一面の壁側には、縦横二メートルくらい大きな鏡がある。カーテンの色が、青みがかったグレーなのは、ウエディングドレスが映えて見えるようにだろう。

今、カーテンの中にいるのは、和音と服部と朱美の三人だけなのだが、他に、スタンドにかけられた三着のウエディングドレスが立っていて、しかも、人もドレスも鏡に映っているため、なんだか和音は、たくさんの人に取り囲まれているような気がした。

そこへもうひとり、さつき服部から何かを頼まれた女の子が入ってきた。手には、やはりコルセットらしいものを持っている。

「じゃ、Tシャツとスカートを脱いで、ブラも取って」  
服部の言葉に、和音はちよつとたじろいだが、よく  
考えれば、ここにいるのは「女だけ」なのだから、べ  
つにためらう必要はないのだろう。そう思い、和音は  
言われた物をすべて脱いで、横で受け取ってくれた朱  
美に渡した。

しかし、いくら女だけとはいえ、「胸」もあらわに  
したパンティだけの姿をみんなから見られているのは

落ち着かない。ましてや鏡の中にそんな自分がいて、そのまわりで見ている人たちが映っているというの  
は、よけいに恥ずかしかった。それで、和音は鏡に背  
を向けた。

すると、コルセットを持った女の子が後ろに立ち、  
それを和音の体にまわした。

もう少し弾力のある物を予想していたのだが、表面  
はなめらかでも、繊維に芯のある堅い感じの肌触りだ。

ちようどおへそのあたりから、バストの三分の二くらいを覆うその下着には、バストにあわせてカップがついていた。

前に立った服部がそのカップと胸の位置をあわせる  
と、後ろから女の子が強い力で引つ張った。

その女の子が下の方のホックからとめていき、五つ分のホックがとまると、和音は息苦しいような感じになった。胃のあたりと両脇腹に圧迫感があり、呼吸も、

腹ではできず、胸を上下してするしかない。

カップに押し上げられ、もり上がったのぞく「乳房」の  
上の部分が、その呼吸につれて上下した。

それが目立つのはまた、姿勢のせいもあった。コル  
セットの加える力で、背骨が反ったように伸び、自然  
に胸を突き出すような姿勢になるのだ。

コルセットの装着具合を確認したあと、服部は、テ  
ーブルのところまで行き、その上に置いてあったビニ



ールに包まれた封筒のような物を取り上げた。

「じゃあ、これ、はいててくれる？」

服部はそう言いながら、そのビニールを開け、中から白っぽい薄布のような物を取り出すと、和音に渡した。パンテイスッキングだった。

受け取った和音はちよつと困ってしまった。じつは、行き先がハワイだったこともあって、これまでの女装では、ストッキングをはいたことがなかったのだ。

それで、ちらりと朱美を見ると、朱美は、それをさつと取り上げ、服部の方を気にしながら、手早くパンティ部分のへりをくるくると丸めて、返してくれた。

それを見て、やっと、母がそうやってはいているところを子供の頃見ていたのを思い出し、和音はそれに足を通した。

よじれた部分などをそれとなく直してくれた朱美のおかげで、和音はなんとかそれをはくことができ、ほ

つと一息ついた。

幸い、和音と朱美が無言でそんなやりとりをしてい  
る間、服部は、三着のウエディングドレスの前に立ち、  
女の子と熱心に話しながら、例のバインダーに何かを  
書き込んでいた。

しばらくそうしていたあと、服部からそのバインダ  
ーを受け取ると、女の子は、ふたたびカーテンの外に  
消えた。

おそらくは、それぞれのドレスに合う小物をそろえに行っただろう。

「さあ、じゃ、まず、このショートラインのから始めましょうか」

服部は、そう言うと、一着目のドレスをハンガーからはずした。

「これは、見てもわかるように、パリエの裾が、サテンのスカートの下からのぞくデザインなのね。だから、

もともと、中にパリエが縫いつけてあるの。このまま着てオーケーよ」

服部は、和音の前にしやがみ、ウエストのあたりまで背中の割れたドレスを開くようにして持って、和音を促した。

そこに足を入れようとし、和音はちよつとよろけてしまった。ストッキングのせいで、高いヒールのサンダルをつっかけていた足が滑ったのだ。

「ふふ、肩を持っていいわよ」

和音の緊張した様子がおかしかったのだろう。服部が笑いながら言った。

それで、和音は、服部の肩に手をかけて、ドレスの中に足を通した。

両足が入って、和音がその中に立つような形になると、服部は立ち上がりながら、ドレスを上げていき、和音が腕を通しやすいうように、前の部分を広げてくれ

た。

和音は、無理に手を突っ込めば、なんだか、その薄いレースの袖が破れてしまいそうな気がして、そおつと差し入れていった。長袖の先から手が出ると、服部は、両肩を着せかけながら、後ろにまわった。

背中の部分はジツパーがついているので、肩までがサテン地になっている。服部がそのジツパーを上げてくれると、サテンのすべすべでちよつと冷たい触感が、

背中に心地よく伝わった。そして、バストラインより上の部分と袖の、レースの肌触りは、さらに心地よいものだった。触れているのかいないのかわからないほどの軽さが、肌をなでていた。

パリエが中に入って、しかも膝までしかないスカートは、和音の腰から腿を取り巻いて、和音がちよつと体を動かすだけで、ふわふわと大きく揺れた。

その全身を包む柔らかな感触が、和音に、まるで宙



に浮いているような感じを与えていた。

「かわいいわね」

前にまわって、和音を見ていた朱美が、ため息をつくように言った。

「ええ、ほんとによく似合うわ」

服部がそう答えたところで、また、女の子が両手にさまざまなものを抱えて入ってきた。

その女の子も、和音の方をちらりと見て「イツツ・

キュート！」と声にした。

女の子が、持ってきたものをテーブルの上に並べ始めると、服部はその中から一足の靴を取り上げ、和音の前に置いた。

白いパンプスだった。

和音はサンダルから足を抜いて、それを履こうとしたが、ふくらんだスカートがじやまになって、足もとがよく見えない。それで、両手でスカートの前の部分

を押さえて、足を入れた。

「ベールは、このドレスだと、こんなのがいいんじゃないかしら」

服部はそう言って、テーブルの上から、ベールをひとつ取り上げた。白いフェルト地の円筒形の帽子がついていて、その下からベールが出ているようなものだ。

「あ、それ、かわいい」

朱美が言うと、それに笑い返ししながら、服部は、和

音の頭の上に載せた。

服部が胸ポケットにはさんだへアクリップを何本か取って、ベールを固定する作業を始めたので、和音は、膝をそろえたまま曲げ、中腰になった。ふくらんだスカートの中のパリエの裾が、揺れながらふくらはぎをなでた。

「さあ、できたわ。アクセサリーとかは、服が決まったあとで選ぶとして。見てみる？」

和音がうなづくくと、服部は、和音の肩を持って、くるりと向きを変えた。

「あっ」

和音は小さく叫んでいた。

さつき、このドレスを体に当ててみたとき以上に心臓が高鳴った。

朱美たちが言ったように、その姿は本当にかわいかったのだ。

頭の上に小さく乗った帽子から、ふわりと降りたべ  
ール。シースルーの袖の中に見えるなめらかな腕。コ  
ルセットのおかげでさらに際だち、つんと上に向いた  
胸、そして、きゅっとしまったウエストライン。広が  
ったスカートとその裾からのぞく何枚にも重なったパ  
リエ。そこから伸びた形のよいふくらはぎと、細い足  
首を強調するパンプス。

その全体の印象は、おとぎ話に出てくる妖精のよう

だった。

「あたし、これにする」

鏡を見つめて、和音は思わず言っていた。

その言葉に、和音の後ろに立った服部と朱美は、顔を見合わせて苦笑した。

「和音ちゃん、それ、確かにすごくいいけど、せっかく選んだんだから、あと二つ試してからでも遅くないんじゃない？」

朱美が、鏡越しに笑いかけながらそう言った。

他のを着なくてもわかってる。僕は、最初から、これがいちばんいいと思ったんだから。

和音は、心の中でそう思ったが、うなづいた。

「じゃ、次のにいきましょうか」

服部の言葉に、和音は、また鏡に背を向けた。

「べつに鏡を見たままでもいいのよ」

「いえ、今みたいに、第一印象で比べたいから」



和音はそう言ったが、本当のことを言えば、今着ているドレスを脱がされるのを見るのがいやだったのだ。

服部と、そして女の子も手伝い、ベールを取りドレスを脱がすと、次に服部は、テーブルの上から、パリエをひとつ取った。そこにはパリエが二着分用意されていたが、ボリユームの少ない方だった。

服部は、さつき、最初のドレスを着せてくれたとき

と同じように、和音の前にしやがみ、和音にそれをはかせた。

さつきは、スカートの内側のふわふわした感じは、膝までだったが、今度は、その感触が、足首までを覆った。

最初のドレスを元のハンガーに戻していた女の子が、その作業を終え、二番目のドレスをハンガーからはずした。

和音が、また、それを履くように着るのだと思つて  
いると、服部と女の子が、そのドレスを両側から持ち  
あげ、和音の頭からかぶせた。下から履けば、パリエ  
がまくれあがつてしまうからだろう。

途中で引つかかったスカートを、パリエ全体に被せ  
るように下ろし整えると、また、服部は、上の部分を  
広げて、和音に腕を通させた。

背中のジツパーを上げると、半袖のランチョンスリ

ーブが、両肩の端あたりを包み込むようにふくらんだ。「半袖だと、やっぱりグローブをした方がいいでしょ」服部はそう言つて、テーブルの上から、白い手袋を取り上げた。

その薄手の布でできた手袋は、はめてみると、ちょうどひじの下あたりまでの長さだった。

「このドレス、デザインがシンプルだから、あまり凝ったベールは、向かないと思うのね」

今度服部が取り上げたベールは、背中にかかるくらい、わりとふつうな感じのベールだった。

それを頭に載せると、服部はヘアピンを使ってとめた。そして、「さあ」と言つて、和音をふたたび鏡の方に向かせた。

鏡の中の自分の姿を見て、ふたたび、和音は息をのんだ。

そこには、正真正銘の「花嫁」がいたのだ。

ふわりと広がって、肩に掛かるベール。なめらかな首から肩への線とその先に愛らしくついたランチヨンスリーブ。指先まで細く見せる手袋。細いウエストからすつきりと広がったスカートのシルエット。緩やかに波を打つその裾で、ゴージャスな印象を添える刺繍。

それは、いわば完璧な花嫁だった。その姿を見て、和音は、花嫁を演じる自分にとって、これ以上の衣装はないだろうと感じた。

しかし、鏡をしばらく見つめていて、和音は、それでもやはり、最初のドレスの方がいいと思った。

さっきのドレスには、驚きがあった。強い印象と存在感があった。抱きしめたくなるようなコケットがあった。

でも、このドレスは、あまりに完璧すぎて、できあがった美しさしか感じられない。もつと言えば、人間らしさのようなものが、どこか欠けている気がした。

「これも、すごくすてきだと思っけど……」

「さっきの方が印象的よね」

朱美も、やはり、同じ意見のようだった。

「じゃあ、最後のを着ましようか？」

服部の言葉に、和音がまた後ろを向くと、先ほどと同じような手順で、今着ているものを脱がされ、パリエを履かされた。

今度のパリエが、さっきのよりさらにボリュウムが



あり、しかも、腰の周りからふくらんでいるのは、最後のドレスがプリンセスラインだからだろう。

さつきと同じように、頭からドレスを被せられ、さつきよりカットが曲線的なスカートが、パリエにかぶせて、慎重に裾まで下ろされた。

上は、今度のはオープントップだったので、袖を通す必要はなかった。ほぼコルセットのラインに沿ってドレスのトップラインが合わせられ、背中のジッパー

が上げられた。ドレスのパターンは、和音のバストからウエストの体型とぴったり合っているようだ。

しかし、肩と背中がそのまま出ていることで、なんだかドレスを着ているという感じがしなかった。しかも、サテンの生地を取り囲むオーガンジーの、どこかがさついた風合いが、二の腕の裏側の柔らかい部分に触れ、ちよつと違和感がある。

それで、和音は「これはないかな」と思った。

「グローブは、これね」

服部が渡してくれたのは、さっきの手袋よりさらに長い、ひじを覆い、二の腕にまでかかるものだった。その長さだと、自分一人では、しわにならずにはめるのはむずかしく、女の子が縁をていねいに引っ張り上げてくれた。

ベールもまた、腰あたりまである長いものだった。

今度は、上に、白い花の冠のような飾りがついている。

服部にそれを着けてもらいながら、和音は、なぜか、周囲の雰囲気違和感を覚えた。さつきまで、何かをするときには、あれこれ話しかけてくれていた服部が、無言のまま、妙に真剣な顔で、そのベールをとめているのだ。

ずっとにこにこ見ていた朱美も、驚いたような表情で見つめてくる。

いったいどうしたんだろうと思っていると、和音の

前に立ち、もう一度全体に目を走らせた服部が、裸の肩をつかんで、向きを変えさせた。

また振り向くつもりでいた和音は、服部が、前の二回のように完全に鏡に対面させるのではなく、鏡に対して四十五度くらい角度でとめたことで、そして、和音の後ろにかがんでいた女の子が、何かを持って回転に合わせて動かしたことで、このドレスにはトレーンがついていることを思い出した。トレーンまでが鏡

に映るようにしたのだろう。

それで、和音は、横を見るような格好で、鏡に目を  
やった。

！：：：。

何秒間か、本当に心臓の鼓動が止まったのではない  
かと思う。

それほど、鏡の中の印象は鮮烈だった。

和音はまず、それが自分であることも忘れて、「美

しい」と感じた。

「美しい」というのは、たぶん、こういうことを言うのだらうと思った。

床の上に伸びたトレーンは、大地をはう朝霧のように見えた。

その朝霧が、静かにゆっくりと集まって、空に向かって立ち昇る。

それが一カ所でくびれて、そこから上は、雲となっ

て空に浮かぶ。

反対に、空の上からは、柔らかな光のベールが降り注ぐ。

その光と雲に包まれて、そこに、今生まれたばかりの美しい命が息づいている。

その命は、美しいけれど、そのぶん傷つきやすい。

内にきらきらとした光を秘めながらも、表面はやわらかく透き通った：：脆もろくて弱い存在として、そこに



いた。

今は、ただひたすら、誰かの庇護を待ちながら……。和音は、その、「美しくも脆い命」が、自分なのだと気づき、涙があふれ出そうな気がした。

ベールの上の花飾りも、背中にかかるそのレースも、バストを取り巻くオーガンジーも、長い手袋も、何枚も重ねられたスカートも、そしてトレーンも、すべてが美しかった。でも、その美しさは、和音の無垢な表

情や裸の肩の、命の美しさを包み込み、称賛するためだけにあった。

和音は、もうこのドレス以外のこととは、考えられなかった。

あんなに気に入っていた最初のドレスも、もう頭の中にはなかった。

最初のドレスが「驚き」だとするなら、このドレスは「感動」だったのだ。驚きはいつかは覚めるが、感

動は心に届いて、そこに残る。

和音ばかりではなく、そこにいるすべての人が、ずっと、黙って鏡に見入っていた。

しばらくして、やっと、服部が大きなため息をついた。

「私、このドレスが、こんなにすばらしいデザインだったってこと、今日、はじめて知ったわ」

朱美が、それに大きくなるづき、まだ呆然とした表

情のまま、和音にきいた。

「これに、する：：わよね」

和音もまた、鏡に見入ったまま、ゆっくりとうなづいた。

そのあと、服部は、ドレスに合わせたアクセサリ―として、パールのネックレスとイヤリングを選んでくれた。

ネックレスもイヤリングも、けっしてゴージャスに飾り立てたものではなく、どちらかといえど控えめな印象を受けるものだった。

「その方が、和音さんとこのドレスの相性の良さをじやましないと思うの。でも、そのかわり、パールは最高の天然真珠よ」

それから、服部は、ドレスの細かい部分を点検し、例のバインダーに何か書き込みながら、ウエストなど

に何本かまち針を打った。あさつての朝までに寸法が合わないところ——和音には、今のままでも完璧だと思えたが——を直しておいてくれるということだった。

服部は、その時までには、ドレスに合うブーケも作っておいてくれると約束し、そして、こんなことを言った。

「うちがやっているのは、基本的にはレンタルのサー

ビスなんだけれど、和音さんにはこのドレスをプレゼントしてもいいと思ってるの。でも、ボスがうるさいから、その代わりに、和音さんの式の時の写真を店に飾らせてくれない。それなら、宣伝費ということ、ボスも納得すると思うから」

それに対して、朱美は、基本的に撮影した写真の著作権はカメラマンの関口にあつて、関口とは雑誌とホームページへの掲載ということではしか契約していない

から、関口にきいてみないとわからないと答えた。

和音は、関口が色よい返事をしてくれることを祈った。

店を出るとき、服部はまた、こんなことを言った。

「ここはハワイだつてことを忘れないでね。ああいう肩の出るドレスを選んで、失敗するお客様がよくいらつしやるのよ。日焼けは極力避けて。特に、水着のストラップのあとは禁物よ」



和音と朱美は顔を見合わせ、すぐにモール内のサンタン・ショップへ飛び込み、最も強力な日焼け止めクリームと、アフターケア用品を買い込んだ。

そんなことをしていたせいで、和音と朱美がロビーに出てきたのは、約束の十二時半ぎりぎりの時間になっていた。しかも、二人はまだ昼食もとっていないかった。

ところがロビーには、秀明も関口も現れてはいず、それで和音が、行く途中、車の中で食べられるようなものを、急いで買ってくるということになった。朱美は、ロビーで待ちながら、二人の部屋に電話してみるという。

和音は、ちよつと考えてから、ホテルの玄関を出て、ビーチに向かった。昨日、わりと近くのビーチサイドに立つフードスタンドで、ホットドッグとかを売って

いるのを見かけたからだ。

そのスタンドで、ホットドッグとタコスをつたつづつ買って、お金を払っている時だった。

「ヘイ！ ビューティフル・レイデイ、ウイル・ユー・マリー・ミー？」

突然、耳元でささやかれた。

驚いて振り返ると、そこに立っているのは、サンダラスに、なんだか品のないド派手なアロハシャツの男

だった。和音は、一瞬、たちのよくないロコボーイか  
と思ったが、すぐその正体に気がついた。

「もう、秀明、なに、そのアロハ」

「午前中、ひまだったんで、いろんな店、見てまわっ  
てたんだ。いいだろ、これ」

このアロハをいいというセンスを疑ったが、秀明の  
ことだ。もしかしたら、ただウケをねらって買ってき  
たのかもしれない、と和音は思った。

なにしろ、ふところには、例の一万ドルがあるのだ。和音も、とりあえずということ、今朝、そのうちの千ドルをわたされたが、残りはまだ秀明が握っている。とんでもない無駄遣いをされる前に、取り上げておいた方がいいかもしれぬ。

和音がそんなことを考えていると、秀明が言った。

「でも、お前、こんなところで何してるんだよ。もう行く時間だろ」

「秀明こそなによ。朱美さん、ロビーで待ってるわよ」  
そう言ってから、和音は、秀明のちよつと驚いたよ  
うな顔を見て、自分が、知らず知らずのうちに女言葉  
でしゃべっていたのに気がついた。まわりはほとんど  
外国人ばかりで、そんな必要などないのに、だ。

さつきまでのウエディングドレスを選んでいた時の  
気分——特に、最後のドレスを着たときの気分——を、  
引きずっているのかもしれない。なかった。

けつきよく、いちばん遅れて集合したのは、今日もやはり関口で、今日もやはり酒の臭いをぷんぷんさせていた。

そんな状態で車を運転できるのか心配だったが、関口は、ホノルル市内を巧みに走って、インターチェンジからH-1フリーウェイに乗った。

「関口さん、道よく知ってますね」

秀明が言うと、関口は、「ああ、ハワイは何度も来てるからさ」と言い、さらにこうつぶけた。

「でも、オアフ島だと、ホノルルと、あとは、ハワイ・カイとかノースショアだけで、今日行くところ：：ポリネシア文化センターだっけ、そこは、初めてだな」

タコスを食べながらそれをきいていた朱美が、「そう、初めてなの」と、なぜかにやにやした。



途中、関口がけっこうとぼしたおかげで——ガイドブックには一時間半かかると書いてあったのに——、二時前には、ポリネシア文化センターのパーク内に入っていた。

入ってしばらく歩くと、園内を走る川に面した広場に、たくさんの人が集まっていた。

入口でもらったリーフレットや園内の放送から、毎日一回行われている「カヌー・ページェント」という

アトラクションが始まるところだということがわかった。

それで、和音たちも、その人込みの中に加わって見物することにした。

しばらくすると、エスニックな音楽がはじまり、カヌー———というか、水の上に浮かぶ舞台のような舟の一群が次々に現れ、その上で、民族衣装を着たダンサーたちが、劇仕立てのダンスを見せた。

リーフレットによると、タヒチとか、フィジーとか、ニュージールランドとか、もちろんハワイも含め、ポリネシア各地の伝説をもとにした踊りなのだという。要するに、テーマパークによくあるパレードが、川を使って行われているようなものだ。

ダンサーたちはよく訓練されていて、火を使ったアクロバティックな踊りなどもあり、見ているだけで楽しかったが、和音は、その中でも、ハワイのパートが

特に気に入った。その踊りのテーマ、つまりもとになつた伝説が「レインボー・プリンセス」と題されていたことでもあるかもしれない。「プリンセス」という言葉に、今朝のドレスを思い出したのだ。

カウアイ島に伝わる昔話だというそのストーリーは、おおよそ、こんなものだった。

——ある時、虹の神が、おぼれそうになっていた小さな女の子を助ける。その女の子があまりにかわい

ので、虹の神は、その娘を「霧雨の女神」と名づけて、  
滝の裏の洞窟に閉じこめ、大事に育てる。何年も経ち、  
他の人間を知らず、自分の本当の名前さえ知らないま  
ま、美しい女性に成長した娘は、初めて滝をくぐって  
その洞窟に入ってきた男——若き部族の酋長と出会  
う。酋長はたちまち恋に落ち、娘に求愛するが、娘の  
「じゃあ、あなたは、私の名前をご存じ？」という質  
問に答えられず、拒否される。村に帰った酋長は、長

老である祖母の助けも借り、その娘の本当の名が「ウア」であることを突きとめ、ふたたび娘のもとにおもむき、幸せな結婚をする……。

素朴な民族の神話なのだが、和音は、その話に妙に惹かれるものがあつた。

洞窟の中で、霧雨のように細かい、滝のしぶきに包まれて、すつくと立っているその娘のイメージが、鏡の中に見たあのドレス姿と重なつた。

暗い洞窟の中で、長い時間ひとりで過ごしながら、その娘は、自分の本当の名前、人間としての名前を求めつづけていたにちがいない。だからこそ、自らも惹かれる勇敢な男に、なにより先に、その答えを求めざるを得なかったのだ。

「あなたが好きだという、私は、いったい誰なの？」と。

いつの間にか、和音は、その娘と自分を重ね合わせ

て考えはじめていた。

こんなふう「女の子」を演じてけっこううまくや  
っている自分、ウエディングドレスを着て感動してい  
る自分、そんな自分とは、いったい何者なのか？

それは、長い間、自分の心の洞窟の奥深く、閉じこ  
められていた「誰か」なのではないか？

ふいに、そんな思いが心の中に湧き出した。



そんな思いにとらわれていたせいで、その「カヌー・ページェント」の間も、そして、そのあと、ポリネシア各島の先住民の村を再現したパーク内をまわっている時も、和音は、どこか浮かない表情をしていた。

それに反して、秀明は、一日目の居心地の悪そうな感じとは大きくちがって、すっかり、いつもの調子を取り戻していた。

「トンガの村」ではドラムショーのイベントに参加

し、誘われるままにステージに上がり、「マーケサスの村」では、顔と腕に入れ墨を書いてもらい、「ハワイの村」の「フラダンス教室」では、最前列で踊ってインストラクターや客たちのウケを取り……。

そんな秀明の様子が、なぜか和音には、かんに障った。

僕がこんなに不安な気持ちに襲われているのに、こいつは、なんでこんなに陽気にしてるんだ……。

パーク内で撮影をするような時も、昨日とはちがいで、自分の方から、和音に肩を組んできたりする。すっかり、この環境になじんでしまったようだ。

「あれ、お前、なんで、そんな服着てるんだよ」

「サモアの村」で肩を組んで「ヤシの木登り」のイベントを見ているシーンを撮影した時、はじめて気づいたように、秀明が言った。車から降りるときからずっと、和音は、例のTシャツの上に、ジーンズの長袖

のシャツを羽織っていたのだ。

「なにを今頃気づいてるんだ」とも、「お前の趣味の悪いアロハよりましだ」とも言ってやりたかったが、和音は、短く答えた。

「……焼けたくないから」

すると、秀明はこう言った。

「バカじゃないの。ハワイまで来て」

和音は、その言葉に、いよいよ腹立たしい思いがし

た。

ウエディングドレスを着るために、自分がどれだけ  
気を使っているかなんて、秀明はなにもわかっていな  
いのだ。

じつは、和音だけでなく、もうひとり不機嫌になっ  
ている人間が、メンバーの中にいた。

関口だった。

夕方近く、パーク内を一通り見終わった一行は、スナックスタンドで飲み物を買った。

関口は、当然、ビールかなにかを飲もうと思ったらしいが、園内はいつさいアルコール禁止だと告げられたのだ。

「ここの経営母体は、すぐ隣にあるモルモン教の大学なのね。そもそも、学校の運営資金と、学生のアルバイトをつくり出すために設立されたのよ。モルモン教

の戒律では、禁酒禁煙でしょ」

朱美がそう解説した。来る途中、関口が、ここは初めてだと言った時、朱美がほくそ笑んでいたのは、これが理由だったらしい。

さらに、そのあと、夜八時から始まるポリネシアンショーを見るために、ステージのそばのレストランでダイナーをとったのだが、そこでも、アルコールのメニューはいつさいなかった。

「なんで客にまで、そんな戒律を守らせるんだよ」  
関口はぶちぶち文句を言いながら、グアバジュース  
を飲んでいた。

夜のショーもすばらしいもので、特に、後半のステ  
ージいっぱいを使ったファイアーダンスは迫力満点だ  
った。

しかし、和音と関口は、やりのり切れず、どこか  
いらいらとした顔をしていた。



秀明は、そんな和音のようすに気づき敬遠したのか、朱美にばかり話しかけ、いつしよになつてはしやいでした。

和音は逆に、そんな秀明に対して、いらついていたのだが。

「ねえ、クラブでも寄つて、飲んでかない？」

半日間の禁酒がよほどこたえたのか、フリーウェイ

を降りて、ホノルルの街に入ったとたん、関口が言った。

「クラブ……？」

「うん。『ホノルルのディスコでナイトリゾートを楽しむ二人』なんてカットも、あつた方がいいだろ」

「でも、もう十一時まわってますよ」

朱美がそう言うと、関口は、「まだ店は開いたばかりだよ」と、ホテルへ行くのとは別の道へ、ハンドル

を切った。

「ここって、クヒオ通りでしょ」

すたすたとそのナイトクラブに入って行ってしまった関口の後を追いながら、秀明が朱美にきいた。

「ええ、そうだけど」

「クヒオの西地区って、夜はあぶないところだってガイドブックに書いてあったけど」

「ええ、らしいわね。でも、このディスクは、ハワイでも有名なところだから、そんなに心配することもないんじゃない」

朱美も初めてらしかったが、そう言っわりと平然としているので、秀明と和音は、そのあとについて店内に入った。

店内は、実際、渋谷あたりにあるクラブとそんなに変わるわけではなかった。

たしかに、まわりをぐるりと取り囲む二階席には、モヒカン刈りの男同士でキスしているようなカップルもいたが、フロアそのものには、そんな異様な雰囲気はない。むしろ、東京のアバンギャルドなクラブ——神奈川の田舎に大学がある和音は、そんなところに何度も行っているわけではないが——などより、ある意味でまともだった。そこには、一種類ではなく、さまざまな人間が踊っていたからだ。

最新のニューヨークファッションで固めたスノビツ  
シュなやつもいれば、いかにもロコボーイ・ロコガー  
ルといういでたちの者もいる。日本人観光客らしいグ  
ループも何組かいた。

とはいえ、関口が言っていたように、気軽にフラツ  
シュをたいて写真を撮れるような雰囲気でないことも  
また確かだった。そんなことをすれば、すぐ殴りかか  
ってきそうなお兄さんたちもたくさんいたのだ。

それに、撮影しようにも、当の関口が、フロアの端の席に着くなり、今日不足した分を補給するとしても言わんばかりに、ウイスキーをがぶ飲みしはじめたのではどうしようもない。

あとの三人は、そんな関口をあきれて見ていたが、やがて、秀明が、朱美に向かって、「こうしてるのもバカみたいだから、僕らも踊りませんか？」ときいた。

「誘う相手がちがうんじゃない？」

朱美にそう言われ、秀明は、和音の方を向いて「踊る？」ときいた。

「ううん、いい」

和音は、そう答えていた。

「じゃあ、朱美さん、踊りましょうよ」

「そう……？」

朱美は、そう言って、今一度和音の方を見たあと――



「それじゃあ、お姉さんが、ほんとはすごいんだって  
とこ、見せてあげましようか」

——と言って立ち上がった。

「関口さんのこと、お願いね」

すでに酔いつぶれたようにとろんとしている関口の  
方をちらりと見たあと、朱美は、秀明とともにフロア  
に出た。

ホール全体を揺さぶり、間断なくつづくビートと、

あおり立てるディスクジョッキーの声の中で、見つめ合って踊り始めた朱美と秀明を見ながら、和音は、今日の午後ずつとつづいていた不安定な精神状態が、さらに増幅していくのを感じていた。

さっき、僕は、秀明に誘われて、なんで「ううん、いい」などと言ったのか？

それは、秀明の誘い方が気に入らなかつたからだ。先に朱美さんを誘っておいて、そのあとで「踊る？」

はないだろう。

それに、朱美さんも朱美さんだ。いくら僕が断つたからといって、あんなにうれしそうに踊り出すことはないじゃないか。

——と、そんなことを思ってから、和音は、今度は、そんな自分の思っていることの奇妙さに驚いた。

それではまるで、僕は本心では秀明と踊りたくて、それで、朱美さんにやきもちを妬いているみたいじゃ

ないか。

何曲か速い曲がつづいたあと、曲がスローなものに変わった。

と、突然、関口が席を立って、ふらふらと店の奥の方へ行った。トイレにでも行くつもりだろうが、足取りは完全に酔っぱらっている。和音が席にいるというのに、脇に置いていたカメラバッグをわざわざ肩に掛けて行ったところをみても、前後不覚に陥っているに

ちがいない。

どうしてこんな酔っぱらいといっしよにいなければならないのかと思ひながら、そんな関口を目で追つたあと、ふたたびフロアに目を戻すと、秀明と朱美が、体を密着させて踊っていた。目を合わせ、何かを話しながら。

あの二人は、なんでこんな曲まで、いっしよに踊っているんだ。

あんなに仲よさそうに見つめ合ったりして。

まるで、僕のことを忘れたみたい……。

それにしても、秀明はいつたい、なにを考えているんだ？

僕らは、ハワイまで、なにをしに来てると思ってるんだ……。

——また、そんなふうに考えている自分に気づいた和音は、ふいに、そう考えているのは、今日の昼、「レ

インボー・プリンセス」のダンスを見ていたとき感じた自分の中の「誰か」なのだと思った。

和音の気がつかぬ間に、滝の奥の洞窟の中で、一人で育っていた「誰か」……。

その「誰か」が、今、強く答えを求めていた。

「……私は、いったい誰なの？」

和音は、その答えを急いで見つけなければいけないと感じた。

少なくとも、あさって、もう一度あのドレスを身につける時までには。

なぜだかわからないが、強くそう感じた。



第6楽章 夢の波音

波の音が聞こえた気がして、和音は目を覚ました。

しかし、ベッドの中で耳を澄ましてみても、聞こえてくるのは、かすかにプーンという空調音だけだ。

いくらビーチサイドのホテルといっても、ここは三十二階。しかも完全密閉された部屋である。さっきの波音は、空耳だったのかもしれない。

ベッドサイドのテーブルに置かれた時計を見ると、まだ六時を少しまわったところだった。

昨夜、あのディスクを出たのが、たしか午前二時過ぎだったはずだ。それから、十五分ほどでホテルに着き、そのあと入浴して、肌の手入れとかあれこれをし

て、ベッドに入ったのは、三時半近くか。

だとすると、三時間も寝ていないことになる。

和音は、もう少し寝ようと目を閉じたが、どこか神経が高ぶっていて、もう眠りに就けそうもなかった。

それで、起き出した和音は、そのままバスルームへ行き、シャワーを浴びた。

体を拭き、例のフォームを装着する。

化粧台の前で、その作業を終えた和音は、なぜか、

少しだけ気持ち落ち着いた気がした。少し前までは、こんなふうには鏡の中に「胸」のある自分を見ると、どぎまぎしたりそわそわしたりしていたというのに、今はむしろ、この方が、自然な気さえする。

そんな自分の「裸体」を見て、和音は、首筋から肩のあたりの肌が、また少し焼けているのに気がついた。昨日、あれだけ注意していたのに、紫外線は確実に服の間から忍び込んでいるようだ。和音は、昨日買った

日焼け止めの乳液を手に取り、たっぷりと体に塗りこむと、それを、今日持つていく予定のバッグにしまった。

今日は、マリニリゾートを中心に写真を撮ると言っていた。また、水着になったりしななければならないのだろう。

和音は、そう思い、ふたたび憂鬱になった。

あのドレスを着るまでは日に焼けたくない。朱美さ

んもそれはわかっているのだから、もう少し考えてくれればいいのに……。

そう思いながら下着を着け、ワイキキの海のようなライトブルーのシャツドレスを着た和音は、コーヒールームでも飲もうとリビングルームへ出た。

スタンドバーの冷蔵庫から、フルーツと野菜のミックスジュースを出し、それをコップに注いでいると、部屋の反対側からいびきが聞こえた。

和音はカウンターを出て、そのジュースを持ったまま、なんとなく、ソファセットに近づいた。

大きなソファの上で、秀明は、昨日の品のないアロハとバミューダパンツのまままで寝ていた。昨夜、デイスコから帰ったあと、入ってくるなりここに寝ころび、そのまま寝入ってしまったようだ。

クッションを抱き、大いびきをかいている秀明を見ているうちに、和音は、またひどく腹が立ってきた。

ほんとに、どうしようもなく脳天気なやつ。なんで僕は、こんなやつといっしょにいなければならないんだ……。

秀明に対するいつもの感情にとらわれ、和音は、手に持っているジュースを、秀明に向かって思い切りぶっかけてやりたいような衝動に駆られた。

しかし、とはいえ、今朝の和音のいらだちは、いつものものとは、少しちがうようだ。



こいつ、どうして、こんなにのんきにしていられるんだ。明日は……、大切な日だというのに……。

「主へのお祈りは、わたくし、英語でします。そのあと、ミスター・ヒデアキ、ミセス・カズネの順番で、主への結婚の誓いききます。これは、わたくし、日本語でします」

その体の大きなアメリカ人牧師に、「ミセス・カズ

ネ」などと言われ、和音は、さらに緊張した面もちになった。

朝一番で、明日の式の打ち合わせをするということ  
で、和音と秀明は、ハワイ大学の近くにあるこの小さな教会に連れてこられた。

牧師の案内で会堂の中を下見した後、今は、明日の  
段取りの説明を受けているのだ。

和音と秀明は、明日、二人が立つべき位置に立たさ

れ、そして、朱美は、入り口付近でその話を聞いてい  
る。朱美が離れて立っているのは、さつきからあくび  
を連発しながら和音たちにカメラを向けている関口  
の、じやまをしないためだ。おそらくこの写真は、「神  
父さんと打ち合わせをする二人」とでもキャプション  
がつくのだろう。

日本人の挙式も多いからにちがいない。牧師は器用  
に日本語を使った。しかし、どうしても、外国人牧師

独特のイントネーションが混じる。

「わたくし、きいたら、主のみまえで、夫婦になること、心から誓えるなら、『誓います』と、言ってください」

その言葉に、和音は心がくりと痛んだ。明日は、この人のよさそうな牧師の前で、そして神様の前で、うそをつかなければならないのだ。

「それが終わったら、次に、指輪の交換します」

指輪：：：？　　そうか、結婚式には指輪がいるんだ。  
朱美さんはどうするつもりなんだろう。あとできいて  
みなければ：：：。

和音はそう思ったが、そのあとの牧師の言葉に動揺  
して、そんな疑問など、どこかへふっとんでしまった。

「最後に、二人、誓いのキスして、式終わります」

キス：：：！？　　そんな：：：秀明と：：：キス？

キリスト教の結婚式でどんなことをするのか。和音

だって、映画やドラマなどで見たことはあるから、知らなかったわけではない。だから、ちよつと考えてみればすぐに思い当たることだった。でも、いままでそれに気づかなかつたのは、それがあまりにもリアルでない——そもそも、全くリアルでないことをやってい

るのだが——突飛な発想だったからだ。それは、考える前に、思わず笑い出してしまふようなことなのだ。

それにしても……秀明と……キス！

和音は、秀明が牧師の前で大声で笑ってしまったのではないかと心配になって、横に並ぶ秀明を見た。

ところが、秀明は、大まじめな顔で牧師にうなづいたあと、和音の方をちらりと見て、確認するようにもう一度うなづいてみせた。

えっ、なんで……？ ……こいつ、どこまで調子がいいんだ。

和音は、呆気にとられたように秀明を見つめ返した。

牧師の後ろでは、架刑のキリスト像が、そんな二人を見下ろしていた。

ハレーションを起こしたような白い砂浜を、ひとり遠くに見つめ、和音は、自分がどんどんナーバスになっていくのを感じていた。

「和音ちゃんは、焼けるといけないからここにいて」と朱美に言われ、ビーチから少し離れたこの



休憩所レストステーションのベンチで、あとの三人が戻ってくるのを待つことになったのだ。

今日二つ目の予定地、ハナウマ・ベイは、海水浴場でもあるが、今では自然保護区としての性格が強い。だから、車も近くまでは入ってこられない。崖の上の駐車場に停めて、急な坂道を十数分かけて歩いて下つて来る必要があった。

いったんは四人でそうやってビーチまで降りてきた

のだが、そこで景色を見た関口が――

「ここなら、誌面で大きく使うカットが撮れるんじゃないの。三十五ミリじゃなく、ブローニーで撮りたいな」

――と言いだした。

それには、ちゃんとした撮影機材がいる。それを、ふたたび車まで取りに帰らなければならぬということだ。

それを聞いた朱美は、一瞬うんざりしたように今降りてきた道を見上げたが、やはり編集者として、誌面をよくするための提案は受け入れるべきだと思ったのだろう。「まあ、ゆうべのお酒も抜けるから、ちようどいいわね」などと言って、秀明も誘い、自らもふたび駐車場まで戻った。いくつもある重い機材を、関口一人に運ばせるのは忍びないと思つたにちがいない。

それで、和音はひとり、取り残されてしまったというわけだ。

和音が今いる休憩所は、日陰にはなっているが、ベンチの並ぶ東屋のような造りだから、けっして暗いわけではない。しかし、ビーチの砂浜が、あまりに白く光っているせいで、そのぶん、なんだかひどく薄暗いところにいる感じがする。

和音がナーバスになっていくのは、そのせいもある

かもしれなかつた。なんだか自分が、人の道にもとる、  
ダークサイドに足を踏み入れているような、そんな気が  
がしてくるのだ。

明日、自分は、あのドレスを着て、あの教会の祭壇  
の前で、秀明と「一生をともにする」ことを誓うのだ。

本当に、そんなことをしていいのだろうか？

もちろん、自分はキリスト教徒ではないし、神様と  
いうのもよくわからない。でも、やはり「神聖なもの」

を冒瀆するという罪悪感のようなものはある。

そのうえ、秀明と「誓いのキス」までするというのだ。

まあ、男同士でキスをするという根本的な気持ち悪さはあるし、あの秀明とキスするなんて、考えただけでもぞつとするが、芝居だと割り切ってしまったえば、できないことではないだろう。命を落とすとか、けがをするとかいうわけではないのだから、どうということ

もないのかもしれない。

でも、明日のそれは、単なるキスということを超えた「誓いの儀式」なのだ。それを平然とした顔でこなせるほど、僕は、軽薄で無神経な人間になれるだろうか？ たとえば秀明のように……。

秀明も、いったいなにを考えているのか、さっぱりわからない。

ハワイに着いた当初は、あんなに気まずそうにして

いたのに、いつの間にか、すっかり調子がよくていい加減な、いつもの調子に戻っている。

これは本当に、そんないい加減な、冗談半分な気持ちで進めてしまっていていいことなのだろうか……？

和音は、そんな考えの中を堂々巡りしていた。

と、そのとき、「あ、やっぱりそうだよ」という弾んだ声が聞こえた。その声の無邪気な明るさに救われた気がして、和音は、声の方を振り向いた。



するとそこに、水着姿の四人の女の子が立っていた。成田空港で出会い、ワイキキビーチでも見かけた、あの女の子たちだった。

振り向いた和音と目が合ってしまったので、女の子たちはちよつと気まずそうな顔をした。

それで、そのまま無視するのもおかしなものだと感じ、和音の方から声をかけた。

「……よく、会いますね」

女の子たちは、それに安心したように会釈し、そのうちの一人が、おずおずと「あの、モデルさんですか？」ときいてきた。

和音が首を振ると、女の子たちは、さらに安心したように、和音に近づいてきた。

そのあと、和音は、自分を取り囲むようにして座った女の子たちにきかれるままに——もちろん、正体については隠したままですが——、ハワイに来たいきさ

つについて話した。

「うっそー、懸賞に当選して、ハワイでウエディング？」

「超うらやましい！」

「ねえねえ、式はもうすんだの？」

「どんなドレス着るの？」

和音がモデルでもタレントでもなく、しかも、自分たちと同じ年だと知った女の子たちは、すぐに友達と

でも話すような口調になった。

和音も——同じ年代の女の子たちの中で女の子を演じつづける気苦労はあったものの——、気軽な調子で話せる相手が見つかったことで、思い煩うことから逃れられる気がした。

「五泊七日かあ。いいな。私たちなんて三泊で、明日、もう帰らなくちゃいけないんだよ」

「そりゃ、私たちなんかとちがって、ハネムーンだも

ん」

「いいなあ。彼も超かっこいいし」

女の子のひとりがそう言いながら、ビーチの方を見たことで、和音は、秀明や朱美たちが駐車場から戻ってきたことを知った。秀明は、機材のセッティングをはじめた関口を手伝ったりしている。

休憩所に近づいてきた朱美は、和音が女の子たちと話しているのに気づき、ちよつと驚いた顔をしたが、

すぐになつこりと笑った。

「和音ちゃん、準備できるまでまだ少し時間かかると  
思うから、呼ぶまで待ってて」

そう言って、また戻りかけた朱美に、女の子のひとり  
りが声をかけた。

「あの、撮影するの、見ててもいいですか？」

「ええ、いいわよ。なんだったら、一二カット、いつ  
しよに撮らない？ ハワイで知り合ったお友達ってこ

とで」

「えーっ！ 私たちも雑誌に出るんですか？」

「すごーっ！」

「私、本出たら、ぜったい買う」

朱美の思わぬ提案に、女の子たちはひとしきり盛り上がった。

そして、そのあと、撮影の準備を見ながら、話題はまた秀明のことに移った。

「ほんと、彼って、かつこいいよね」

「恵子のダーリンとは、全然ちがうもんね」

「あ、そういうこと、言う？」

「私でも、あんなカレシだったら、すぐ結婚しちゃうな」

「ねえ、大学で知り合ったんでしょ？」

女の子のひとりにそうきかれて、和音は、しかたなく正直に答えた。



「つていうか、まあ、幼なじみみたいなもの。子供の頃から、家が近所で」

「うわ、なんか少女漫画かなんかに出てきそうなパターンだよな。幼なじみの男の子と女の子が、途中で喧嘩したり、離れたりしても、けっきょく最後は結ばれましたって」

「勝手にストーリーつくんじゃないの」

「だって、そうなんでしょ」

「う、うん……まあ」

会話の成り行き上、和音はさらにしかたなく、うなづいた。

「ほらね。そのうえ、懸賞に当たって、超豪華なハワイ・ウエディングだよ。なんか、できすぎてて、アタマ来ちやうよね」

「かつこいい彼氏と超かわいい彼女のカップルだし。なんか、世の中不公平だなあ」

そんなあけすけな言われように——それに、女の子たちから「超かわいい」などと言われたこともあつて——、和音は、顔を赤らめてうつむいた。

「でもさ、私、彼氏もモデルだと思つてたから、じつはあの二人ができてるんだと思つてたんだよ」

女の子のひとりが言った。

和音が目を上げ、その女の子の目線を追うと、ビーチでは、関口が、秀明と朱美を立たせ、露出計をその

前に当てたりしている。和音の代わりに、朱美でテストしているのだろう。

秀明と朱美は、間が持てないという感じで立ちながらも、なんだか楽しそうに言葉を交わしていた。

「どうして？ あの人、若く見えるけど、彼とは年がちがうの、すぐわかるじゃない」

べつの女の子がきくと、さっきの女の子が答えた。

「だって、ハワイに来た最初の日に、ワイキキのロワ

イヤルホテルのモールで、あの二人が仲よさそうに店から出てくるところ見たんだもん」

「えっ？」

和音は、思わず声に出していた。

第一日目は、秀明はほとんど和音といっしょだった。

唯一、秀明が別行動をとったのは、和音がビーチでひとりのカットを撮っていたときだけだ。あの時、たしかに秀明は朱美と二人でいた。そして、ビーチで見か

けたのだから、この子たちも、ワイキキにいたのは、あの時間帯だろう。

でも、あの時、朱美は、「打ち合わせ」だと言っていたはずだ。なのに、なんでモールで買い物などしていたのか。

和音の心の中に、なんだかわからないもやもやした感情が起こった。

すると、言い出した女の子があわてたように言った。

「あれ、私、また、よけいなこと言っちゃった？」

和音が考え込んでしまったことで、他の女の子たちから冷たい視線を送られたのだ。

「……あ、ううん、そういうことじゃ……ないけど」

気づいた和音は、あわててそう言ったが、なんだか、女の子たちの間に気まずい雰囲気 flowed。和音は、

「新婚旅行で彼に浮気をされているかもしれない花嫁」という役まわりになってしまったようだ。

その時、そんな雰囲気を破るように、朱美が「和音ちやーん、準備できたわよー」と呼んだ。

それにしても……。

和音はまだ今の疑問にとらわれていたのだが、女の子たちの方が、会話のことなどすっかり忘れて、「あ、行かなきゃ」と、先に立ち上がった。

沖に珊瑚礁が見える海をバックに、秀明と和音の二人が並んで、撮影が始まると、関口が言った。



「どうせなら、それ脱ごうよ」

和音はしかたなく、着ていたタオル地のビーチジャケットを脱いだ。下に着ているのは、せめてストラップのあとが残らないようにと選んだ、白のストラップレスタイプのビキニだ。胴体に巻きつける形でとまっているわけだから、そのぶん、しめがきつくなくて、水着の縁が「胸」を押しつぶし、ポリウレタンを強調してしまおう。

「きや、かつわいー」

その水着を見て、まわりの女の子たちがはしやいだ。

秀明は、一日目、ワイキキで撮った時とは大きくちがいがい、和音のそんな水着にも臆することなく、関口の注文に応えて、和音の肩を抱いたりした。

女の子たちにはやされたこともあり、今日照れているのは、むしろ和音の方だった。

関口は、魚眼ふうの広角レンズを使って、湾の風景

をめいっばい入れた写真を撮っているようだった。

そのあと、朱美が約束したとおり、女の子たちも加わったカットを何枚か押さえ、ここでの撮影を終えた。

関口が機材をかたづけしている間、撮影したそのままの流れで、秀明と和音は、女の子たちに囲まれていた。

「あ、じゃあ、みんな、社員旅行なんだ」

「そう。って言うっても、お店閉めるわけにいかないから、全社員を三班に分けて、交代で来てるんだけどね」

「おかげで、旅行の前とあと、まるまる三週間、休みなしなんだよ」

「おまけに、いっしょに来てるのは、ほとんど女で、あとは店長とか管理職のオヤジばかりかし」

「メンバーの中に井上さんみたいな人が一人でもいれば、こんなふうには、オプショナルツアー抜け出して、勝手な行動とったりしないんだけどな」

秀明は、水着の女の子たちにちやほやされて、すっ

かり鼻の下を伸ばしている。

「これで、ホテル帰ると、またぶちぶち言われるんだよ」

「あー、やだやだ」

「ふーん。で、君たち、このあと、どうすんの？」

「うん。シーライフパークだっけ。そこへ行ってみよ  
うかと思ってるんだけど」

「あ、そうなの？ 俺たちも、これからそっち行くん

だよ。よかったら、いっしょに乗ってかない？ 四人なら、ちようど乗れるし」

秀明は勝手に話を決め、「ね、いいでしょ」と、朱美に掛け合ったりしている。

その場にながら会話から取り残されていた和音は、そんな秀明に、またいらだちはじめていた。

こんなところで、四人もナンパして、どうすんだよ。

このC調男……。

「そっか。みんな、ハウスマヌカンなんだ」

「そう言えばかつこいいけど、要するに、服屋のチェ  
ーン店の店員なんだけどね」

バンの中でも、秀明と女の子たちの会話はつづいて  
いた。

「なるほどな。道理でみんな、服のセンスもスタイル  
もいいと思った」

「あーっ、よく言うよ」

「こんなかわいい奥さん横に置いて、そんなこと言われても、全然リアリティないもんね」

「奥さん？ あ、そうか。でも、式は明日だからさ。

俺、まだ独身」

「あ、じゃあ、まだチャンスありってこと？」

「大あり、大あり」

「そんなら、私、狙っちゃおっかなあ」



「ハーイ。私も立候補」

狭い車内で女の子たちは、きゃーきゃーと盛り上がっている。

「いいの、和音ちゃん、こんなこと言わせといて」  
女の子の一人が、半ばからかうような調子で、和音にきいた。

和音は、横に座った秀明を横目でにらむような仕草をしたあと、かわいらしく肩をすくめてみせた。

そんなふうにしながらも、じつは内心、和音はさうとう複雑にいらだっていた。

まずは、秀明の無神経な調子のよさに対する、いつものいらだち。

そして、こんな場では、つつい雰囲気に合わせてしまふ迎合的な自分に対するいらだち。

さらに、女の子たちが、座席を越えて秀明に触れたりするとき急に感じる、自分でもわけのわからない

らだち……。。

そんなあれこれの感情が重なって、にこやかな顔をつづけながらも、和音は次第に寡黙になっていった。

シーライフパークに着いてからも、秀明は、女の子たちとはしやぎまくっていた。

大水槽で、女性ダイバーが魚の餌づけをするのを見ているときも、クジラとイルカが登場するショーを見

ているときも、いちおう和音と並んでいながらも、ずっと女の子たちと冗談を言い合っているのだ。

物語仕立てになっているそのショーのクライマックスでは、客席のすぐ近くで、全長十メートル近いクジラがジャンプした。どうやら、それも含めてショーの演出になっているらしく、そのしぶきが客席全体に降り注ぎ、観客がわいた。そのことを知らず、最前列に陣取っていた和音たちは、当然、全身びしょぬれだ。

（どうも、関口だけは、このショーを以前見たことがあるらしく、その直前にしつかりカメラを鞆の中にしまっていたが。）

頭を抱えるようにしてしぶきを避けた和音が、顔を起こすと、秀明をはさんで和音の反対側に座っていた女の子が秀明の膝に抱きついていていた。そして、秀明は、その子を守るように覆い被さっていた。

和音は、前髪からしたたり落ちる水滴にも気づかず、

その二人を呆然と見つめた。

心の中で、なにか言い知れない気持ちがあくすぶった。

けつきよく、このあとウインドワードの方までまわるという女の子たちと、シーライフパークの前で分かれ、和音たちは、さつき来た道に戻り、ココ・ヘッド・サンデイ・ビーチへと向かった。

その車内は、行きとは打って変わって、静かなもの

になった。

「なんか、あの子たちがいなくなつて、嵐が去つたあ  
とつて感じね」

助手席の朱美が言うと、運転席の関口がうなづいた。

「次は、なにするんですか？」

和音の隣で、秀明がきいた。

「うん。パラセイリングなんて、どう？」

「あ、おもしろそう。前からやってみたかったんだ」

「それが終わったら、バーベキューの用意が頼んであるのよ」

朱美の答えにも、和音は、ただ窓の外の海を眺めていた。

なんだか、両方とも気が進まなかったのだ。

ココ・ヘッドに着くと、さっそくパラセイリングのサービスステーションに行った。



そこで、秀明は張り切って、すぐに申し込みをしたが、和音は、写真を撮るからとみんなからすすめられたにもかかわらず断った。

「なに、怖がってんだよ。注意さえ守れば、ウエイクボードなんかより、ずっと安全だって言うぜ」

秀明の言葉に、和音は、今朝から外を歩く時はかぶっていた赤いつば広の帽子を両手で引き下げるようにして言った。

「べつに、怖がつてるわけじゃないけど、……焼けそ  
うだから」

そんな和音の様子を見て、朱美は、無理強いはしな  
かった。

「ま、そうね。明日までは、あんまりやんちゃしない  
方がいいかもね」

それをきいて、秀明は、「へんなの」とつぶやいた  
が、順番が来るまでの間、注意事項の説明があるとい

うことで、そちらに呼ばれていった。

関口もその場を離れ、先刻から、すでに海岸に出て、パラセーラーたちをカメラに収めている。

「和音ちゃん、ちよつとナーバスになってる？」

二人になると、朱美がそうきいてきた。

「ううん、そんなことも……ないけど」

和音はそう言っつて首を振ったが、朱美の言うとおりであることは、自分でもよくわかっていた。

「式の直前って、女はみんなそうなるみたいね」

「でも、僕は……」

「わかってるけど、でも、今日の和音ちゃん、ほんとに女の子そのものよ。明日のウエディングドレスのこ  
ととかが、頭から離れないんでしょ」

和音は、かすかに笑って、また首を振った。

今度もまた朱美の言ったことは凶星だった。だから、  
よけいに照れくさかったのだ。

ほほえんでこちらを見ている朱美となんとなく目を合わせられず、そのサービステーションの入り口から外を見ると、ビーチに沿って、芝生の公園が広がっていた。

「ちよっと、散歩してきてもいい？」

「うん。井上君が飛ぶまで、まだ三十分くらいかかるみたいだから、それまでだったらいいわよ」

朱美は、まるで姉のようにほほえんだまま、うなづ

いた。

外に出ると、和音は、芝生の上をしばらく歩いた。

芝生も、そして、それに平行する砂浜も、延々とつづいていて、しかも、ところどころにベンチがある程度で、木さえ立っていない。だから、ビーチパーク全体が、どこからもよく見えた。

はるか向こうの芝生では、スポーツカイトを楽しむ

人たちがいる。十数個の凧が、青空でくるくると回転していた。

ボディボードのメツカらしく、海岸には、ボードを持った若者がたむろしている。そして、その向こうには、水平線まで青い海がつづいている。

そんなすべてが見渡せる空間に立って、和音には自分の心の中だけがよく見えなかった。

朱美の言うように、明日、ウエディングドレスを着

て教会の祭壇の前に立つのだということが、朝からずつと気になっている。だから、すべてのことに身が入らず、また、すべてのことが気に障った。殊に、秀明の態度には、ひとつひとつ神経がいらだつのだ。

本来自分は男で、明日の「結婚式」を始め、今やっていることのすべてが、いわば芝居のようなもののはずなのに、なぜ、自分はこんなふうになってしまふのか。それがわからないだけに、よけいにいらだちはつ



のる。

昨日から感じている自分の中のなにかの存在に、そのヒントがある気はするのだが、それは、いまだ形が定まらず、よく見えてこないのだ。

ふと気がつくとき、和音は、芝生の上で遊ぶ一人の幼い女の子を見つめていた。

柔らかかそうな金髪を両サイドでふたつに束ね、ピンクのタンクトップに白いスカートのその幼女は、三歳

か四歳くらいだろうか。ところどころに咲く小さな白い花を摘んでは、芝生に並べていた。

と、突然、そのそばで軽いうなり音が響き、その女の子が並べた花の上を何かの影が横切った。

その影の動きにつられて、女の子は、空を飛んでいったものを目で追った。

それは小さなヘリコプターだった。

見ると、少し離れた場所で、男が一人、アンテナの

伸びたりモーターコントロール装置を操っていた。ラジコンヘリを飛ばしているのだ。

その男の存在に気がついたとたん、和音の心の中に、なにか、胸騒ぎに似たものが起こった。

男のまわりでは、犬が一匹、やはりヘリコプターの影を追っていた。

ところが、その犬が、いきなり海岸の方を見て、動きを止めた。そこになにかを見つけたようだ。

しばらくそちらを見つめていた犬が、いきなり走り出した。

男もそれに気づき、走って行く犬に向かって叫んだ。

「ストップ！ ストップ、ベツキー。カム・バック！」  
しかし、犬は、止まらずに走り去っていく。

男は焦ったようで、まず、リモコンを巧みに操って、その模型ヘリを着地させた。

そして、次に、リモコンを芝生の上に置くと、今度

は女の子に向かって「スーザン、ステイ・ヒア！」と  
大声で叫び、あわてて犬のあとを追いかけた。

いけない！

なぜか、和音はそう思った。悪い予感が、急速にふ  
くらんでいった。

と、その予感通り、女の子は男の置いていったリモ  
コンに興味を持ったらしく、それにとことこと近づい  
ていった。

だめだ、それにさわっちゃいけない！

和音は心の中で叫んでいた。

ところが、女の子は、平然とそのリモコンを取りあげていじりだした。

もちろん、女の子にへりを飛ばすことはできなかつたが、それなりのスイッチをいじっているのだらう。

地面の上のへりがカタカタと揺れた。

そんなことしちやだめだ！　今に、あの男が戻って

きてひどい目に遭わされる。早くそれを置いて、逃げ  
て！

和音は、すぐにでも、走って行って、女の子を抱き  
上げたい衝動に駆られた。

と、犬を捕まえたらしい男が、その犬を抱いて戻っ  
てきた。

「オー・ノー！ スー、ドント・タッチ！」

案の定、女の子がリモコンをいじっているのに気づ

いた男は、そう怒鳴って、また走って近づいた。

早く、早く逃げて！

和音は、もうその光景を見ていられなくなって、思わずうつむき、目をつむっていた。

次の瞬間には、女の子が、悲鳴を上げるにちがいないと思った。

と、しばらくして、女の子の声が聞こえた。

「ダッド、ジス・コプター・ハズ・デッド」



和音の予想に反して、その女の子の声は、おっとりしたかわいらしさで響いた。

和音が目を開き、おそるおそる顔を上げると、犬を下におろして、代わりに女の子を抱き上げた男は、彼女に頬ずりしていた。

「ドント・マインド、スー。イツツ・アライブ」

和音は、呆然として、その光景を眺めた。

女の子を抱いたまま、へりを拾い上げ、犬を従えて

去って行く男の後ろ姿を見ながら、和音は、まだ不思議なものでも見るように、ぼんやりと立っていた。

その二人のことが不思議だったのではない。自分がなぜあんなことを思ったかが、不可解だったのだ。

冷静に見ていれば、当初から二人の様子は、親子にしか見えなかつたはずだ。

それなのに、和音は、女の子がリモコンをさわったのを見て、男にひどい目に遭わされる場面をありあり

と想像していた。いや、男がラジコンを操っていたのを見た瞬間から、なぜかそんな予感を抱いてしまった。

どうして、そんな不自然な想像をしたのか？

和音自身にも、その理由がよくわからなかった。ただ、わからないだけに、なにか、自分の深い記憶にまつわる心理だという気だけはした。

そして、それは、昨日から感じているなにかと、どこかで結びついているという感覚もあった。

十分ほどのパラセイリングを、秀明は満喫したよう  
だ。

空の上からは、まるで遊園地で遊ぶ子供のように大  
きく手を振ってきたし、着水して戻ってきた後も、興  
奮して「すげーよ」を連発していた。

それに反して、和音は、いよいよ自分の中に御しき  
れない感情を抱え、沈んだ表情になっていた。

秀明が飛んでいる間に、「心配そうに彼のパラセイリングを見上げる新婦の和音さん」とでもいう写真を撮ったのだが、それは、心配していると言うより、無表情で、むしろ怒っているように見える顔だった。

パラセイリングが終わり、駐車場に戻ると、そこにケータリングサービスの会社の車が来ていた。朱美が、バーベキューの用意一式を頼んでおいたらしい。

それを受け取り、もう一度芝生のところに行って、

そこで、秀明と和音でバーベキューの用意をした。もちろん朱美も手伝ってくれたのだが、関口がその様子を写真に撮っていたので、画面に入らないようにあまり手を出さなかった。あくまでこれは、「二人だけのバーベキュー」なのだ。

自然に、秀明が装置を組み立てたり薪に火をつけたりする役目になり、和音の方は材料を切ったりする役割にまわった。

薪に火がまわり、網の上で、肉がおいしい匂いを立て始めたところで、二人でバーベキューの火をはさんで食べているところを撮影することになった。

まず、ワインで乾杯しているシーン。そして、次に関口が要求したのは、和音がフォークでとった肉を、秀明の口に入れてやっているシーンだった。

お互い、火の上に顔を出すことになり、ひどく熱い。それなのに、関口からは、「もつと寄って。笑顔で」

と何度も言われた。秀明の方は、先刻のパラセイリン  
グの興奮をまだ引きずっていて、はしやぎながら、馬  
鹿みたいな大口をあけて、顔を和音の方につきだして  
くる。

なんで、僕は、秀明にこんなことをしてやらなけれ  
ばならないんだ。

和音は、そんな気持ちになって、なかなか自然な笑  
顔がつかれず、関口からさらに何度も「ダメだし」さ



れた。

風向きの関係で、煙がすべて和音の側に流れてくることもあった。

「お前、なにやってんだよ」

秀明にそう言われて、よけいに腹が立ち、そのせいで、顔がさらにこわばった。

なかなかうまくいかないの、見るに見かねた朱美が、「そんなに大きく使うカットじゃないし、そのへ

んでいいんじゃない」と助け船を出した。

関口は、まだ不服そうだったが、それにうなづき、カメラにキャップをはめて、和音の横に腰掛けた。

「さあ、食べましょ」

朱美がそう言って秀明の隣に座ると、網の上の肉を裏返していた秀明が、和音の顔を見て、「ほら見ろ、お前のせいで、こんなに焦げちやっただじじゃないか」と言った。

そのあと、四人で乾杯のやり直しをしたのだが、和音のいらだちは、その時点ですでに臨界点に達していた。

「今日は、これで最後なんだよね」

「ええ、まだ陽は高いけど、明日のことを考えて、二人にはゆっくり休んでもらおうと思って」

「じゃあ、たっぷり飲んでもいいよね」

「関口さん、まだホテルまで帰る車の運転あるんです

からね」

「あ、なんだったら、俺、運転していきますよ。べつに、国際免許持ってなきやいけないってことでもないんでしょ」

そんな三人の会話も、和音にはいらだちを募らせるものにしか感じられない。四人で食事をしながらも、なんだか、この海と砂浜と芝生の広い空間に、ひとりで取り残されているような気がするのだ。

「明日、俺、どうすればいいのかな？　タキシードとか、着なきやいけないんでしょ」

秀明が朱美にきいた。

「うん。ブティックに予約入れてあるから、和音ちやんが美容室に行ってる間に行って、着つけてもらって」

「俺、一人で行くんですか？　照れますよ、ブライダルブティックなんて。朱美さんも、いつしよに来てくださいよ」

「甘えるんじゃないの。私は、和音ちゃんの方があ  
から」

「いいよな、和音ばかり」

秀明は、そう言っつて和音の顔を見た。

和音は、上目遣いで、それをちらつと見ただけで、  
また手に持った皿に目を落とし、べつに食べるでもな  
く、フォークの先で野菜をつついた。秀明に対する腹  
立ちを、必死に押さえていた。

「そのあと、本当なら、花嫁花婿そろって教会へ行くわけだけど、井上君、関口さんと先に行って待っていてくれる？」

「えっ、どうしてですか？」

「和音ちゃんのウエディングドレス姿、教会ではじめて見るって方が、感動的でしょ」

朱美がいたずらっぽくそう言うと、秀明は、ちよつとあきれたように答えた。

「そんな、もったいをつけるようなもんでもないでしょ」  
その言葉に、こらえていた和音の感情の糸がぷつんと切れた。なにより、あのドレスのことを、そんなふうに言われたくはなかった。

「そりゃ、僕なんて……」

思わずそう口走ってから、それでも関口の存在に気づき、和音は言い直した。

「どうせ、あたしなんて、たいしたことないわよ」



そして、そんなふうになんか女言葉を使うことで、心の中にたまっていたものが、ある意味で正直に出ることもなった。

「あたしなんかより、今日の女の子たちの方がいいんですよ。いいわよ。あたしなんてやめて、あの子たちの誰かと結婚すればいいじゃない」

「……え？」

秀明が、呆気にとられた表情で和音を見た。

「秀明なんて……。秀明なんて、けつきよく、あたしのことなんて、どうでもよかったんじゃない。自分がハワイへ来たかっただけなんですよ。だから、あたしのことを、いつもみたいに巻き込んだだけなんですよ」

「……和音ちゃん、なに言ってるの？」

朱美も、驚いたようにつぶやいた。

「朱美さんも朱美さんよ。あたしにないしよで、秀明とこそそこそどこか行ったりして。どうせ二人して、あ

たしのこと、馬鹿にして笑ってるんでしょ」

「おい、和音、なんてこと言うんだ。お前、どうかしてるぞ」

秀明が、まだ呆気にとられたまま、しかし、怒ったように言った。

「ほら、朱美さんのことだと、すぐそうやってむきになるんだから。あたしがなにを思ってるかなんて、考えてもみないくせに。秀明なんて、……秀明なんて、

大っ嫌い！」

和音は、自分が、この十何年間か、秀明に言おうとして言えなかったことを、やっと言えた気がした。と同時に、それに気がついて少し冷静になり、今、自分が口走っていることの、恥ずかしさにも気がまわった。

えっ、僕は、なにをしやべってる……？

それは、二重の意味で恥ずかしいことだった。

ひとつは、本当は男なのに、まるで女の子のように、

すねているのだということ。そして、じつは、自分が、他の女の子や朱美に対する秀明の態度に、激しいやきもちを妬いていたのだということ。特に、二番目のことは、自分でも思ってもいないことだっただけに、和音は愕然とした。

和音が動揺して目を泳がせると、他の三人は、まだ呆然と和音を見つめていた。

和音は、今言ったことのすべてをなんとか取り消し

て、この場を取り繕えないかと思った。しかし、いったん口から出てしまったものを、もとに戻すすべはなかった。

それに、秀明に対するわけのわからない怒りの感情は、まだつづいていた。

自分から、手のひらを返したようにわびることなどできそうもなかった。

それで――

「あたし、帰る」

和音は、その場を立ち上がっていた。

さらに驚いたように見ているみんなの視線が痛くて、くるりと後ろを向いた和音は、そのまま歩き出した。

「おい、待てよ」

秀明が言った。

その声に反応するように、和音は走り出していた。

背後で海岸に打ち寄せる波の音だけが、和音の耳に届いていた。

今朝、夢の中で聞いた波音は、これだったんだと、走りながら和音は思った。



*Hawaiian Harmonic Honeymoon*

第7楽章 夕映えの航跡

途中からサンダルを脱いで走ったせいで、足の裏が痛かった。

芝生の上はまだしも、道路に出てからは、アスファ

ルトの上に積もったさんごの砂粒が、足の皮膚にめりこんで来る感じだ。

和音は振り向いて、まだ誰も追ってこないのを確かめると、ふたたびサンダルを履いた。

すぐにタクシーを拾おうと思い、そこに立ち止まったらまま道路の一方を見ていたが、車は何台も通るのにタクシーの姿はない。たまに通っても、みんな観光地帰りの客を乗せている。

早くしないと、秀明が追ってきそうな気がした。

もちろん、ここは日本ではないのだから、これからどこかに行くあてがあるわけでもない。けつきよくはホテルに戻るしかないのだろう。でも、あんな取り乱し方をしたあとで、すぐに、みんなのもとへ連れ戻されたくはなかった。和音は、とにかく早くこの場を離れたいと思っていた。

ところが、いくら待っても、タクシーは来ない。し

かたなく、少し離れたバス停まで歩くことにした。

と、道をワイキキの方に向かって少し歩いたところで、和音の横に、バンが追いつき、停まった。

「さあ、乗って」

運転席の関口が、助手席のドアを開け、言った。

見ると、関口しか乗っていない。

和音は迷ったが、関口がそのまま待っているのので、無視するのはもっと大人げないことになる気がして、

乗り込んだ。

「みんな心配してるよ」

関口は車を路肩に停めたまま、そう言った。

「あの、秀明と朱美さんは？」

「バーベキュー、あのままほっとくわけにいかないだろ。一時間後にケータリングが取りに来るらしいし」

それにしても、なんで関口さんが来るんだろう……。さつきまでは、秀明に追ってこられるのがいやだと

思っていたのに、秀明でなく関口が迎えに来たということに、和音の心は、また少しねじれた。

あいつは、いつだって、面倒なことからは逃げるんだ……。

すると、和音のそんな思いが伝わったように、関口が言った。

「荻原女史がさ、『もし和音ちゃんが、戻りたくないようなら、そのままホテルまで送ってって』ってさ。

それで、俺が来た」

先刻から和音がいらだっているのを気にしていた朱美が、和音の気持ちを探し、気を使ってくれたのだ。

そんな朱美に対してさえ、さつき、和音は非難するようなことを口にしてしまった。和音は、いよいよ、のこのこ戻って朱美たちと顔を合わせにくくなってしまったと思った。

「どうする？」



ハンドルに肘をかけるようにしてきいた関口に対して、和音は、膝の上のバッグを握りしめて、うつむいたまま答えた。

「……すみません。じゃ、ホテルへ」

「ああ」

関口は短くそう言って、ブレーキペダルから足を離した。

車が走り出してしばらく、関口は無言で運転をつづ

けた。

和音は、うつむいたまま、またどんどん精神的に落ち込んでいった。

朱美も関口も、こんなに気を使ってくれているのに、それにも気づかず、自分は、あんな子供のようなすね方をしたのだ。ふだんの自分からは、考えられないことだった。

どうしてこんなふうになってしまったのか……。

和音は、そもそも、自分が、こんな無茶な旅行に、ずるずると巻き込まれてしまったこと自体がまちがいだったのだと思った。

と、道が一般の州道からフリーウェイに変わったあたりで、関口が口を開いた。

「たしかにな。今日の彼はひどかったからな」

その言葉の意味がすぐにはわからず、和音は、関口を見やった。

「あんなうるさい娘どもと騒ぎまくって。俺だって、二日酔いで頭ががんがんにしてたから、キレそうだった」  
秀明のことを言っているのだ。

関口は、ちらりと和音の反応を見るようにしたあと、さらにつづけた。

「あれじゃあ、和音ちゃんが頭に来る気持ちもわかるよ。はたから見てたって、井上君、ほんとに和音ちゃんみたいなのが好きなのかどうか、ちよつと疑わしく

なつてきたからな」

和音は、関口の言葉にかすかにうなづいた。

そして、そのあとで、その表現にどこか違和感を感じた。

和音ちゃん：：：みたいな子：：：？ どういう意味だ

：：：？

しかし、そこで、関口が話を変えたので、それ以上、考えを進められなかった。

「でもさ、和音ちゃん、彼らがホテルへ戻って来るまでに、気分かえとかなきやな」

和音は、今度はさつきより少し大きくなつた。

いつまでもすねているわけにいかないことは、たしかだった。

「どう、気分転換にもなると思うから、写真でも撮らない？　雑誌用のじゃなくてさ。和音ちゃんが最高にきれいに見えるようなやつ。俺も、和音ちゃんをもつ

ときちんと撮ってみたいんだ。この前、ビーチでは、  
荻原女史に中途半端なところでとめられちゃったから  
な」

「でも……」

和音が言いかけると、さらに関口がつづけた。

「だいじよぶ。焼けるのがいやだったら、部屋で撮れ  
ばいい。和音ちゃんたちの部屋なら、ずいぶん広いん  
だろ」

「ほお、やっぱ、すげえなあ」

部屋に入るなり、関口はそう言った。室内で撮影するということ、ストロボなどの機材を、車からたくさん降ろして持ってきている。

その荷物を、いったん入口あたりに置いた関口は、入ってきたドアの鍵を内側からかけた。外国のホテルではそれがふつうだとはいえ、関口のその行為に、和



音はどこか不安を感じた。撮影のことを言い出した時から、なにか、やり方がひどく強引な気がする。

和音のその表情に気づいたのだろう。関口が言った。「部屋で水着の写真撮ってるよ、誰かに見られたりするの、いやだろ」

「えっ、水着……なんですか？」

和音がきくと、関口はあわてて答えた。

「いちおう、この前のつづきのつもりだったからさ。」

和音ちゃんがいやなら、べつに水着じゃなくていいけど」

「あの、秀明が帰って来るといけないから、やっぱり、そこ開けておいでください」

和音は、水着かどうかには触れず、そう言った。

「ああ、和音ちゃんが、その方がいいって言うなら、そうするよ」

関口は、べつに大した問題ではないとでもいうよう

に言っつて、ドアの鍵をもとに戻した。

「しかし、ほんとに広いなあ。俺の部屋とは大違いだ。景色もいいし。どこで撮ろうか？」

関口はそう言いながら、部屋のあちこちを見てまわり、反対側の壁まで歩いた。

「ん？　ここ、ベッドルーム？」

和音が答える前に、関口は、そのドアを開けていた。

そして――

「あ、ここ、すごくゴージャスない感じじゃない。こっちで撮ろうよ」

と、一人で決め、入口のドアのところまで戻って、機材を運びはじめた。

そんな関口を見ながら、和音は迷っていた。

あんなふうにながまな行動をとった和音を、わざとわざと車で送ってくれたのだ。それで、断りにくくて部屋まで入れてしまったが、なんだか様子がおかしい。

先刻からの関口の強引さには、ちよつと異常なものも感じるのだ。もしかすると、なにか「下心」があるのかももしれない。

和音は、そう感じた。

しかし一方で、関口はゲイで、女には興味がないのだとも聞かされている。

言葉どおり、和音への親切心と、フオートグラフィアーとしての興味からこうしているのだとしたら、そんな

ふうに思うのは申し訳ない。

「あの、水着じゃなくてもいいですよね」

関口のあとを追って、ベッドルームに入りながら、和音は言った。

「だから、べつに、俺はかまわないよ」

関口はまた、なにも気にしていないという調子で言った。

「それから、撮る前に、シャワー浴びてメイクも直し

たいんですけど」

さつき、裸足で走ったりしたせいで、体中が汚れている気がした。写真を撮るなら、やはりきれいにしておきたい。

「うん、そうしてよ。その間に準備しちゃうから」

関口は今度も軽い口調でそう言って、ストロボのスタンドを組み立てはじめている。

それで和音は、クローゼットから着替え用の服を出

し、バスルームに入った。

着ている服を脱ぎ、バスタブの中に立った和音は、一日目と同じように、フォームを着けたままシャワーを使った。

体を洗いながら冷静に考え、和音はまた、ちよつと不安になった。

だいたい、「妻」しかいない「新婚夫婦」の部屋に、男が一人で入るといふのは、ふつうには考えられない



ことだろう。それに、あれだけ広くて景色のいいリビングがあるのに、わざわざベッドルームを選ぶのも不自然だ。やはり、ちよつと警戒した方がいいのかもしれない……。

そんなふうに思いながら、シャワーをとめるためにコックをひねった瞬間だった。

突然、バスルーム全体を、閃光がおおった。

ストロボだった。

「えっ！」

驚いて振り向くと、バスと洗面所を分けるついたてのところ、カメラを構えた関口が立っていた。

とっさに、和音は、胸を両手で押さえ、バスタブの中にうずくまった。

「な、なにするんですか！」

「ふふ、それって、着けたまま、シャワーも浴びれるんだ」

「えっ？」

和音がさらに驚いて見つめると、関口は、カメラを顔の前に構えたまま、ゆっくりと近づいてきた。

「しかし、よくできてるよな。俺も、すっかりだまされるところだった。君も、男には見えないほど、かわいいいな。いや、そうじゃないな。ほんとの女には、和音ちゃんみたいにかわいい子はいないよ。ぶよぶよした顔と体を、化粧とかでごまかしてるようなやつばっ

かりだ」

言葉の節目ごとに、関口は、カメラのシャッターを押した。そのたびに、ストロボが光り、うずくまった和音は、その光に射られるように感じた。

「や、やめてください」

「ふふ、心配することはないよ。部屋全体の鍵は開いたままだが、バスルームの鍵は、今入ってくるときに閉めた。だから、誰にも見られたりしないよ」

関口の声は、さっきまでの軽い感じではなく、重くくぐもってバスルームに響いた。尋常ではない、暗い情念のようなものを感じる声だ。

「最初に成田で会った時から、なんかおかしいとは感じてたんだ。俺は、女の子の写真もいっぱい撮ってきたが、女には、被写体としての興味は持てても、興奮はしない。ところが和音ちゃんとは、最初に握手した瞬間から、体になにかが走った気がした」

すでにバスタブのすぐそばまで来ている関口は、上体を曲げ、和音のすぐ近くでカメラを構え、その体をなめるように撮りつづけた。和音は、ただうずくまつたままふるえていた。

いくら関口が大柄だと言っても、和音は本来男で、関口より若い。警戒もしていたのだから、ここまで近づかれる前に逃げられないわけではなかった。それなのに、こんなふうに追いつめられてしまったのは、予

想外に、「裸」の瞬間を襲われたことと、そして、関口がカメラを構えていたせいだ。そのカメラのシャッター音とストロボの光が、和音を金縛りにしてしまような武器になっていた。

「でも、ハワイに着いてからも、俺は、自分が考えていることが信じられなかったよ。俺は、なんておかしな妄想を抱くのか、ついに酒が脳にまわったかかってな。なにせ、和音ちゃんは、どう見ても、女にしか見えな

かったからな。だけど、そのあと、ビーチで写真を撮ってたとき、へんだぞと思った。和音ちゃんの肌が焼けて、だんだん赤くなってくるのに、よく見ると、おかしな位置に水着のあとが残る。本当の水着の線より、ずっと上に、焼けていない線ができたんだ。それで、やっと気がついたんだ。これは、よくできてるが、本当の胸じゃないって。そのあと、和音ちゃんもそれに気がついたんだろ。二日目からは、やけに日に焼ける



のをいやがってたからな」

ちよつとした誤解はしているが、関口は本質的な部分では見抜いていた。

と、そこで、フィルムが最後の一枚まで終わったらしく、カメラのオートワインダーがフィルムの巻き上げをはじめた。

すると、関口は、躊躇することなく、そのカメラをバスルームの床に投げ捨てた。和音に顔を近づけて笑

ったその目は、先刻までとちがって、完全にイッてしまっている。

「さあ、和音ちゃん、こんな気持ち悪いものはさっさととって、君のほんとの裸を見せてくれよ」

そう言うと、関口は、その手を伸ばし、和音の「乳房」をつかんできた。

「やめて」

和音が、膝を抱くようにしてガードすると、関口は

もう一方の手を肩に掛け、自らもバスタブの中に崩れ落ちてくるようにして、和音を押し倒そうとした。

和音は、その瞬間、今、自分の体を傷つれられたくないと思った。特に肩や腕に傷を残したくない。そんなことになれば、あのドレスが着られなくなる……。。

それが反抗する力を弱めることになった。和音は、バスタブの中で、仰向けにされ、その上から覆い被さった関口に体全体で押さえつけられるような形になっ

た。もはや、逃れるすべはなかった。

関口の息や体から発散する酒のにおいが、バスタブの中に立ちこめた。

まだバスタブの中にシャワーの湯が残っていたせいで、関口の着ているTシャツとジーンズもびしょぬれになっている。それが、和音の体に張りついた。

——助けて……

和音は、叫ぼうと思ったが、声も出ない。関口が、

片手でその口をふさいだからだ。

「おとなしく言うことをきけば、俺は、乱暴はしない。和音ちゃんのこと、思い切り、かわいがってやるよ」  
関口は、そう言って、和音の上に完全にのしかかり、唇を首筋にはわせてきた。

関口のあごをおおう剛毛が、和音の肌にこすりつけられた。

——助けて……、助けて……秀明。

いつしか和音は、心の中で、秀明に助けを求めている。

「和音ちゃんが、いくら彼のことを好きでも、俺の見るところ、やつはノーマルだ。和音ちゃんみたいな子より、ほんとの女の方がいってタイプだよ。そんなやつより、俺のが、和音ちゃんのことを、ずっと悦ばせてやれるぜ」

——助けて、秀明。早く来て。秀明……秀明は、こ

んな時、いつも……いつだって、僕のこと、助けてくれたじゃない。早く……秀明……。

和音は、そう念じていた。そして、一方で、そんなふうにも思っている自分自身に驚いた。

いつも……？

と、関口が、口を押さえていた手をずらし、下顎全体に力を込めて、和音の口を開かせた。そして、自分の口を、そこに寄せてきた。

「……秀明」

和音が関口の口を必死によけ、かろうじてそう言った瞬間だった。

関口の体が、ふっと浮き上がった。

そして次の瞬間には、骨と骨がぶつかるような「ぐきつ」という音がして、関口の体がバスタブの縁を越え、のけぞって飛んだ。

「だいじよぶか？」



和音の真上から、秀明がのぞき込んだ。

「……秀明！」

どうやら、秀明が、関口の襟首をつかんで持ち上げ、そのまま殴り飛ばしたようだ。

「な、なんでだ……？」

バスタブの奥の大理石の上に殴りとばされた関口が、言った。

バスルームのドアに鍵をかけてきたつもりなのに、

どうして秀明が入ってきたのかが不思議だったのだろう。おそらく、興奮していた関口は、リビング側のドアに気づいていなかったのだ。

「あんた、なんて馬鹿なことしてるんだ。酒好きのあんたが、飲むのもあきらめて、すぐに朱美さんの言うことをきいたから、なんだか悪い予感がして追いかけてきたんだ。でも、まさか、ほんとにこんなことになってるなんて……」

秀明がそこまで言った時、関口は、バスタブにかか  
ったままで、宙に浮いていたトレッキングシューズの  
足を、秀明の顔めがけて蹴上げた。

「くそっ！」

その足は、秀明の頬をかすめたが、危うく、秀明は  
身をよけて、逆に、その足をつかんで強くひねり、関  
口を一段低くなった床の上に落とした。

「……うっ」

床から関口のうめき声が聞こえた。

まだバスタブの底に横たわったままだった和音が、身を起こして見ると、体をしたたか打ったらしい関口は、痛そうにひじをついて秀明を見上げていた。

そうとうダメージを受けているように見えるが、それでも関口は、鼻で笑うようにして言った。

「ふん、お宅に冷たくされて、和音ちゃんがさみしそうだったから、慰めてやろうと思っただけじゃないか」

「馬鹿野郎！」

秀明は一瞬、足を引き、さらに関口の顔を蹴上げる体勢をとった。しかし、すぐに思いとどまったらしく、ため息をついた。

「まったく、いい大人が、どういうつもりだよ？」

「それは、こっちのせりふだろ」

関口は、びしよぬれで、顔が腫れ上がったみっともない姿をさらしながらも、まだ居直ったような笑いを

浮かべている。

「なにが言いたいんだ？」

秀明が聞くと、関口が言った。

「お宅だって、大学生なんだから、いい大人だろ。それが、こんな馬鹿なことをやってるじゃないか。あんた、俺を警察にでも突き出すつもりか。そんなことしたら、困るのは、あんたたちの方じゃないのか。どうやら、萩原女史は知ってるようだが、和音ちゃんのこ

とは、スポンサーとかには秘密なんだから。俺が、警察で証言したっていいんだぜ。やつらは、サギですって。その上、俺がそれを確かめようとしたら、ひどい暴行を受けましたってな」

関口の言葉に、秀明は、ちよつとたじろいだように見えた。

関口は、まるで勝ち誇ったような表情で、体を起こした。

と、腕組みしていた秀明がまた言った。

「あんたも、思ったより頭悪いな。俺が警察に言うとしたら、こんなかつこわるいレイプ未遂事件のことじやないさ。あんたが、カメラバッグの中に隠してる秘密のことだ」

「えっ」

一瞬、関口は、虚をつかれたような顔で動きを止めた。



「マリファナなのか、LSDなのか知らないが、あんなにたがゆうべ、あのディスコで大枚はたいて買ったものことさ。ほんとは、こんな仕事馬鹿にしてるあんたが、ほいほいやって来たのは、じつはそれが目的だったんだろ。今すぐ警察に言わないまでも、あんたがまた変な気を起こすようなら、帰りのホノルル空港か成田で、ひと騒ぎしたっていい」

それからしばらくの間、二人のにらみ合いがつづい

た。

そして、けつきよくは、関口が目をそらし、立ち上がりがりながら言った。

「わかった。このことは、すべてなかったことにしよう。荻原女史にも黙っててくれ。俺も明日は、酒抜きでまじめに結婚式のカメラマンに徹するよ」

「ま、いいだろ。じゃ、さっさと出てってくれ。ここは、俺たちのハネムーンの部屋なんだからな」

秀明の言葉に、最後は力無く笑い、関口はバスルームを出ていった。

と、秀明は、無言で、バスタブの中の和音に手をさしのべた。

その手につかまり、立ち上がった和音は、自然に、秀明のTシャツの胸板におでこを着けるようにしてもたれかかった。

「まったく、馬鹿だなあ」

「裸」の和音にもたれかかれ、秀明は、ちよつと堅くなつたように突つ立つたまま、そう言った。

この前と同じで、和音は、その言葉に馬鹿にされたような感じは抱かなかつたが、できるなら、抱きしめてほしいと感じていた。

そのあと、和音は、もう一度ていねいにシャワーを浴びた。関口の酒臭い体臭や、首筋のあたりについた

はずの唾液を、きれいに洗い落としたかったのだ。

体を拭いたあと、着たのは、一日目にアラモアナで借りたもう一着のムームーだった。赤い地に小さな白い花の散ったそのムームーは、肩を出し、細いストラップでつつたデザインだったが、部屋着にはちょうどいいと思い、ブラジャーもしないで着ることにした。

ベッドルームに出ていくと、秀明が、ベッドに腰掛けていた。

「なあ、ドライブでも、行かないか？」

和音の顔を見ると、秀明は、突然そう言った。

「えっ？」

「関口さん、よっぽどあわてて出てっいたらしくて、これ、忘れてったみたいなんだ」

秀明はそう言って、レンタカーのキーを目の前でぶらぶらさせてみせた。

こんなムームーをノーブラで着てしまったし、外は

まだ夕陽がきつそうで、肩が焼けるかもしれないと思  
ったが、あんなことのアと、二人で部屋にいるのも気  
づまりな気がして、和音は「うん」とうなづいた。

バンに乗り込むと、秀明は、ラジオから流れるハワ  
イアンに合わせて、鼻歌を歌いながら運転した。車は、  
今日行ったのとは反対方向に向かっていた。アラモア  
ナを越えたところを見ると、どうやらパールハーバー

の方に行くらしい。

助手席の和音は、さつきから、秀明にききたいと思うことがふたつあった。それで、まず、あまり重要ではないと思える方からきいた。

「関口さんが麻薬持つてること、どうして知ってた？」  
「知らなかったよ、そんなこと」

「えっ？」

「あてずっぽさ。そうじゃないかと思っただけ。どう



も、いつもの酔っぱらい方が、酒だけじゃないなって気がして。車はちゃんと運転するしき。マリファナつて、そういう知覚は、わりとしっかりしてるもんらしいから」

「でも、それだけで？」

「それに、ゆうべ、ディスコで変な動きしたじゃん。カメラバッグ持ったまま、トイレに立ったりして」

それだけの状況証拠で、あんなに確信がありそうなの

もの言いができるなんて、こいつは、やっぱり、ほん  
とに調子のいいやつだと、和音は思った。

そして、もうひとつの、心に引っかかっていること  
をきいた。

「ところでさ、さっきみたいに秀明に助けてもらおうの  
って、僕、はじめてじゃないよね」

関口に組み敷かれながら、先刻、自分が心の中で感  
じていたことを確かめたかったのだ。

「ん？：：まあ、な」

「小さい頃、僕は、ずいぶん秀明に助けてもらったよね」

「ああ：：お前、いじめられっ子だったからな」

そうだ、僕は、小さい頃から人より体が小さくて、その上泣き虫で、だから、ずいぶん他の子からいじめられた。そして、そのたびに、いつも秀明が助けてくれたんだ。

和音は、そのことを、明確に思い出していた。

そして、よく考えてみると、だからこそ和音は、幼い頃から体が大きくなっていつも和音のことをかばってくれる秀明のそばにくっついていたのだ。

和音は、秀明に無理矢理誘われてしかたなくいっしょにいたように思っていたが、そうではない。少なくとも最初の頃は、和音の側から、すすんで秀明のそばにいた。それが、弱い和音が身を守るすべだったのだ。

そう言えば、僕は、秀明自身からいじめられた覚えは一度もない……。

和音は、そのことに気づき、あらためて愕然とした。たしかに、いたずらばかりしていた秀明といっしょにいたせいで、ひどい目にあったことはある。でも、秀明自身から意地悪されたり、直接危害を加えられたりしたことは一度だってなかったのだ。

そして、もつとうがった見方をすれば、あの頃、秀

明が、いたずらや、悪ふざけの過ぎる遊びに和音を巻き込んだのは、引っ込み思案で消極的な和音を、なんとか他の友達の中にとけ込ませるためだったと考えることもできた。いや、あれは、たしかにそうだ。そのおかげで、小学校の高学年になる頃には、いじめられることもあまりなくなつたのだ。

和音は、今、それを確信した。

でも、だとすると、僕は、どうしてそのことをすつ

かり忘れていたのか……？

和音の中で、次には、そんな疑問が湧きだしてきた。

それは、和音自身の問題だったから、秀明にきいても答えは出ないだろう。

和音がそんなことを考えている時、秀明は、車をあ  
るヨットハーバーの近くに停めた。

「おい、見てみるよ。すごいぜ」

秀明に言われ、和音が窓の外を見ると、そこに、海

に突きだして、一本の栈橋がまっすぐ伸びていた。そして、その向こうに、落ちかかる太陽を受け、金色に輝く海があつた。

「きれい」

和音が言うと、秀明が「降りてみようぜ」とドアを開けた。

そこは、ヨットハーバーと言っても、一日目にホテ



ルに行く途中で見たアラワイ・ヨットハーバーのよう  
な大規模なものとはちがいで、せいぜい十隻ほどのヨツ  
トと、釣り船らしいモーターボートが泊められている  
だけの小さな波止場だった。クルーザーなども見あた  
らない。

秀明と並んでその木製の栈橋を歩くと、かすかな海  
の風がムームーの裾を揺すった。

夕陽とはいえ、太陽の光線はまだ強く、それが和音

の裸の肩や腕にも当たっていたが、もう、和音はそんなことを気にしていなかった。

どうして、秀明に助けられ、守られていたということを、僕は忘れていたのか？　そして、それなのに、どうして、秀明のことを、内心、あんなに嫌うようになったのか……？

海を見ながら、和音は、それをずっと考えつづけていた。

と、秀明が、大きく伸びをした。

「うっわー、気持ちいいなあ」

それを見上げ、和音は、またちがった疑問を持った。秀明が、あんなふうに、いじめられている僕のことを助けてくれるようになったのは、いったいいつからなのだろうか？

小学校に入学する頃には、もうそういう関係ができていたと思う。入学式の時の写真を思い出しても、た

しか和音は、秀明の後ろに隠れるようにして写って  
いたはずだ。

たぶん、それよりもっと前に、そういう関係が  
できあがったのだ。

幼稚園のころか、それとも、もっと前か……。

和音はそう思いながら、いつの間にか、秀明の顔に  
見入っていた。

彫りの深いその顔が、金色の夕陽を浴びていた。そ

れは、和音がこれまでイメージとして持っていたへらへらしたいい加減な男ではなく、たくましく頼りがいのある男の顔だった。

「ん？」

秀明がそんな和音の視線に気づいたらしく、見下ろしてきた。

和音は、どぎまぎとし、あわてて視線を逸らせ、足もとの海を見つめた。そこでも、金色の細かい光の粒

が、さまざまに交差しながらきらめいていた。

と、その時突然、二人を呼ぶ声が、意外な近さで聞こえた。

「ヘイ！ カズネ、ヒデアキ」

声の方を振り向くと、その栈橋の付け根近くにもやっつてあるヨットのデッキに立って、黄色っぽいアロハシャツを着た太った男が、両手を振っていた。

「あ、ミスター・コバヤシ」

秀明が言った。

観光協会のチエアマン、ロバート・コバヤシだった。

「ヘイ！ カム・ヒア」

秀明と和音は、顔を見合わせてから、棧橋の上を小走りに、そのヨットのそばまで近づいた

「ナイス・トウ・ミーチュー・アゲイン、ミスター・コバヤシ」

近づきながら和音が言うと、コバヤシは、「私も、

こんなところで、二人に会えると、思いませんでした」と日本語で答えた。

「あした、ウエディングね。私も、時間、都合つけば行きます。ウエディングドレス着たカズネ、ぜひ見たいからね」

「サンキュー、ぜひ来てください」

秀明はそう言ったあと、「これは、ミスター・コバヤシのヨットなんですか？」ときいた。



「イエース、私のセイルボートです」

コバヤシはうれしそうにそう言い、こうつぶけた。

「毎日、ビジネスしてると、時々、海に出たくなりま  
す。私、もと、ネイビーだからね。今日も、これから  
船出そうと思ったところ。もしよかったら、二人、い  
つしよにセイリングしませんか？」

「えっ、いいんですか？」

「オフ・コース。二人を、ハワイのすばらしいサンセ

ツト・セイリングに招待します」

和音と秀明は、ふたたび顔を見合わせたあと、コバヤシに向かつて、同時に「サンキュー」と言った。

コバヤシは、にっこりと笑って、ヨットから栈橋へ鉄製のステップをかけた。

秀明が、まず、そのステップを渡って、船内に降りた。それにつづいて、和音が、ステップに足をかけた。揺れるのと、高いサンダルのせいでこわごわ渡ってい

ると、秀明がすつと手をさしのべた。

手を取って降ろしてくれるものだと思い、和音が、その手を握ろうとすると、秀明は、いきなり両手で和音のウエストをつかみ、抱き上げるようにした。

「きや」

和音の目に映る風景が、百八十度、ぐるりと回転して、気がつくくと和音は、ヨットのデッキに立っていた。

「ベリー・ナイス」

コバヤシはそう言って、秀明に親指を立てて笑って  
みせ、ステップを船内に戻した。

船内に立った和音は、まだ呆然としていた。

思わぬやり方で、秀明に船内へと降ろされたことも  
あったが、それだけではなく、その風景がぐるりとま  
わった瞬間、なにかを思いだした気がしたのだ。

まず、目に浮かんだのは、ヘリコプターだった。今  
日、昼間、ココ・ヘッドで見た、あのラジコンヘリだ。

ヘリコプターがなにか、僕の記憶に関係あるんだろうか……？

いや、ちがう……ヘリの方じゃない。あのリモコンだ。

……そうだ、ラジコンだ。

あれはたぶん、幼稚園に入る直前だと思うから、四歳の時か……？

あの日のラジコンから、僕と秀明の関係は始まった

んだ。

和音の頭の中に、幼い日の記憶が、像を結んだ。

その日、和音と秀明は、近所の児童公園の砂場で遊んでいた。近くにはどちらの親もいなかったと思うから、たぶん、何かの用事でその場を離れたか、それとも、そもそも二人で誘い合って遊びに来たかのどちらかだろう。

その時、公園には、他に三人か四人の子供がいた。和音たちより、ずっと年上の——といつても小学校の低学年だったと思う——男の子たちだ。その子たちは、グランドで、ラジコンカーを走らせていた。

和音は、なぜか、そのラジコンカーに心ひかれた。グランドを速いスピードで、くるくると方向を変えて走るその自動車は、どうやら、あの子たちの持つ機械で操られているようだ。和音には、それが不思議だっ

たのだ。

砂で遊ぶ手をとめ、和音がそちらを見ているのに気づいたのだろう。和音の横で、秀明が言った。

「かずねちゃん、僕もこの前のお誕生日に、おばあちゃんにああいうの買ってもらったよ」

その言葉に、秀明の方を見た和音の顔が、よほどうらやましそうだったのにちがいない。秀明は、すぐ「見せてあげようか」と言った。



「うん、見せて」

和音が言うのと、秀明は、「ちよつと待っててね」と言つて、家の方に走つていった。

一人になつて、ちよつと不安な思いで和音がそれを見送つていると、今度は、どこから現れたのか、公園の中をやせた野良犬が横切つて行つた。

小学生の一人が、それに気づき、地面の石をとつて、その犬に投げつけた。

犬は、キャインと鳴いて飛びすさったが、腹でも減っていたのだらう。足取りがふらふらとして、飛んだ勢いで転んでしまった。

小学生たちは、それを見て笑った。犬は恨みがましそうな目で小学生たちを見ていた。

と、さつきとは別の小学生が石をつかんで、投げた。それにつられたように、他の小学生たちも、石を投げ出した。

次々に飛んでくる石つぶてに、犬はおびえ、その場を逃げ出した。

小学生たちは、持っていたラジコンをその場に放り出し、歓声を上げて犬のあとを追いかけた。

犬とともに、小学生たちは道路に出て行ってしまい、和音ひとりが、公園の中に残っていた。

グランドには、ラジコンと自動車が放り出されたままになっている。

和音は、どうしてもそのラジコンをいじってみたく  
なつて、そのうちの一台に近づいて行つて、手に取つ  
た。

その機械には、ボタンがふたつと、そして、真ん中  
にレバーがひとつついていた。

和音は、どうしたらいいかよくわからなかったが、  
とりあえず、そのレバーを親指で倒してみた。

と、グラウンドにあつた自動車の一台が、思つてもい

ない速さで走り出した。

和音は、驚いて、ラジコンのレバーを倒したまま  
それを見ていた。

すると、自動車はただただまっすぐ走り、グラウンド  
を取り巻く金網に激突した。

車体がちよつと空を飛んで、落ちた。

「あーっ！」

公園の入口あたりで、大きな声がした。

その時、ちょうど、犬を追って行った小学生たちが戻ってきたのだ。

「なにやってるんだ、ちび」

小学生たちは、和音に向かって、走り寄った。

車がぶつかったこと、そして、小学生たちの剣幕に驚き、やっと自分はいけないことをしたのだと気がついた和音は、ラジコンを握りしめたまま、その場に立ちすくんでいた。

和音の前まで来ると、そのラジコンの持ち主らしい小学生が、すぐさま、ひったくるようにそれを取り上げ、和音の肩を突き飛ばした。

「勝手になににするんだよお」

和音は、そのまま仰向けに倒れ、頭を打った。いつもだったら、大声で泣き出すところだが、小学生たちが、自分を取り囲むようにまわりに寄ってきたので、ひくひく言うだけで、声も涙も出なかった。

小学生たちには、さつき犬をいじめた高ぶりもあつたのだろう。いかにも残酷そうな目つきで、和音を見下ろしていた。

と、小学生の一人が言った。

「知ってるか、こいつ、和音っていうんだぞ。この前、そう呼ばれてるの、聞いたんだ」

「女みたいな名前だな」

「顔も女みたいだし」



「ほんとは女なんじゃないのか、こいつ」

「チンポコついてるかどうか、調べてやろうか」

和音は、さっきの犬と同じように、おびえた目で小学生たちを見たのにちがいない。

小学生たちが、いつせいに和音に襲いかかった。

地面に強い力で押さえつけられ、無理矢理、半ズボンを引きさげられた。

「ひでちゃん、ひでちゃん」

和音は、かすれた声で秀明の名を呼びながら泣いていた。

体が痛いとかいうより先に、小学生たちが怖かった。

「ひでちゃん、ひでちゃん」

その時、誰かが走ってくる足音が聞こえた。

見ると、秀明が、必死に駆けてきていた。

秀明は、そのままの勢いで、和音のズボンを引き下げた小学生に体当たりした。

しかし、小学生と四歳児では、体格の差がありすぎた。体当たりされた小学生は、一瞬よろめいたが、すぐ、秀明の服をつかみ、力任せに投げつけた。

「なにすんだよ、こいつ」

秀明は、頭から地面に落下し、そこで、うずくまつた。

秀明がそのまま動かないので、小学生たちも、呆然として、そちらを見ていた。

そのせいで、和音を押さえつけている手の力も弱まった。

と、秀明が、やっと顔を上げた。

その顔を見て、小学生たちは、自然に後ずさった。

額が割れ、顔中が血だらけになっていたのだ。

秀明が立ち上がり、幼いなりに怒りの形相で一步踏み出すと、小学生たちは、あわててラジコンと自動車を拾い、そのまま、公園から逃げ去った。今思えば、

彼らもまた、自分たちのやったことの結果が怖かったにちがいない。

秀明がそばまで来ると、和音は秀明に抱きつき、大声で泣いた。

けがをしているのは、秀明の方なのに……。

「なに考えてるんだ？」

海も空も真っ赤に染まる中に、一直線につづくスク

リユーの白い航跡を見ながら、デッキの手すりにもたれかかった秀明がきいた。

「うん：：」

和音はそう言っただけで、それには答えず、べつのことを口にした。

「秀明、おでこを見せて」

「えっ？　なんだよ」

「いいから、ちよつと見せてよ」

和音の言葉に、秀明は、どこか苦笑いでもするように、片手で前髪を持ち上げた。

「……その傷、きつと、何針か縫ったんだよね」

「ああ、俺はよく覚えてないけど、今でも残ってることをみると、たぶんな」

そんな傷のことなど、最近ではすっかり意識にのぼっていないかったが、それでも、秀明の額にそれがあることを、和音は確かに知っていた。

なんで、あんなことがあったのに、それに、今でも秀明の額に傷まで残っているのに、それをすっかり忘れていたんだらう？

しかも、いったん思い出してみれば、かなり細部まで、その出来事は記憶に残っているのだ。それだけ、和音にとっても、印象強いことだったにちがいない。

それなのに、それがまるまる認識から抜け落ちていたということとは……自分で、意識的に記憶の中から排



除したとしか思えない。

そう、僕はたぶん、あのことを忘れたがっていた。

和音はそう感じた。

おそらく小学校の間は、そして、中学校になってからも、和音はあの時のことをしつかり覚えていたのだと思う。でも、中学に入る前後からは、それを忘れたいと願った。

そして、それは、秀明のことを、内心、嫌いはじめ

た時期と一致していた。

あの頃、秀明といっしよにいながらも、和音は、秀明の額を見ないようにしていた。秀明といっしよにいと、どうしてもそれが目に入ってしまふから、いっしよにいるのがいやだった。

たしかにそうだ。それで僕は、秀明のことを、無理矢理にでも嫌いになろうとしていた……。

客観的に考えてみて、それはひどい話だと、和音は

思った。

あの頃から後、和音は、秀明のそばにいと自分が秀明の「わるさ」に巻き込まれるからと、それを理由に、秀明のことを嫌っていたのだ。

でも、よく考えてみれば、最初に秀明を巻き込んだのは、明らかに和音の方だ。

あの幼い日、和音がひとりです勝手にラジコンに興味を持ち、わざわざそれを見せてくれようとした秀明を

無視して小学生のラジコンに手を出し、そして、その結果、助けてくれようとした秀明にけがを負わせたのだ。自分勝手に秀明を巻き込み、振り回していたのは、むしろ和音だった。

さっきの口振りからすると、そして、和音が「おでこを見せて」と言ったとき、苦笑したところを見ると、秀明の方は、はっきりとあの時のことを覚えているにちがいない。そして、和音が、そのことをすっかり忘

れていることすら、見抜いていたのかもしれない。

和音は、秀明に対して、恥ずかしいような、いたたまれないような気がしてきた。

秀明に、謝らなければいけないと、強く、そう感じた。

和音の思考が、そこまでたどり着いた時、突然、和音と秀明のまわりを静寂が取り巻いた。

ハーバーを出てからずっとつづいていたヨットのエ

ンジン音が、ぴたりと止んだのだ。

まわりの景色を見ると、ヨットは、湾を抜け出し、一面夕陽に染まる外洋に出ていた。

さつき、ミスター・コバヤシは、秀明が「このヨット」と言ったとき、「セイルボート」と言い直した。

それに、出航するとき、エンジンをかけたので、和音は「なんだ、風で走るんじゃないのか」と思ったのだが、つまり、ここまではスクリューできて、ここから

いよいよセイリングを始めるといふことらしい。

和音がそう思っていると、案の定、操舵輪を操つていたコバヤシがコックピットを出てきて、セイルのロープを解きながら言った。

「さあ、文明の時間は終わりだよ」

そのあと、コバヤシは、秀明を呼び、あれこれ指図して手伝わせながら、二枚のセイルを張っていった。

和音は、船尾の手すりに寄りかかりながら、ずっと、そんな秀明を見ていた。

秀明は、真剣な表情でウインチを巻きあげ、風の力に抗してブームを押さえ、Tシャツから出た腕の筋肉を盛り上がらせてそれを固定した。

「オーケー。今日は風がいいから、しばらくは、このままで大いじょうぶね」

二枚目のセイルを張り終わり、コバヤシが言った。



一枚だけ張ったとき、ちよつと揺れた船体も、二枚目で安定し、夕焼けから紺色に変わりつつある海の上を軽快に走りだした。

そんなに風があるようには思えなかったのだが、二つのセイルはめいっぱいにふくらんで「ばたばた」という音を立てていた。

「ミスター・コバヤシ」

その手伝いが終わり、自らも一息ついた秀明がそう

呼びかけると、コバヤシは、人差し指を立てて横に振りながら「ノー」と言った。

「こんな時は、ボブと呼んでください」

「オーケー、ボブ」

秀明は、言い直し、つづけた。

「ボブの力が強いのに、ちよつと驚きました」

コバヤシが理解できるようにと考え、どうしてもこういうきちんとした言い方になるのだ。

「イエース、ネイビーだからね」

「軍隊には、戦争の時に入ったんですか？」

「イエス、その……ん……」

コバヤシはそこで、目をくるくるさせながら、なにかを考えた。日本語の単語を思い出しているようだ。

「……そう、志願。志願しました」

そして、今出てきた湾の方を指さした。

「このパールハーバーを、日本の飛行機が爆撃して、

それで、私、日本と戦わなければいけないと思いま  
した」

「……」

話が思わぬ方向に発展して、和音と秀明は、黙り込  
むしかなかった。

「私のダディやママ、日本からハワイに来て、英語も  
話せず、苦勞しました。だから、いつも、日本のこと、  
懐かしそうに話しました。きれいな山や川の話、秋の

ライス・フィールドの話、春のチェリー・ブロッサムの話……。そんな話聞いて育ったから、私、日本のこと、すばらしい国だと思った。日本のこと、大好きでした。でも、その日本が、私の生まれた国に爆弾落としました。私、日本のこと、本当に憎んだ。日本のこと大好きだから、大嫌いになったんです」

半世紀もの年の差のある、しかも、二世という複雑な立場で育ったコバヤシの本当の心情など、和音など

にはうかがい知ることでもできなかつたが、それでも「大好きだから、大嫌いになった」という言葉だけは、妙に心に響いた。

少なくとも、幼い頃から小学校の低学年くらいの間は、自分は秀明を慕っていたはずだ。それが、なぜ、中学にはいる前くらいから、あんなに秀明のことを避けようとしていたのか？

秀明に傷を負わしてしまったという罪悪感から逆に

そうだったのか、と和音は考えてみた。額の傷を見るのをいやだと思ったのは、そう考えれば筋は通る。

でも、四歳の時のことで、七年も八年も経ってから、そんなに強い罪悪感を持ったりするものだろうか。確かに秀明の額に傷あとは残ったが、そんなに目立つものではなく、ましてや、なにかの後遺症が残ったというわけではないのだ。そこには、なにか、別の要素がある気がした。

「でも、私たち二世は、日本とは戦わせてもらえなかった。日本のスパイだなんて言う人も、たくさんいたから。それで、日本を憎みながら、ヨーロッパで死にものぐるいで戦ったんです」

コバヤシは秀明を相手に、まだ、戦争当時の話をつづけていた。

「でも、戦争が終わって、初めて日本に行ったとき、日本、負けてひどい状態だったけど、それでも、私、



この国がやっぱり大好きだと思いました」

コバヤシはそう言って、また遠くを見るような目で和音の方を見た。昔の恋人のことを思い出しているにちがいなかった。

しばらくそうして和音を見ていたコバヤシは、なにかを吹っ切るように、海の彼方へと目をそらし、「ほら、オーシャン・サンセットです」と言った。

和音が振り向くと、太陽の最後の輝きが、今、水平

線に沈むところだった。

赤く燃えていた空が、見る見る色を失い、レモン色からあせたグリーン、そして濃紺へとつづくグラデーシオンを描き出した。

「きれい」

和音がそう言って手すりにもたれかかると、その隣に秀明が並んだ。

和音は、さつき考えていたことを思い出し、そつと

秀明を見上げた。

秀明に謝らなければ……。

そう思い、口に出した。

「秀明、ごめんね」

「……え？」

秀明は、和音の方をちらりと見て、そしてまた海に目を戻し、言った。

「いいさ、俺だって、はしやぎすぎたことはたしかだ

からな」

どうやら、今日の昼間のことを謝ったのだと思ったようだ。

和音が、自分勝手に秀明を嫌っていたことを、また自分勝手な思いこみで謝ってみても、それが伝わらないのは当然だった。しかし和音は、そのことと、今日の昼間のことは、けっきよく同じことのような気がして、「うん」とうなづいた。

「だけどさ、俺、お前が言ったように、お前の気持ちを考えてなかったわけでもないんだぜ」

「え？」

「昨日から、お前がどんどん落ち込んでくみたいだったから、なんとか盛り上げようと思って、それで……」

それで、和音の気持ちをもり立てるために、あの女の子たちを誘い、あんなふうにはしやいでみせたというのだろうか。

それは、やはり、少し虫のよすぎる言い訳ではないかと、和音は思った。

あれは、いわば、秀明のいつもの「地」が出ただけじゃないか……。

——と、そう思ったことが表情に出たのだろう。和音の顔を見た秀明が、また言った。

「やっぱりな。お前、俺のこと、いつもC調で、無神経なやつだと思ってるんだろ」

えっ？　そうじゃないとでも言うのだろうか……？  
和音は、秀明がなにが言いたいのかわからず、その  
顔を見つめた。

と、秀明は、また、和音から目をそらせた。

「俺さ、そんなふうになるのは、お前の前でだけなん  
だぜ。お前は信じられないかもしれないけれど、高校の  
時なんて、どっちかって言えば、ネクラなやつだって  
思われてたんだ」

もちろん、そんな話は信じられなかった。この秀明が、ネクラだなんて。

「俺、お前がそばにいないとダメなんだ。こんなこと言うの、照れるけど、どこかでお前に頼られてると思うから、いろんなことに自信がもてる。お前の前だと、なにも怖いものがなくなるんだ。俺自身、それに気がついたのは、高校の時だけだな」

和音は、いよいよ秀明がなにを言いたいのかが、わ



からなくなってきた。

「これも、たぶん、お前は知らないだろうけど、俺、高校に入る時と、大学入試の時、二度、進路変更をしてるんだ。まあ、俺のが波はあったにしても、お前と俺は、成績のランクは同じくらいだった。だから、俺、最初は、お前と同じ高校を志望してたんだ。でも、あの頃、どっかお前は、俺のこと避けようとしてたから、それで、俺の方から、志望校を変えたんだ。お前

に嫌われたくなかったからな。でも、高校へ行つて気がついたんだ。俺はお前といないとダメなんだってな。なにをやるにも、自信が持てなくてな……。だから、高三の時、お前と久しぶりにばったり会つて、お前が城北大学へ行くつてきいて、思わず『俺もだ』つて言つてた。また、お前といっしよのところに行きたかつたんだ」

和音は、まだ半信半疑で秀明の話を聞いていた。い

つものように、調子よく話をでっち上げられているよ  
うな気もしたのだ。

「入試直前になっての志望変更だから、教師と親を説  
得するの、けっこう大変だったんだぜ。それに、入試  
科目もちがったから、俺も、必死になって勉強した」

たしかに、秀明が自分と同じ大学を志望するなんて、  
あまりにも出来過ぎた偶然だとは思っていた。もし、  
和音からきいて、あの時点で、秀明が志望変更したと

いうのなら、それはそれで納得がいく。

しかし、本当に、秀明には、そうまでする必要があったのだろうか？

さつき気がついたように、幼い頃、和音が、何かにつけて秀明を頼りにしていたことはまちがいない。そして、秀明も、和音のことを、いろいろ気づかっていた。おそらくたしかだろう。

でも、それは、体が小さくていじめられっ子だった

和音の側にこそ必然性があることで、秀明の側には、べつになんの理由も利益もない関係ではないか。それなのに、秀明は、その関係のために、進路変更までしたというのである。一度は「嫌われたくなくて」、そして、もう一度は「また、いつしよのところに行きたくて」。

もし、秀明の言っていることが事実だとしたら、それはもう「友情」とかいう範囲を越えている話だ。

どうして、秀明は、そこまでしななければならなかったのか？

それが、和音には、どうも理解できなかつた。

そこにはやはり、さつき、和音がやっと思い出したこと以外に、まだ、なにか隠されていることがあるよ  
うな気がした。

「こんなこと、ハワイにでも来なきや、……っという  
か、お前が、そんなふうにならなきや、一生、言うこ

とはなかつただらうけどな」

秀明が言った。

「そんなふうにならなきや」というのは、つまり、「そんなふうに女の子っぽくならなけりや」という意味だろうか。

秀明が、本当のところなにを言いたいのか、和音には、やはりよくわからなかった。

しかし、徐々に星が見え始めた空と、まだぼんやり

と明るさを残し薄く雲の流れる水平線、そして、ところどころにヤシの木らしきものの見える島影：：そんな景色に囲まれて、こうして二人で立っていると、さつきまでの不安定な気持ち、すーっと落ち着いていくような気がした。なんだか、この上ない幸せな出来事の中にいるように、和音には感じられた。

と、その時、また、ミスター・コバヤシが二人を呼んだ。



「ヘイ、ハッピー・ラバーズ！　ウツデュー・ライク・ドリンク？」

和音と秀明が声に振り向くと、コバヤシは、どこから持ち出したのか、デッキのテーブルの上にさまざまな色の酒瓶を並べ、シェーカーを振っていた。

「オー、ボブ。イツツ・ワンダフル」

秀明と和音が近づくと、シェーカーを置いたコバヤシは、三つのカクテルグラスを並べながら言った。

「戦争から帰って、私、最初にしたのが、バーテンダーでした。そこからはじめて、奥さんと二人で店を持つて、それを、いろんなサービスビジネスにふくらませました。だから、セーラーマンとバーテンダーは、私の一生の仕事。奥さん生きてる時、よく二人で、こんなふうにセイリングして、私、カクテルつくりました。これ、死んだ奥さんが、いちばん好きだったカクテルね」

コバヤシは、そのカクテルを三つのグラスに順に注ぐと、そこに、チェリーをひとつずつ入れた。

コバヤシから手渡された、先刻の空の色にも似たそのカクテルに、和音は、パールピンクの唇をつけた。

「……おいしい！」

ミントの入ったそのカクテルは、甘いけれど、のどを通るとき、胸をきゅんとしめつけるような不思議な味がした。

「ボブ、これは、なんというカクテルなんですか？」  
和音がきくと、コバヤシは「私のオリジナル・カクテル。イツツ・ネームド……」と言ってから、そこで、ひとつウインクしてみせ、つづけた。

「エターナル・プロミス」

そして、秀明に向かって、「約束は、果たせそうですか？」ときいた。

すると、秀明は、急に直立不動の姿勢をとり、敬礼

してみせた。

「アイアイサー、キャプテン・ボブ！」

「グーツド！」

コバヤシは、満足そうにグラスを上げた。

その時、突然、和音の耳元で誰かがささやいた。

《やくそくだよ……》

「えっ？」

和音は、その声の主をさがして、きよろきよるとま

わりを見た。

そんな和音のようすを不審に思ったのだろう。秀明がきいた。

「……ん？ どうした？」

「……ううん、なんでも……」

ここは、海の上、ヨットには三人しか乗っていないはずだ。

ましてや、今のは子供の声だった。

それで、和音は、今日の昼間、ココ・ヘッドの公園で聞いたあの小さな女の子の声が、耳に残っているのかと思った。

と——

《やくそくだよ……》

また、その声が頭の中に響いた。

昔、どこかで聞いた声……、それは、和音自身の子供の頃の声のような気がした。

《やくそくだよ、ひでちゃん》

…え？

「ウエディング」は、明日に迫っていた。



- 「公開版」はここまでです。
- ◎ここまでを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。
- ◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。
- ◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。
- ◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はずぐ)、ダウンロードが可能となります。

## 完全版を入手する

# ハワイアン・ハーモニック・ハネムーン

Hawaiian Harmonic Honeymoon

<公開版>

CopyRight 1998 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500